599-418
1200501529585
9
418

工 4F-27

安部磯雄自叙傳

社會主義者となるまで

改造社版

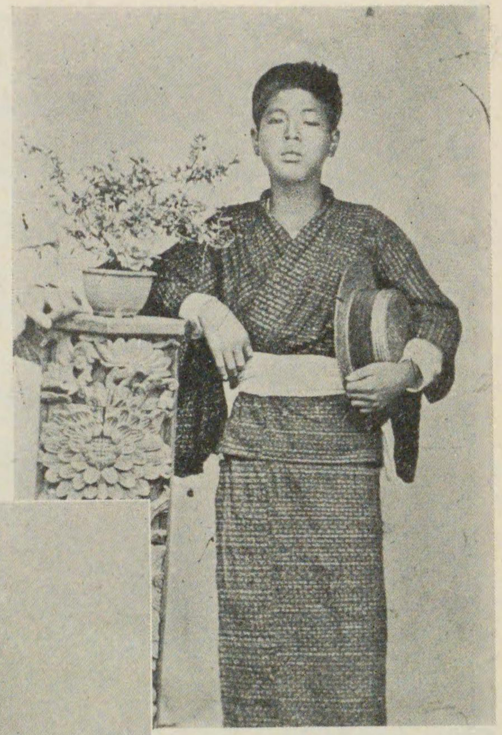
599-418

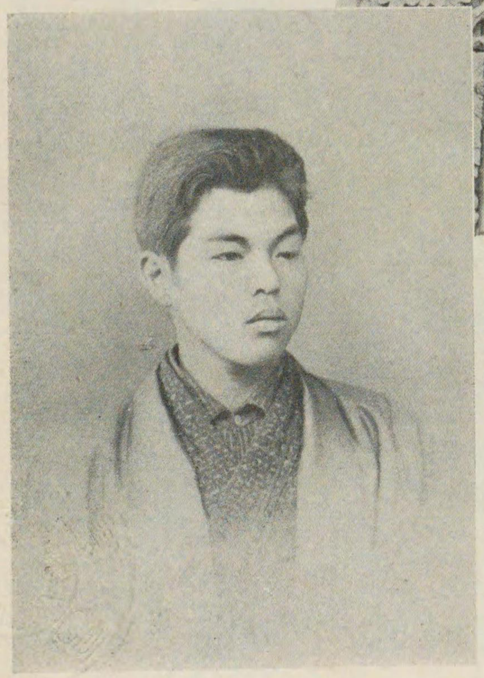
帝國圖書館藏

安部磯雄自叙傳

社會主義者となるまで

昭和七年一月十日 帝國圖書館





（上）明治十二年同志社入學當時

（下）明治十九年同志社ノ教師トナッタ時

199-418

明治卅九年二月東京ニテ撮影小學校時代ノ同級生
（右ヨリ脇山三彌・山座圓次郎・塚本遠道・安部磯雄）

序

私は友人や知人から自叙傳を書いてはどうかといふ勸告を受けたことが幾度あつたかも知れない。勿論自分の經歴を簡單に記述して、これを遺すといふことは子孫に對する私の義務であるかも知れないが、私の生涯には人々の興味を惹くような波瀾もなければ、浮沈もないのであるから、今日まで進んで筆を執る氣になれなかつた。然し私の平凡なる生涯に於ても比較的重要なる事件と思はれること、卽ち私が社會主義者となつたといふことは子孫のためにも、社會一般のためにも、これを說明して置くことが意義あることではないかと考へる。私が比較的早く社會主義者となつたに就ては、其原因として述べねばならぬことが二つある。第一は明治維新の改革により私が比較的安樂なる生活から急轉直下貧乏生活に墜落したこと、第二は京都同志社在學中基督敎的博愛主義の感化を受けたことである。これを一々說明することは結局私の生立から社會主義者となるまでの過程を語ることになるのであるから、寧ろ自叙傳といふ形式を採ることが適當であるやうに思はれた。然し自叙傳は客であつて、私の社會主義觀が主であることを明言して置きたい。

著者

目次

第一章　明治維新……一
第二章　文明の曙光……一四
第三章　漢學塾……三〇
第四章　同志社入學……四二
第五章　寄宿舍生活……四九
第六章　知育の方面……五八
第七章　憶出深き先生……七五
第八章　宗教的感化……八九
第九章　卒業前後……一〇四
第十章　再び母校に歸るまで……一一九
第十一章　再度の同志社生活……一三一

目次

第十二章　岡山時代……一四一
第十三章　洋行前……一五五
第十四章　米國留學……一六八
第十五章　米國學生々活……一七九
第十六章　三年間の收穫……一九二
第十七章　卒業前の一年……二〇六
第十八章　英國滯在……二一七
第十九章　獨逸留學……二三二

第一章　明治維新

私の出生

私は慶應元年二月四日福岡市新大工町に生れたのであるが、此時は德川幕府が將に三百年の覇權を失はんとする危機に迫つて居る際であつた。前年の元治元年七月には京都蛤御門に於て戰爭が行はれ、同年八月には幕府が長州征伐の布告を出した。慶應元年一月には長州の高杉晉作等が再び兵を擧ぐることになつたので、將軍家茂は自ら長州征伐の途に上ることになつた。斯の如く天下は騷然として革新の機運を孕んで居たに拘はらず、私の家庭には依然として封建時代の平和が維持されて居た。私の家は代々黑田藩の士族であつて祿二百石を受けて居た。黑田家は五十三萬石の大名であつたから、二百石の家臣は中流以下の階級に屬するものと言つてよい。私の生れた所は黑門といふ市の關門に接近した新大工町であつて、現在の西公園を去ること約七八町である。此町の住人は士族階級に屬するものが僅か十數戸であつて、其他は足輕階級及び職人階級であつた。然し私の記憶に據れば私共の如き下級武士階級に屬するものでも、其生活狀態は全く現在のブルジョー階級に比すべきものであつた。私が生れた時には兩親の外に祖父母も健在であつた。父の兄は早く此世を去つた

けれども、其妻は寡婦として、私共の伯母として、家族の一員であつた。それに私には二人の姉と一人の兄があつたから、家族の總數は九人であつた。雇人は下男が三人、女中が三人で、母の乳が充分でなかつたので私のためには乳母が雇ふてあつた。私の父は岡本權之丞といふて當時の學問といふ方には何等の素養もなかつたようであるが、武藝の方には極めて熱心であつたように思はれる。屋敷の中には柔道の道場があつて、相當弟子も多くあつたのだから、父は此方面に於て最も上達して居たらしい。其外劍道、槍術、馬術等に於ても當時の卒業證即ち目錄を有して居た。邸内に厩があつたことは今も尙ほ私の記憶に殘つて居る。私が生れた時分父は馬廻り頭であつたといふことを聞かされて居るが、これは今日で言へば護衞兵の隊長に相當するものではないかと思ふ。これを見ても父の武藝が相當仲間の者に認められて居たことが判る。祖父も其頃郡奉行の職に就いて居たのであるから、其當時に於ける一家の經濟は可なり餘裕があつたのではないかと想像される。言ふまでもなく武士の收入は米であつたから自家用以外の米はこれを賣つて金に代へなければならなかつた。其當時に於ては勿論銀行もなければ米穀取引所もないのであるから、信用ある商人の力を借る外はなかつた。私の家では毎年受取る米を敦賀屋といふ酒屋に引渡し、毎月要する金錢は恰も今日銀行から引出す如くに其酒屋から受取つた。若し引出額が預金額を超過するらしく思はれる時には敦賀屋は其都度私の家に對して警告を發して居たようである。言ふまでもなく其當時の武士は極めて金錢に淡泊であつたから、米が如何なる割合で金に交換されるかといふようなことには大した注意も拂はなかつたし、尙又後日のため金錢を貯蓄するといふような考へは全然なかつたらしい。これが武士階級の特質でもあり美點でもあつたに相違ないが、明治維新の激動に遇ふて彼等が急轉直下悲慘なる生活難に陷つたのは全くこれに基因するものと言はなければならぬ。

私の祖先

私は明治維新の激變が如何に私共の一家に影響を及ぼしたかを說く前に、寧ろ過去に溯つて祖先のことを述べて置きたい。現代人には祖先がどんな人であつたかといふ穿鑿は殆んど何等の興味をも惹かないかも知れぬが、封建時代に於ける一の特色は系圖を重んじ祖先を誇るといふことであつた。私の家にも多分に其特色があつた。私はこれがため巧名心を振ひ起したとか勇氣を鼓舞されたとかいふ經驗はないけれども、何となく多少の誇りを感じたことは疑がない。私の祖先は岡本權之丞（代々此名を嗣ぐことになつて居た）といふて、浮田直家及び秀家の二代に仕へて居た。其以前赤松とか浦上とかいふ大名の下で備前、備中、美作地方に活動して居たことは私の家に傳へられて居る記錄によりて明かである。浮田家から領地として與へられた土地に備中の中の莊と備前和氣郡の藤野村があつたことも記錄に見えて居る。私は七八年も岡山に居たことがあるので、度々中の莊を

通過したこともあるし、櫻で有名なる藤野村を訪問したこともある。祖先權之丞は浮田秀家に從つて朝鮮征伐に出かけたのであるが、其戰功に就ては貝原益軒の黑田家譜に左の如き記事が載せてある。

（益軒全集卷之五。二百十六頁）

城主牧使はさしも猛き大將なりしが、一方の城戸をあけ、兵二人召つれて、鎗を提げ突て出けるを備前宰相秀家の家人岡本權之丞といふ者渡りあひ、たがひに鎗にて突合ける。牧使は權之丞が鎗をつき出せじとて、鎗を以てはらひとゞめけるが戰ひつかれて引ていり、城戸を早くふさぎければ權之丞つゞいて入事成かたし、牧使しばらく休みて、又城戸をひらき突て出ける。此度もしばし戰て又引入けるを、權之丞木戸の内へつけ入にしけるに、牧使は手おひ戰ひつかれて、城中の大木の根に腰かけ息つき居たるを、權之丞刀を拔て走りかゝり首を打おとす。此所一方はかた岸にて高きかけなりけるが、牧使が首は下の草むらの内へころび落ける。殘る二人の郎等は牧使が討るゝを見て落行けるを、權之丞追つめ二人共、うちとめ首をとる。權之丞が從者草むらの内をさがして、牧使が首を持來る。權之丞是を實檢にそなふ。生捕の者是を見て、疑もなき大將牧使が首なりといひければ秀家大に悅び、鹽に漬て岡本權之丞を指添、日本へ送り太閤に獻ぜらる。

權之丞名護屋に着しかば、大閤の御前に召出され、諸臣に對し、あれこそ異國第一の猛將牧使を討て首を取し大剛の者よ、あれを見よとぞ仰ける。着給たる赤き道服を權之丞に下され、權之丞まてとのたまひて、内へ入り刀を一腰みづから取出し、持出給ひてするりとぬき、老臣ならびに近習の人に對し、此刀を見候へ、よき刀にてはなきか。いかに面々此刀は所望なるべけれ共、權之丞がごとく異國本朝にも隱れなき高名は、武運による事なれば成かたかるべしと、のたまひて刀を權之丞へ下されける。權之丞是を頂戴して御前を罷立ければ、太閤も立給ひ玄關まで見送りて、庭上に竝居たる諸大名の供の士共多かりしに、太閤又仰けるは、諸士共あれを見よ、異國第一の剛の者、牧使を討たる大剛の者なり。異國本朝までも隱はあらじ。あつぱれ弓矢の冥加ある士かな。あれにあやかれとぞ仰ける。

權之丞は此度のみにあらず、是より以前美作、備前、備中にて數ケ度の戰に度々高名して、國主赤松、浦上より感書を與へられし、かくれなき勇士なり。後に關ケ原に秀家の供しけるが、秀家敗軍故、浪人と成しに、諸大名爭て召抱んとせられしを、長政（黑田）より取分て召れければ、來りつかへて臣となれり。

右の記事は少し誇張に過ぎる樣な點があるかも知れぬが、秀吉から贈られた赤の道服と備前長船の

刀が岡本家の寶物として子々孫々に傳へられたことは事實である。此外に牧使自身が着用して居た陣羽織も丁寧に保存せられて居た。秀吉の道服は私の幼年時代既に原形を留めぬ程腐蝕して居たが、牧使の陣羽織は多少の破損は免れなかつたにせよ、尙ほ其舊態を維持して居た。陣羽織の背中には圓形の大なる紋があつて、毘沙門天が劍を提げて雲に乘つて居る圖を畫いてあつた。此繪には處々に金泥が用ひられて居たが、其燦然たる黃金色は三百年後の今日に於ても餘り變つては居ないようだ。黑田家譜から引用した如く祖先權之丞は關ヶ原に破れて浪人となり、遂に黑田家の家臣となつたのであるが、私共に殘されて居る記錄によれば、祖先は一度紀州德川の家臣となつたことも確なる事實である。其記錄といふのは德川家の家老の名前で祖先權之丞に與へた今日の所謂辭令である。これによれば甲村から何百石、乙村から何十石といふ工合に一々村名と石高を記し、合計一千石を與へることになつて居る。私の父が說明する所によれば、祖先權之丞は最初黑田家に仕へたけれども、或事情のため筑前を去つて紀州德川に仕へ、其子か孫の時代に再び黑田家に復歸したものらしいが、其事情を知るべき資料がないから確かなる判斷をなすことは出來ない。二代目か三代目の權之丞が再び黑田家に歸つて來た時には四百石を與へられて居たといふことであるが、何故それが後年二百石に減ぜられたかといふ理由も私の父は說明して呉れなかつた。父も實際其理由を知らなかつたか、或は知つて居てもこれを說明することを好まなかつたか、それは私には判らない。

生活の激變

德川幕府が倒れると共に大名と武士階級は全く其特權を失ふことになつた。封建時代に於ては大名と武士は政治的及び經濟的特權を有して居たのであるが、德川幕府の沒落と共に四民平等主義が確立するようになつた。然し此平等主義は政治的に見て何等不幸なる結果を生じなかつたのであるけれども、經濟的に見れば其處に幾多の悲劇を現出したのである。大名と武士が其特權の放棄に對して相當の賠償を得たことは事實であるけれども、大名と武士との間には其處に大なる相違のあつたことを考へなければならぬ。今賠償の概略に就て述ぶれば次の如きものであつた。大名は其祿高の約一割を公債で受けたのであるが、武士階級は其祿高の四年分を、半分は公債、半分は現金で受けたのであつた。假に其當時の米價が一石四圓であつたとすれば、私の家の年收は八百圓であつた筈だ。その四年分を一時に受けたものとすれば、合計三千二百圓となるのであるから、私の家は約千六百圓の現金と千六百圓の公債を受けたことになる。勿論其當時に於ける貨幣の購買力は現在に比して十倍以上であつたと思はれるから、若し當時銀行の如き金融機關が存在して居たならば、私の家も預金の利子によりて兎に角普通の生活が出來たかも知れない。然し經濟の道に暗い武士は全く現金を利用する方法に迷はざるを得なかつた。或者は逸早く農村に移住して農業を營んだのであるが、或者は

城下に踏み止つて種々なる事業に從事した。私が五六歳になつた時代には私共の家庭生活には大なる激變が來た。屋敷も漸次縮少されて殆んど三分の一になつた。道場の如きは第一に取除かれてしまつた。雇人の如きも全部解雇して母が一人で家事を引受けることになつた。浴室も取毀ちて、家族は一々町の洗湯に行くことになつた。私共幼少の者は此等の變化を悲觀するようなこともなかつたが、永年安樂な生活に馴れて來た祖父母や父母に取りては大なる悲痛であつたに相違ない。然し此まゝ座食して居れば生活難に陷ることは必然のことであるから、父は何等かの職業を始むる決心をなし、考慮の結果麥粉製造を行ふことにした。勿論其當時のことであるから、機械や動力のあらう筈はない。私共の厩が尙ほ物置として殘されて居たのを幸にこれを利用することになつた。其所に一臺の石臼を備へ附け、父は武藝で鍛へ上げた腕力を利用して毎日臼を挽いた。其麥粉は一々父と兄とが特約店に運んだのあるが、昔し羽振りをきかせて居た武士が此落ぶれた姿はどうだと度々暗涙を催ほしたそうである。然し此製粉業も永くは繼續しなかつた。次に定族全體の事業として營んだのは養蠶である。座敷なども改築して板張となし、隣りの空地まで買入れて桑畑としたのであるが、結局これも中止することになつた。これは單に私共の家族のみでなく、士族階級に屬する大部分が經驗した所のことで、其當時『士族の商法』といふ語は、失敗といふことゝ同意義に用ひられて居た位だ。私の家は此等の事業のために多くもない資本を消費したのであるから、私共兄弟も相當の年齢に達すれば何等か自活の途を講ぜねばならぬようになつた。私の兄は一時『綿打』職工の徒弟となつて居たこともあるように記憶して居る。私の祖父が死んだ時私は既に十二歳位で小學校に通ふて居たが、祖父は臨終の間際父に向つて、『磯雄は縣廳の給仕にでも出してはどうだ』としみ〴〵語つたそうだ。私は當時のことを追想して暗然たるものがある。然し此暗黑に包まれた私共の家庭にも遂に微なる光明が見えて來た。私の父は前に述べた如く武藝一方の人であつて、學問の素養は極めて少なかつたようであるが、不思議にも寫字には長じて居た。これは決して普通の書家といふ意味ではない。勿論大字を書くことも出來たが、其得意とする所は細字であつて、殊に楷書であつた。まだ印刷術の輸入されて居ない明治の初年に於ては書籍は全部木板によりて製造されたものである。從つて木板に用ゆる原稿は一切人手によりて書かれねばならなかつた。私の父は後に其方面に職を求むることになつたが、種々なる事業に失敗した直後福岡縣廳に奉職することになつたようである。祖父が私を縣廳の給仕にせよと遺言したのも全く父が縣廳に奉職して居たゝめであつたと思はれる。父の俸給は極めて少額であつたに相違ないが、兎に角一定の收入を得るようになつたゝめ、辛ふじて一家の生計を立てゝ行くことが出來た。

父母の性格　父の性格として最も深く私の心に印象を遺して居るのは勤勉努力といふことであつた。父の壯年時代に關しては別段語つて吳れる人もなく、私の方から進んで其話を聽くといふこともしなかつたのであるが、前に述べた如く、父が柔道、劍道、槍術、馬術等に上達して居たことを思へば、壯年時代に於ける彼が如何に努力家であつたかゞ想像される。私は稍長ずるに及んで自ら父が努力家であることを屢目擊したことがある。何時の頃であつたか、福岡縣廳は縣内に在る各町村の戸籍帳簿の書替を行ふたことがある。私の父は十數人の寫字生を引率して或地方に出張し、一軒の茅屋を借りて毎日十時間以上も寫字をなした。茅屋の疊は古びて居るのみでなく、寫字生は何れも蚤に責められるのであつた。然し父は平氣で寫字に熱中して居たのであるから、或人が父に『蚤にお困りではありませんか』と尋ねたところ、父は『少しは居るようですが、餘り氣にする程ではありません』と答へたそうだ。後日書籍店の求めに應じて木版の原稿を書くようになつてから、若しそれが急を要する場合には夜を徹することが殆んど普通のことであつた。殊に夏の夜机を蚊帳の中に置き、ランプの光りで終夜寫字して居るのを見た時私は子供ながらにも父の努力に驚いた。これは父が鐵石の如き體格を有して居たことにも因るであらうが、一面彼の意力が如何に强固であつたかを物語つて居る。此事實は彼の晩年に於ても實によく證明されたのである。私が大正元年頃東京の郊外なる巢鴨に住んで居た時父母も亦同居して居た。其時父は八十歳の老人であつたに拘はらず、青山に生田流の琴の師匠があるのを聞き毎週二回其所に通ふて琴の稽古を初めた。私の姉が幼少の頃から琴を習ふて居たので父も早くから琴に對する趣味を感じて居たらしい。諺に六十の手習といふことがあるが、父は八十歳で琴を習ひ始めた。私共はそれが何時まで續くことかと怪んで居たが父は毎回徒歩して青山に通ふた。六段の曲を習得するに約半年を要したといふのであるから、何人もこれを聽て其辛抱力に驚かぬものはなかつた。然し父には運動家通有の缺點があつた。それは大食といふことであつた。父は酒も煙草も一切用ひなかつたのであるけれども、大食といふことは寧ろ彼の誇りであつた。正月の餅を四十個喰つたとか、汁粉を十二杯平げたといふような手柄話は度々聽かされたものだ。父が若し晩年に於て暴食を加減して居たならば一層の長壽を保有し得たかも知れない。彼が八十五歳で逝たのは餘りに物足りないように思はれる。父は極めて溫厚の人であつた。私共兄弟姉妹は殆んど父に叱られたといふ記憶を有して居ない。殊に私共が父の美質として記憶して居ることは彼が常に樂觀的であつたといふことである。然らば父は交際的であり談論家であつたかといふに決して左樣ではなかつた。寧ろ人の前に於ても、家庭に於ても寡言であり遠慮勝であるように思はれた。然し如何なる悲境に在つても彼の顏は晴々として一點の曇がなかつた。或時の如きは母から財政窮迫を訴へられ、多少怨言

を聽かされた時にも父は其顏色を變へることすらしなかつた。これは修養の結果であるか、或は又天賦の素質に因るのであるか、私はこれを判斷することが出來ない。母は父とは全く反對の性格を有して居た。一言にして言へば母は極めてヒステリックであつた。私のみならず、他の兄弟達も母に叱られた經驗を多分に有して居る。從つて私共は母に親むといふ氣持になれなかつた。然し母のヒステリーは發作的であつて、常習的であつたといふ譯ではない。これは一種の病氣であるから、母自身もこれがため少からぬ苦痛を感じて居たことであらうと思ふ。元來母はヒステリックではなかつたけれども、或時の出產に養生を誤つたゝめ、不幸にして此病症を惹き起すに至つたといふことを聞いたのであるが、若しこれが事實であるとすれば、全く同情に堪へない次第である。然し此缺點を除きさへすれば、母は實に主婦としての完全なる資格を具備して居た。私の長姉は父の先妻の子であつて、私の母は二人の男兒と三人の女兒を生んだ。今一つ私の家庭を複雜ならしめた事情がある。元來私の父は二男であつたから、他家の養子となるべき身分であつた。然るに岡本家を嗣いだ父の兄は妻を迎へて間もなく死んだのであるから、私の父は當然其相續者となつたのである。封建時代には其習慣として相續者は被相續者を親と呼ぶことになつて居るから、私の父は其兄を父と呼び、其未亡人たる嫂を母と呼ばなければならなかつた。私の母が岡本家に嫁した時には先妻の子がある上に、僅か五六歲の年長者たる嫂に母として仕へねばならぬといふ不自然なる事情が存在して居た。斯る複雜なる家庭の裡に飛込んで來た私の母の苦心に對して充分なる同情を禁じ得ない。母が義理の子に對して如何に親切であつたかは親戚の間に評判となつた位である。祖父母が逝き長姉が嫁するに及び、一家の財政は全く母の手によりて處理されることになつた。母が一家の實權を握るようになつた時は既に岡本家が窮乏の途を辿らんとして居る際であつた。此貧乏世帶を引受けて、兎に角六人の子供を其行くべき所まで行かしめたのは主として母の力であつた。

第二章　文明の曙光

小學校　私が生れた頃の教育は全く日本式であつて、今日の所謂教育機關なるものは殆んど存在して居なかつた。言ふまでもなく男子は武藝のために其全力を注いで居たのであるから、學問のために時間を費すといふことは極めて稀であつて、學問と言ふても單に讀書と習字に限られて居て、今日の如く數學や理化學などを教ゆる機關もなければ、又その要求もなかつた。しかも讀書や習字も士族階級の獨占であつて、農工商の階級に屬する者は殆んど此簡單なる教育を受くる機會さへなかつた。福岡には藩主の設けた修猷館といふのが唯一の學校であつて、其他漢學者が開いて居た私塾なるものが其當時の教育機關であつた。然し此等の學校や私塾に於て教ゆる學課は單に讀書であつて、其教科書は論語とか孟子とかいふ難解の書物であつた。其教授法に至りては實に不自然なものであつた。私は暫時修猷館に通學したこともあるが、教師は十一二歳の兒童に論語や孟子の素讀を教ゆるのであつて、何等其意味を説明せずに、先づ其讀方を教ゆるのであつた。私は八九歳の頃から毎日論語の素讀を祖父に教へられたものだ。然し私が八九歳に達した頃には泰西式の小學校が何處にも設立されるようになつた。教科書の如きも兒童相應のものが編纂され、學科も讀書の外に數學、歴史、地理、理化、習字等が加へられることになつた。私が或日學校から歸つて、「會話篇」といふ教科書の中に在る『烏はかァ〳〵と言ひ、雀はちゆう〳〵と鳴く』といふ所を讀んで居るのを聽いた私の祖父は『學校ではソンナ馬鹿なことを教へるのか』と大に憤慨したことを私は今尚ほよく記憶して居る。明治維新は政治維新であつたと共に教育維新であつたことを忘れてはならぬ。私は幸にして學齡兒童となるや否や新しき教育を受けることが出來た。勿論小學制度の創立された當時のことであるから、種々なる點に於て多くの缺陷があつたに相違ないけれども、兎に角教育らしい教育を受けることが出來たのはどれだけ私の爲に幸運であつたかも知れない。私の通ふた小學校は私の家から極めて近い當仁小學であつた。學校の位置は唐人町に在るのであるけれども、唐人小學校では變だから、文字だけは當仁に改めたものらしい。私は學校に行くことが何より樂しみであつた。當時數學科用として兒童は各石盤と石筆を携へて行くのであつたが、これを風呂敷に包み、更に辨當を提げて毎日學校に通ふといふことが無上に嬉しかつた。

轉校　私は何年位當仁小學に通ふたか明瞭な記憶はないけれども、餘り永いことではなかつた樣に思ふ。幼少であつたためでもあらうが、其學校生活の記憶がハツキリして居ない。同級生のことも

ボンヤリと頭に殘つて居るに過ぎない。要するに競爭の刺戟といふものがなかつたため、私は比較的呑氣に學校生活を送つて居たのではないかと思ふ。其當時藩校の修猷館は廢止されて、其跡に師範學校が新設され、從つて附屬小學校も出來た。小學校は僅に二組だけであつて、師範學校の教師が主として教授するのであるから、それが他の小學校に比して遙に優秀であることは言ふまでもない。私は二三年當仁小學に學んだ後附屬小學に轉學した。これが父の意志であつたか、或は私自身の希望であつたか、今は何等の記憶がないけれども、これが私の生涯に一回轉を與へる動機となつたことは爭はれない。當仁小學に於ける私は極めて學問に無頓着であつた。勉强といふよりも寧ろ遊戯に耽るといふ風であつた。然し附屬小學に轉じてからは私の態度が全く一變した樣に思ふ。其理由に就て私は二つのことを述べることが出來る。第一は四十人の同級生が或意味に於ける各小學の選拔生であつたといふことである。第二は凡ゆる競爭制度が設けられて居たといふことである。小學生をして激烈なる競爭をなさしむるといふことは確に弊害であるに相違ないけれども、其半面に利益のあることをも考へなければならぬ。私は今玆に競爭の利害を論ぜんとするのではない。單に其事實を語らんとするのである。附屬小學では毎年三回位試驗を行ふたのであるが、其成績は教場内に於ける掛札（黑き小き木札に白字を以て各生徒の姓名を記したもの）の順序により て示される。生徒は其れにより て席順を改めねばならぬことになつて居た。成績發表の日はなるべく早く登校して其掛札を見るといふことが何よりの樂しみであつた。進級試驗の場合には賞品が與へられた。それは賞牌といふもので、今日のメダルである。これは西洋のメダルを眞似たものであつたか、或は我國の獨創であつたか、私はこれを斷定することが出來ない。賞牌は級によりて其形を異にする。卽ち五級は五角、四級は四角、三級は三角、二級は半圓、一級は圓形といふのであつた。此賞品は級中の第何位までとか、成績何點までとかを規定して與へられたのであつた。或時は全縣下の小學校から代表者を集めて競爭試驗を行つたこともあつた。其時の賞品は實に振つて居る。男兒の方は紅白ダンダラの羅紗の帽子であつて、額に櫻花の徽章が附いて居る。其櫻花が三個あるのは一等、二個あるのは二等、一個あるのは、三等といふ工合に等級が設けてあつた。女兒には簪を賞品としたのであるが、これも櫻花の數によりて等級を定むることにした。時には縣知事などの前で臨時試驗が行はれたこともあるが、其場合には又特別賞品が與へられた。試驗の方法として私に面白く思はれたのは、生徒を一人々々試驗室に入らしめて口頭試驗を行つたことであつた。其場合には生徒の父兄も隨意に列席することが出來た。生徒の控室には監督者が居り、試驗を受けた生徒は再び控室に來ることを許されないのであるから、試驗官は同一問題で生徒を試驗することが出來る。問題を與へて答案を書かしむる場合には生徒は多少考へ

る餘裕があるけれども、口頭試驗にはこれが出來ない。小學兒童がどれ位よく問題を理解して居るかを知るには口頭試驗は最も有効なる方法ではないかと思はれる。殊に父兄の面前に於てこれを行へば、教師が決して生徒を不公平に取扱ふものでないことを彼等に合點せしむることになる。以上述べた如く私の受けた小學教育は徹頭徹尾競爭主義であつた。生徒は何れも活動的であつた。學校に行くことを何より樂しみにして居た。然し私共の競爭は決して野卑なるものではなかつた。私共は少年であつたから時には喧嘩をやつたこともあるけれども、これは全然席順から生じた嫉妬心のためではなかつた。私共同級生は時により五六名乃至十數名相集まりて溫習會を催ほしたり終夜稽古を行つたりしたことがあつた。終夜稽古は元來夜を徹して勉强する意味であるが、私共は普通午前一時か二時には就眠したのであつた。翌朝は平常の如く學校に出席したものである。親達が斯ることを普通の事として默認して居たのは維新前に於ても武藝の練習に終夜稽古が忍耐力を養ふ方法として是認されて居たからである。私の家に柔道の道場があつた時代には折々終夜稽古の行はれて居たことを記憶して居る。つまりこれが習慣となつて私共の小學時代まで繼續されて居たのである。これを見ても附屬小學に於ける私共の競爭が如何にフェヤー、プレイであつたかを推測することが出來る。

同級生　私共同級生は僅に四十人に過ぎないが、附屬小學を終ると同時に東京や京都に於て學業を繼續した者もあつたから、自然に同級生間の交渉は疎遠になつた。卒業後約三年を經て同級生が鄕里福岡に再會し、寫眞を撮つた時にも其數は僅に十五人位であつたと記憶する。其中で今日まで生存して居るものは二三人しかない。同級生中最も廣く世間に知られて居たのは山座圓次郎である。彼が外交家として名聲を博して居たことは多く語る必要はない。彼は私よりも一年歲下であつたけれども、常に級中の三四位を占めて居た。性質は磊落であつたけれども決して粗暴でなく、少しも不良の點はなかつた。彼も私も負けじ魂が强かつたので屢喧嘩をやつた。或時の如きは山座が同志を語らつて私の横暴を懲すといふ噂さがあつたので、私も又味方を集めて大衝突を起したことがあつた。然し僅か十三四歲の幼年が喧嘩するのであるから、武器などを用ゆる筈はない。結局學校側にも知れないで此衝突は無事に終結した。一時私は他校に轉ずることを父に申し出たこともあるけれども父は斷じてこれを許さなかつた。卒業する頃には山座と私との間には親密なる交際が行はれて居た。後年私が京都の同志社に學ぶようになつた時にも私は夏期休暇毎には必ず歸鄕した。二年目の夏には屢山座と會合した。其時彼は東京遊學を考へて居たので、英語の準備をなすため私の助けを請ふた。私は勿論これを快諾した。彼の心は全く明月の如くであつて、何等の虛飾もなかつた。彼は明晰なる頭腦と頑健なる體格を有して居たに拘はらず、上京後飲酒の癖に囚はれたため、それが原因となつて、天

下の輿望を負ひながら早逝してしまつた。實に痛惜の情に堪へない。今一人の同級生は不破彦麿である。彼は山座と同じく東京帝國大學の出身であつて、卒業後共に役人となり、常に雁行して進んだ。山座が外務省の參事官であつた時不破は農商務省の參事官であつた。然し不破には不慮の禍が襲ふて來た。彼が官命によりて英國に滯在して居る時彼は不幸にして脊髄病に犯された。歸朝後彼は辭職して專心保養に勤めたため殆んど全快を見るに至つたけれども、彼が數年官界から退隱して居る間に山座は局長となり、遂に支那大使となつた。不破は佐賀縣知事となり、後に下關市長となつたけれども、一たび健康を害した彼は數年前遂に不歸の客となつた。私が最く長く親友として交際して居るのは塚本道遠である。世に竹馬の友といふ語があるけれども塚本と私の關係はそれ所ではない。塚本と私は其住宅が接近して居たゝめ、二人がまだ乳母に負はれて居る時分からの友人であつた。當仁小學附屬小學時代に於ての同級生であつたのみでなく、後には同じ漢學塾で學んだこともある。塚本の父は明治維新の後にも軍醫であり、且つ代々醫を業として居るのであつたから、家計にも餘裕があつた。私が後年歐米留學に出かけた時私の父は度々塚本家から金の融通を受けたのであつた。私は歸朝後五六年の間にこれを返濟したけれども、塚本家の好意に對しては今も尚ほ感謝して居る。私が同志社に於てクリスチャンとなつた後塚本も亦東京に於てクリスチャンとなつた。塚本は東京帝大の農科を出てから今日に至るまで靜に教育事業に終始して居る。此點に於ても私は又塚本と同一の途を辿つて來た。私は約廿九年間早稲田大學の一教師として働いて來たのであるが、最近數年間に於て私は全く異なつた途に進むことゝなつた。然し塚本は濱子夫人と共に其全生を教育のために捧げて居る。私は六十七年間の親交を續けて來た塚本に對して敬意を表せざるを得ない。

教師　概して小學時代の先生は中學時代や大學時代の先生よりも懐かしいといふのが事實であらうと思ふ。私の經驗は正に其通りである。當仁小學時代の先生中今尚ほハッキリと記憶に殘つて居るのは川端先生と眞野先生である。川端先生は漢法醫であつたが、小學制度が布かれるやうになつてから讀方の先生になられた。漢學の素養があるのみでなく、詩人としても可なり知られて居た。然し性質は激情的で、度々それが爆發するために、生徒は一般に恐い先生だと考へて居た。これに反して眞野先生は極めて溫厚であつた。先生は主として數學を擔任されて居たようである。其當時の先生は多分速成的に師範教育の講習を受けたものであると思ふが、附屬小學の先生は何れも東京高等師範學校出であつたから、其當時に於ける第一流の先生であつたことは言ふまでもない。私共の級の專任教師と言ふても差支ない程の先生が三人あつた。それは丹羽口了二先生、二川華先生、大石猪八郎先生であつた。私共は其當時十三四歳であつたが、先生達も廿三四歳の青年であつたのではないかと思はれた。

私共が卒業する一年前に丹羽口先生と二川先生は辭職して福岡を去られることになつたが、私共は心から其離別を悲んだ。送別會を開くといふ計畫を立て得る程の年齡でもなかつたから、私共は各送別文を書いて兩先生に送つた。大石先生は其跡を引受けて私共の主任教師となられた。斯の如くして私共の小學時代は經過したのであるが、約四十年後私共數名の同級生が東京に居住するやうになつた時、或會合の席で私共は小學時代の懷舊談を始めた。大石先生は不幸にして早逝されたけれども、丹羽口、二川の兩先生の消息に就ては何等知る所がなかつた。私は京都に於て一度二川先生に再會の機會を得たけれども、其後のことに就ては何も聽かない。丹羽口先生に關しては殆んど何の手掛もなかつた。然し私共は種々なる手段によりて搜索を始めたのであるが、幸にして私共の希望は遂に達せられた。卽ち丹羽口先生は鄕里の金澤に居られ、二川先生も鄕里の愛媛縣に居られることが判明したのであるから、其當時在京中の山座、塚本、脇山と私の四人は一所に撮影して、手紙と共にこれを兩先生に贈つた。兩先生からも早速喜びの返書が來た。私は永井柳太郎氏第一回立候補の時、應援のため金澤に至つた序を以て丹羽口先生を訪問したのであるが、先生は喜んで私を迎へられ、昔話に時の移るのを忘れる程であつた。先生は私共が差上げた送別文を四十五年以上を過ぎた其時まで大切に保存して居るのだといふて私にそれを示して下さつた。其後先生は暫らく東京に住居された。先生には二人の令息があつて、一人は海軍、一人は陸軍の士官であつた。海軍々人である令息は其當時海軍大學に居られたのであるから、先生は其令息の家に寄寓されて居たのであつた。先生は二三度私の家に來て下さつたこともあつた。一度は私と妻とが先生を帝國劇場に御案內したこともあつた。先生は實に溫厚の君子であつて、昔の通り私には何の遠慮もなく種々面白いことを話して下さつた。先生が福岡に來られたのは明治十年頃であつたように記憶する。先生は赴任すると同時に辭令を受くるため縣廳に出頭すべしといふ通知を受けたのであるが、全く禮服の準備がなかつた。知人もなく友人もなかつたから一時これを借用するといふことも出來ない。遂に其窮狀を宿屋の主人に訴へられたのであるが、主人は家に代々傳へて居る上下があるから、これを着用なされては如何であるかと答へたそうだ。先生は早速これを着用に及んで堂々と縣廳に乘り込まれたといふことである。前に述べた通り先生は高等師範の出身であつて、遙々東京から福岡に來られたのであるが、其時の俸給は月額十二圓であつたそうだ。これも私が先生から親しく承はつた話である。先生は其後數年にして九州に居られた令息の家で逝去された。私は先生の生前に度々拜顏の機會を得たのであるから何等思ひ殘すことはない。唯二川先生の生前に今一度拜顏の機を得なかつたことは遺憾至極である。大石先生は最も早く不歸の客となられたので、如何ともすることが出來なかつたけれども、偶然に其令息と親交を重ねるようにな

つたことはせめてもの慰藉である。令息は大石多喜夫氏であつて、熊本の高等工業を卒業した後佐世保市役所の土木課長となつて敏腕を揮ふたのであるが、今は長崎縣北松浦郡佐々村に在る神田鑛業所長として活躍して居る。私は一昨年初めて多喜夫氏から手紙を得たのであるが、昨年卽ち昭和六年四月私が九州遊説に出かけた時佐世保に立寄つた序を以て、多喜夫氏の案内により神田鑛業所を訪問したのみでなく、數百名の坑夫を前にして演説を試みた。多喜夫氏は非常なる努力家であるのみならず、驚くべき手腕家である。私は大石先生の後に多喜夫氏のあることを考へて實に欣喜の情に堪へない。

戰爭氣分

西南戰爭の當時私は既に十三歲であつたから、其時分の出來事は可なり明瞭に私の記憶に殘つて居る。西南戰爭の前年には佐賀の亂があつた。一時は佐賀兵が國境を越えて筑前に攻入るといふ噂があつたので、私の家では宅地に大なる穴を堀つて衣服や家具を藏匿したのであつた。私の家から極めて近き所に黑門といふ昔の關門がある。其側に私の乳母であつた者が小店を開いて居た。それは又人力車の立場になつて居た。私は乳母に親んで居り、乳母も亦私を實子の如く愛して居たのであるから、私は度々其店を訪問した。時には其所に宿泊することもあつた。佐賀の亂の時には戰場に赴く兵隊も、戰場から送り返される負傷者も悉く此黑門を通過するのであるから、晝夜の別なく實に騷々しいことであつた。これが私の好奇心をそゝつたものと見えて私は度々店頭に坐して其光景を眺めて居た。佐賀兵が筑前に侵入したといふ噂のあつた時二三十名の近衞兵が黑門を通過して佐賀の方向へ進まんとした。現在の兵隊はなるべく敵に目立たぬようカーキー色の服を着けるのが殆んど原則になつて居るが、其時の近衞兵は黑の上衣に赤のズボンといふ派手やかな服裝であつた。丸で樂隊の行列見たようであつた。其當時の交通機關といへば人力車以外に何もなかつたのであるから、軍隊は急を要する場合に限り人力車を利用するのであつた。斯る時には車夫は疾走することを强ひられるのであるから、近衞兵の一隊が來るのを見て車夫の中には車を置去りにして姿を隱す者もあつた。私の居た所は人力車の立場であるから十數臺の人力車が竝んで居た。近衞兵は否應なしにこれに乘つて驅け出した。然し一二臺の車には車夫が居ない。士官は困つたといふ風をして周圍を見廻して居たが、丁度其處に五十歲許りのヨボ〳〵した田舍爺さんが通りかゝつた。士官は其爺さんに車を引くことを嚴命した。爺さんは幾度も叩頭して斷つたが、士官はすらりと劍を拔いて爺さんの目の前につきつけた。可愛そうに爺さんは梶棒を握つて走りだしたが、後で聞けば二三町走つた後遂に動けなくなつたといふことである。佐賀の亂がやつと鎭定したかと思ふと、其翌年は又西南戰爭で大騷ぎだ。福岡にも西鄕に味方する者が少なくなかつたから、私共の足下から何時火が燃え上るかも知れぬといふ

危險が時々刻々迫つて來た。或夜のこと私共が既に寢靜まつて居る時頻りに門を叩くものがある。これは私の姉婿なる淺香龍起であつた。彼は次の如き情報を齎らした。卽ち福岡に於ける西鄕一味の者は今夜いよ〳〵兵を擧げ、一隊は兵營（舊福岡城）、一隊は縣廳を襲擊するといふことになつて居るから一刻も早く此所を去りて親戚村上家に避難せよとのことであつた。村上家は伊崎といふ漁村に在つて後は西公園を負ひ前は博多灣に臨んで居るから、いざといへば舟に乘りて避難することも出來る。此情報を聽いた私共は素早く準備に取かゝつた。荷物などを持出す暇もないから、唯僅ばかりの手荷物だけを携へることにした。私に取りて大切なるものは學校用品の外附屬小學で得た賞牌、帽子、書物、風呂敷等であつたが、これを一纏にして自ら携帶した。村上家までは僅に六七町の距離であるから、私共は各手荷物を携へながら徒步した。其時祖父母は既に死亡し、二人の姉は結婚し、父と兄とは家に殘つてこれを守ることになつたから、村上家に避難したものは母、伯母、妹二人と私とであつた。村上家に至れば淺香及び其他の親戚からも既に多くの人々が集まつて居た。合計三十人位は居たように記憶する。時は既に夜半を過ぎて居たが、私共はどうなることかといふ心配のため一人も眠るものはなかつた。午前四時頃舊城の方角に當り空が眞赤になつた。いよ〳〵火蓋が切られたなと考へた。不安の一夜は斯の如くして經過したのであるが、翌朝の情報によれば西鄕一味の計畫は全く失敗に歸した。城内に在つた兵隊は近代式の武器によりて容易に敵兵を擊退することが出來た。從つて縣廳も大した損害を蒙らずに濟んだ。それで騷動は大體に鎭靜したのであるけれども、福岡には今日の所謂戒嚴令が布かれたのであるから、男子の通行には充分なる取締りが行はれた。殊に舊士族の家は一々搜索されるといふ噂があつたので、私の家では秀吉からもらつた家傳の寶刀につき少からぬ不安を感ずるようになつた。これを家に留めて置くよりも、寧ろ村上家に持來つた方が安全であらうといふことに衆議一決した。然し誰がこれを持つて來るかといふことが難問であつた。父や兄が其任に當ることは極めて危險である。よしそれが婦人であるとしても、此際刀を携へ行くといふことになれば官憲の嫌疑を受くることは必定である。種々なる意見が戰はされた後、結局私の伯母が其任に當ることになつた。伯母は騷亂の起つた翌日家に歸つて首尾よく其刀を持つて來た。伯母は襦袢の上に刀を背負ひ、其上に衣服を着け、直立の姿勢で村上家まで六七町の途を步行したのであつた。村上家は殊に私に取りて密接なる關係があるから、此際それに關して少しく述べて置くことは其後に於ける私の履歷を語るに多少便宜であらうと信ずる。私の祖父は岡本家の養子であつて其實家は卽ち村上家である。祖父には兄と弟があつた。祖父が岡本家を嗣いだ後間もなく兄が死亡したゝめ祖父の弟が其後繼者となつた。其後繼者に一子があつて其名は淸であつた。私共が避難した時分の主人は此淸

であつた。家族は清夫婦の外に老母と三人の子供であつた。子供の内二人は女子で、末子は男子であつた。私は丑の年の生れであるが、丑年の者は元氣旺盛で兄を凌ぐといふ迷信のため私は生れると間もなく村上家の養子になつたといふのである。これは單に名義に過ぎないけれども、若し村上家に男子が生れなかつたならば、私は本當に今日でも村上姓を名乘つて居たかも知れない。村上家の祖先は代々三河の田原に住んで居た。數代以前の祖先は洋式の砲術に長じ渡邊華山と親交があつたとも言はれて居るから、其當時に於ける進歩派の一人であつたと考へられる。其子孫が黑田家に仕へるようになつたのも砲術が其理由ではなかつたかと思ふ。村上家は二百五十石を給與された。伊崎は一漁村に過ぎないけれども、村上家は其一角に可なり廣大なる土地を占めて伊崎の殿樣と呼ばれる程の家柄であつた。然し明治維新と共に家運は傾き、私共が避難した頃には邸宅は縮小され、昔の面影は全く消へ失せて居た。當時私は十三歳であり、村上家の長女は十一歳であつて、何れも小學時代のことであるから、他の親戚である同年輩の者と一所に學校遊びなどして避難中の退屈を慰めたものだ。私が村上家の養子となることは前に述べた如く沙汰やみとなつたけれども、遂に私と村上家の長女とが婚約をなすに至つた經路に就ては後に述べることにする。福岡の治安も漸次回復することになつたから、私共は約一週間の後に歸宅した。暫くして西南戰爭も終りを告げ、世は太平となつたけれども、私共少年の頭には尙ほ多くの戰爭氣分が殘つて居た。私共の間には盛んに戰爭ごつこが行はれ、而もそれは極めて冒險的のものであつた。町と町との少年の間には屢石合戰が行はれた。双方とも木炭の空俵に多くの小石を拾ひ集め、十四五間乃至二十間位を隔てゝ盛にこれを投げるのである。これがため數人の負傷者を生じたことも私はよく記憶して居る。其外には犬の咬み合せが盛に行はれた。兎に角明治十年前後に於ける青少年の頭の中に殺伐の氣風が植付けられて居たことは疑なき事實である。

第三章　漢學塾

質素の生活

私が附屬小學を卒業したのは明治十二年三月であつて、十五歳の時であつた。其當時福岡には中學がなかつたのであるから、私共は其行くべき方向に迷つた。若し其當時中學が設立されて居たならば、同級生の大部分は必ずそれに入學して居たに相違ない。然し小學から中學、高等學校から大學に進むといふ途が開けて居ない其當時に於ては勿論私共に何等の不平もなければ失望もなかつた。殊に財政的に困難を感じて居る私の父が私に小學以上の教育を受くる機會を與へ呉れるなどとは私は全く期待して居なかつた。若し私が其當時十八九歳であつたならば、小學教師となる目的を以て師範學校に入學して居たかも知れない。若し左樣でなかつたならば祖父の遺言通り縣廳の給仕になつて居たかも知れない。私は其當時どんな希望を懷いて居たか全く記憶がない。父が私に就いてどんな期待をもつて居たか、それさへも不明である。若し適當な養子の口でもあれば、それで私の問題を解決しようといふ位のことであつたらうと推察する、兎に角私は一生の運命を決すべき恐ろしき岐路に立つて居た。私は今考へても何となく一種の危險を感ぜざるを得ない。何分私はまだ十五歳の少年であつたから、何れの途に向ふとしても敢て急ぐ必要はないといふので、私は當分漢學塾に入ることになつた。私は附屬小學に在る間も餘暇を利用して漢學をやつた。國史略と日本外史位は樂に讀むことが出來た。此の如き準備があつたことも私が漢學塾に入る一つの理由であつた。漢學塾といふのは大西先生の私塾であつた。先生は私の家に極めて近き鳥飼といふ所に住んで居られたが私の父とは知合である。劍道に於ては私の父と同じく三宅先生の門弟であつたが、學問の方では私の父は大西先生に教へを受けた。先生は維新後福岡から約六里隔れる絲島郡（當時は志摩郡）の加布里村に退隱し小學校長として勤務された傍ら私塾を開いて子弟の教育に當られたのであつた。私の兄も其塾生であり、其机や蒲團を殘したまゝ歸宅して居たのであるから、私が彼に代つて入塾するには極めて便利であつた。私は最初と最終の場合のみに人力車を利用したけれども、其他の場合は一切徒歩で六里の道を往復した。私は先生と夫人に入塾の挨拶をなし、先生は私を塾生に紹介して下さつた。先生は子福長者であつて、令息が三人令孃が四人であつたように記憶して居る。第一の令息は既に一家を持つて居られたが、其他は悉く先生の家に居られた。第三女の小夜子さんは其時十六歳であつたが、先生を校長として居る小學校の教師であつた。私が前に述べた縣内に於ける優秀生の競爭試驗で一等に當選し、三個の櫻花で出來た簪を獲得したのも此小夜子さんであつた。第二番の令息は十四歳であつたが、

これも非常の秀才であつた。今支那通として知られて居る大西齋氏は先生の令孫である。先生は其當時漢學者として一家をなされて居たのであるから、其學才を子孫に遺傳されたことに何等の不思議はない。殊に夫人は溫順其ものであつて、多くの令息と令孃を養育しながら、尙ほ私共塾生のために何かと氣を付けて下さつた。私共は嘗て大聲を發して令息や令孃を叱られたことを聽いたことがない。極めて健康で、顏には常に福德圓滿の相が現はれて居た。塾生は僅に七八名位であつて、比較的廣き家の二室を占領して居た。私より少し後れて塚本道遠も入塾したのであるから、初めて父母の家を離れた私も左程淋しさを感じなかつた。塾生の中には既に故人となつたものもある、或は全く消息を絕つたものがあるが、今尙ほ健在であるものは塚本と秦傳次郎の二人である。秦は私より二つ年上の十七歲であつたが、自ら勉學すると同時に午前中は小學校で敎鞭を執つて居た。塾を出た後は福岡縣に踏み止まつて敎育に從事し、或時は縣視學になつたこともあつた。一時東京に住んだこともあつたといふが、私共は久しく再會の機を逸して居た。私が昭和六年四月九州遊說の途に上つた時鄕里福岡に二日間滯在することが出來たのであるが、當時福岡市の收入役になつて居た秦は親切にも私の旅館を訪問して呉れた。實に五十二年後の再會である。私も白髮であるが、秦の髮と鬚も眞白になつて居た。然し紅顏の美少年であつた秦の晴やかな眼ざしは尙ほ昔しを偲ばせるものがあつた。私共の談話は主

として知足堂（塾の名）に關することであつた。私の塾生々活は僅に三ヶ月に過ぎなかつたけれども、勉學其他の點に於て有益なる經驗を得たのである。私共塾生は全く獨立生活を原則としたのであるから、部屋の掃除や洗濯は勿論のこと、三度々々の食事の準備も自ら行はねばならなかつた。卽ち私共は順番によりて交る交る委員となり、其委員が食事の世話をすることになつて居た。塾生は各自に二三升づゝの米を買ひ來り、これを風呂敷に入れて仕舞つて置く。委員は每日各自から米四合を徵發して、大きな釜でこれを炊く、各自は又小き飯桶を有して居て、委員は其飯を平等に飯桶に分配するのである。十六七歲の少年に對し一日四合の飯は必ずしも少量ではないけれども、副食物が少ないのと、間食をしないことになつて居たから、塾生は大分參つて居たようである。副食物としては朝と晝が漬物で、晩は魚類か貝の味噌汁が供された。塾生が何故此の如き極端なる緊縮生活をやつたかと言へば、これは大西先生の少年時代に居られた私塾の規定であつて、先生はこれを修養の一方法であると考へられたらしい。私共は勿論これに對して不平を唱へるやうなことは夢にも思はなかつた。其時代に於ける私共の生活程度は極めて低いものであり、殊に維新後に於ける士族階級の沒落は急激であつたから、斯の如き學生々活は當然のことであつたらう。私共塾生は漬物を買ふさへ贅澤と考へたのであるから、附近の農夫と直接談判を試みて澤山に野菜を買込み、これを塾に運んで一二個の大きな桶

に漬けたものである。塾から餘り遠くない所に川があつて、其川口には多くの蛤が蕃殖して居た。私共は度々其所に行つて蛤を採り、米屋から無代で味噌をもらひ、蛤の味噌汁を造つたものだ。こんな生活であつたから、私共の學費は今日から見て全く事實とは思はれぬ程少ないものであつた。其當時米は一升五錢であつたから、私共の米代は一日二錢であり、一ケ月六十錢に過ぎなかつた。副食物もアノ通りであり、且つ月謝を納める習慣もなかつたから、私共の學費は一ケ月一圓あれば充分であつた。然しこんな生活を二年も三年も繼續して居たならば、私の健康がどんなになつたかといふことは一の疑問である。

自修主義　私共の物質生活は以上簡單に述べたのであるが、私は更に進んで其當時の漢學塾に於ける勉學法に就ても少しく語つて見たい。大西先生は毎日午後三時頃までは小學校に居られるのであるから、午後一時間乃至二時間が塾生のために提供される。然しこれも一定したものではなかつた。時には先生に用件が出來て、授業が規則通り行はれないこともあつた。時としては先生の都合で夜間授業が行はれることもあつたが、これは極めて稀であつた。要するに現在の學校に於けるが如く豫め時間を定めて教授するのではなく、先生の都合よき時に何時でも教ゆるといふことになつて居た。勿論塾生は年齢に於ても學力に於ても同一でなかつたから、これを一纏にして教授するといふことは全く不可能であつた。其結果塾生は一人々々先生に就て學ぶ外はなかつた。若しこれが現在の教育制度の下に行はれたものとすれば、先生の勞力は大したものであつたに相違ない。然し漢學塾の特徴は自修主義といふことに在つた。私共が漢文を讀んで不可解の點があれば、字引或は註解書によりて研究する、時には先輩に質問することもある。此等の手段を盡して尙ほ諒解し得ない場合のみ先生の教へを乞ふのである。斯の如くすれば、毎日生じて來る疑問は十分間位で先生に解いていたゞくことが出來る。私が僅か三ケ月間に十八史略、唐宋八家文、論語、孟子、其他幾多の漢書を讀了することの出來たのは全く自修主義の賜である。此私塾生活以前には既に述べた如く私は國史略、日本外史等を讀んだけれども、其後に於ては殆んど漢書を手にする機會がなかつた。勿論漢學に關する私の知識は極めて淺薄なるものに相違ないけれども、これが僅に三ケ月の收穫であつたことを考ふれば、私は寧ろ一種の滿足を感ぜざるを得ない、大西先生は單に讀書のみではなく、作文や詩作に於ても私共を指導して下さつた。先生が塾生全部を集めて白樂天の長恨歌といふが如き長詩の說明をして下さつた時には一同先生の雄辯に傾聽した。私共は何時しか此長詩を暗誦し得るようになつた。詩作を奬勵するためには爭鹿稿といふ方法が採用された。これは先生から課せられた同一題目につき塾生が詩作をなし、何人かゞ一人でこれを淸書し、無名のまゝでこれを先生に提出する、先生は一々これを添削し

て、其中最も優秀なるものに記號を附してこれを塾生に返却される。優秀の記號を與へられた者は其賞として原稿を獲得することとなる。爭鹿稿とは卽ち原稿獲得の競爭を意味するのである。私共は詩作の競爭に興味を有したのみでなく、寧ろ熱中したといふても差支ない位であつた。僅か三ヶ月位の修養で詩作が物になりそうな筈はないけれども、今尙ほ古今の詩を讀んで多少の興味を感じ得るのは全く此三ヶ月の勉强に負ふ所があると言はなければならぬ。

體育の方面　言ふまでもなく封建時代に於ける教育は武藝を主にして居たのであるから、教育卽體育と言つても差支はなかつた。然し小學制度の實施と共に知育の方面が首位を占むるようになつたゝめ、小學に於ては特に體育の方面にも注意を拂ふようになつた。附屬小學では體操が課せられて居たのみでなく、ブランコや簡單なる運動器械が備へ附けられて居た。然し漢學塾には生徒も少く、運動場もなかつたから、私共は散歩と遠足以外に何等體育の方法をもち得なかつた。加布里村は海にも近く、山にも近く、筑紫富士と稱せられた山の麓を流れて居た川にも近かつたのであるから、朝夕散策を試みるには極めて便利であつた。私の鄕里であるからお國自慢といふことになるかも知れないが、實際博多灣を初めとして、筑前と肥前の境に至るまでの海岸には絕景と稱すべき所が極めて多い。一たび西公園に上りて東西に廣がれる海岸線をながめ、更に目を轉じて海の中道、志賀島、玄界島の方面を見たならば、何人も豐富なる自然美に醉はされるであらう。私は幾度か私の家と加布里村の間を往復したのであるが、六里に餘る長途の徒步も此海岸美に慰められることが少なくなかつた。加布里村の附近には有名なる芥屋の大門がある。海中に突出した岬は悉く結晶岩であつて、恰も數百數千の角柱を竝べ、或は積み重ねたるが如き狀をなして居る。其一部に大なる洞窟があつて舟を容れるに充分であるけれども、古來其奧を極めたものはないといふことである。大西先生は私共に遠足を奬勵されたのみでなく、自ら私共と同行されたことも度々であつた。私共が芥屋の大門に遊んだのも、筑前と肥前との國境に在る雷山に登つたのも先生が發起されたのであつた。先生は每日晩食に少量の酒を用ひられて居たが、殊に遠足の場合には一瓢を携へるといふことが原則であつたやうに思はれる。然し先生は節酒家であつて、一度も酒のために失態を演ぜられるようなことはなかつた。私の私塾生活は陽春三月から六月下旬までゝあつたので、遠足には最も適當なる季節であつた。福岡の市街から姪の濱に出で、長垂山の麓を過ぎて今宿に入り、更に前原、周船寺を經て加布里村に着くまでの六里の道は今でも憶出が深い。殊に三ヶ月間私の住居地となつて居た加布里村は何時までも懷かしき所として私の記憶に殘るであらう。私は昭和三年の春九州旅行の途に上つた序を以て福岡に立寄り、自分の生れた屋敷跡や、紙鳶揚や鬼ごつこなどをやつて居た場所を訪問して昔を偲んだのである。福岡か

ら唐津に行く電車は私が五十年前加布里村に徒歩した道に沿ふて走るのであるから、私は車内から一昔馴染の松原や海岸に目を引かれるのであつた。電車が加布里驛に停車した時には殊に注意して見廻はしたけれども、驛と村との間には可なり距離があるやうで、村塾の所在地は其方向すら見當がつきかねた。私は昭和六年にも再び福岡から唐津に至る機會を得たけれども、別に知人があるといふ譯でもないから、私はわざ〳〵下車して昔を偲ぶといふ氣にはなれなかつた。

父の手紙

六月の終り頃父から手紙が來た。少し相談したいことがあるから、此手紙の着き次第早速歸宅せよといふのであつた。夏休暇も間近になつて居るのに至急歸宅とは何のためであらう。手紙で大體其要件を知らせてもよいではないかと多少不服の點もあつたけれども、既に三ヶ月も父母の家を去つて居ることであるから、久振りの歸宅は寧ろ希望する所であつた。其翌朝私は加布里村を出發して歸途に就いた。然し六里の道を徒歩しつゝも、私は父の相談が果して何事であるかを色々と想像して見た。結局私が最も可能性の多いことだと考へたのは養子問題であつた。既に述べた如く私の家は財政窮迫して到底私に永く勉學の機會を與へることが出來ないから、私は出來得るだけ早く自活の途を求めねばならなかつた。殊に私には兄があるのだから、私に取りて最も容易なる方法は養子として他家を嗣ぐことであつた。父の要件といふのは屹度此問題に相違ない。若し果して其の通りであるとすれば、私は其處に安住の地を求めねばなるまいとさへ考へた。かく決心して家に歸つた私は何事よりも先づ父に其要件の何であるかを質問したのであるが、父の答へは大體次の如くであつた。

私の義兄である淺香龍起は京都の同志社で勉學して居たが先日夏休暇のため歸鄉したのである。彼は海軍々人を志願して居たのであるから、英語を學ぶ必要上同志社に入學することになつた。彼は海軍軍人が將來に於て重要なる位地を占むるといふことを豫想し、自ら率先して此方面に進まんとしたのみでなく、私の父に說いて私をも海軍々人たらしめんとした。まだ十二分に武士氣質を有して居た私の父に何等反對意見のあるべき筈はない、然し父には私に準備教育を受けしむるだけの資力がなかつたのであるから、其所に少からぬ困難があつた。然し義兄の親は財政上多少の餘裕があつたから、義兄は學資につき何等不足を感ずることがなかつたのみならず、私のため其一部を割いても差支ないといふことを私の父に語つたらしい。勿論父も私の學資として若干を支出する覺悟はして居たのであるから、義兄の意見に從ひ私を同志社に送ることとした。これが父の所謂要件であつたのだ。これを聽いた私は全く意外で、恰も天に上るが如き心地であつた。武士階級の意識が尙ほ多分に殘つて居た私には海軍々人といふことが此上もなき名譽と思はれた。然し其よりも尙ほ私を滿足せしめたのは、附屬小學の同級生中私が鄉里以外の地に遊學する率先者であるといふ誇りであつた。小學に於ては決し

て他人に後れをとらなかつた自分が、今又衆に先んじて京都に遊學するといふことは私の競爭心を滿足せしむるにこれ以上のものはなかつた。今日でこそ東京は青年にとりて憧れの土地であるけれども、明治十二年頃までは京都は東京に對して西京と呼ばれて居る程であつたから、少なくとも私の心に京都を飽き足らなく思ふようなことは毛頭なかつたのである。義兄は同志社が基督教主義の學校であるなどは、一言も私共に語らなかつた。これは義兄自ら基督教を信ずる意志がなかつたのみでなく、若しこれを口にしたならば、私の父が私の京都行を阻止する虞れがあると考へたのではないかと思ふ。勿論私の父は神佛何れをも信じて居なかつたから、強いて基督教に反對するやうなことはなかつたにしても、多少躊躇したかも知れない。私の頭にも耶蘇教は邪教であるといふことが幾分浸み込んで居たのだから、義兄が正直に事實を語つて居たならば、私は永久にこんな幸運を逸して居たことであらう。此意味に於て義兄は實に用意周到であつたと言はなければならぬ。私のために大恩人である義兄は私を光明の淨土に案内しながら、彼自身は不幸にも暗黑の境界に墮落した。義兄は優秀なる才能を有し、交際術にも長じて居たのであるけれども、生れながらの美貌は不幸にも彼を放蕩兒たらしめた。海軍學校の學課試驗には及第したけれども、體格試驗で失敗した。遂に私の姉とも別れることになり、從つて私との交渉も漸次なくなつて來た。未だ五十の齡にも達しない中に病死したのであるが、私は彼が初めて私のために生涯の進路を開拓して呉れたことを考へる時感恩の念に打たれざるを得ない。

第四章　同志社入學

郷里出發　私の京都行がいよ〳〵確定した後先づ第一になすべきことは大西先生に此事を報告して塾を引上ることであつた。私は再び草鞋を穿て六里の道を加布里まで徒歩したのであつた。數日前加布里から家に歸つた時には道中絶えず父の要件といふことに就て種々なる想像をなし、一種の不安に押へ付けられたのであるが、今度は全く異なつた輕い氣持で同じ道筋を辿るのであつた。私が先生と塾生に京都行のことを大體披露した時何れも私の幸運を喜んで呉れたので、私は言葉で盡し難い大なる滿足を感じた。翌日私は荷物を纒め、厚く先生と家族の方々に禮を述べて、三ケ月間愉快に生活した塾に別れを告げた。京都行の準備としては何等言ふべき程のことはなかつたけれども、其心持から言へば其當時の京都行は現在の滿洲旅行どころでなく、或は歐米旅行に比すべきものであつたかも知れない。私が親しくして居た附屬小學時代の同級生は私のために盛なる送別會を開いて呉れた。親戚からは餞別として贈物が到來する。或は送別宴に招かれる。私も亦告別のため一々親戚を訪問した。いよ〳〵明治十二年八月卅日私は義兄に伴はれて郷里を出發した。今日では汽車の便があるから、福

岡京都間の旅行は何でもないが、其當時は博多から神戸まで汽船に頼る外なかつた。汽船と言つても僅に二三百噸位と思はれる位のものであり、其速力も極めて遲いのであつたから、其航海は容易でなかつた。神戸から京都までは鐵道が既に開通して居たから、私共はこれを利用することにした。汽車の速力に就ては以前に度々聽かされて居たけれども、實際にこれを經驗した時私は其の速きに驚いた。

最初の二學期　同志社の學生は其當時僅に百二三十人であつたやうに記憶して居るが、其内九分九厘までは寄宿生であつた。同志社の教育が他の模倣を許さない程の特色を有するに至つたのも此寄宿生活に負ふ所が少なくなかつた。然るに私は此寶の山に入りながら、殆んど手を空くするといふ損失を招いた。それは外でもない。私の義兄は單に英語を學ぶために同志社に來たのであつて、精神教育といふが如きことは彼の目的ではなかつた。勿論規律嚴重なる同志社の寄宿生活は義兄が到底堪へ得る所でなかつたから、彼は最初から學校の附近に二階を借りて下宿生活をして居た。これがため私も義兄の下宿に同居することゝなつた。それと同時に義兄の友人原恒太郎も私共と同居したのであるから、私には先輩が二人出來た譯だ。此二人は其頃同志社に通ふて居なかつたやうである。然し義兄は同志社の三年生であり、原は四年生であつたから、英語の理解力は可なりあつたらしい。彼等は熱心に自修して居た。其當時京都には本間といふ福岡人が居たが、彼は洋行歸りといふので、義兄

も原も此人の指導を受けて居た。原は義兄の友人であるのみならず、福岡に於ける彼の家は義兄の家にも私の家にも近かつたのであるから、私共は以前からの知合であつた。原が其當時如何なる目的を有して居たかは明でないが、私は約半年許り同居し、更に其後夏期休暇中彼に英語の教授を受けた以來、今日まで約五十年以上再會の機を得ることが出來ない。彼は其後宮内省に入り、遂に侍從になつたのであるが、數年前彼が辭職したといふことは新聞紙によりて知つたのである。京都に於ける最初の二學期間は私に取りて極めて單調なる生活であつた。毎日の授業には必ず出席して愉快に勉強したけれども、それは單に附屬小學の繼續に過ぎなかつた。入學當時私共に英語の讀本を教へて呉れたのは市原盛宏先生であつた。先生は後年實業界に轉じ、朝鮮銀行總裁になつたのであるが、私共の先生であつた時は廿二三歳の青年であつたやうに記憶する。教場では新入生に向つても出來得るだけ英語で話しかけるといふ風であつたから、市原先生も盛に英語を使用された。殊に驚いたのは米國人デビス先生が私共のためにウエブスターのスペリングブックを擔任されたことであつた。私共新入クラスの生徒は約二十五人位であつたが、其教授法は實に極端なる競爭主義であつた。生徒を全部一列に竝立せしめ、向つて左りの方から、一人一人に先生は單語のスペルを答へしむる。若し其返答が出來なければ、其次の者に要求される。彼の答へが正しければ、彼の位地と前者の位地が取替へられる。

斯の如くして好成績の者は一日の中に最高位に上り、不成績の者は忽ち最下位に落ちることになる。斯る教授法がどんな結果を生ずるかは容易に想像の出來ることである。私は附屬小學時代に於けると同樣に、否それ以上に競爭心を奮ひ起した。其當時に於て京都まで遊學する程の青年には相當の自信力があるべき筈であつた。だから私の同級生の大部分が何れも小學時代に於ける優等生であつたことは言ふまでもない。私は附屬小學に於けると同じく同志社に於ても第一位を爭はなければならぬと決心した。これがため私は毎日の課業を忠實に勉強したけれども、同志社の特色である散歩といふことには全然無頓着であつた。從つて同級生と親密なる交際を結ぶが如きこともなかつた。然し如何に勉强家であつても、起きてから寢るまで、ぶつ通しに讀書を繼續することは出來ないから、何人も或種の休息とか娯樂とかを要求する。義兄は時々貸本屋から軍談本や仇討本を借りて讀んで居たのであるが、私も何時とはなしに其を讀んで興味を感ずるようになつた。今も尙ほ私の記憶に殘つて居るのは三國誌、水滸傳、漢楚軍談、甲越軍記等であるが、其後同志社の寄宿舍に於て盛に馬琴や京傳の著書を讀んだのも全く此時に得た趣味に起因して居るのである。私は休日とか冬季休暇とかに於て可なり耽讀したことはあるけれども、それは單に娯樂としてやつたのであつて、本務である勉强を怠るが如きことは全然なかつた。此外に私が娯樂として居たことは勉學の餘暇に洛中幷に洛外にある名所古蹟

を見物することであつた。時には義兄や原が案内役となつて呉れたこともあつた。明治十二年の暮から翌年の春にかけて學校は二週間以上も冬休暇になるのだから、義兄は私を伴ふて、奈良見物に出かけることになつた。原は何か差支があるので同行しなかつたが、私の同級生であるSは義兄の知合であり、且つ私より五年も年上であるから、寧ろ義兄の友人として一行に加はることになつた。普通の同志社學生であれば、當然徒歩すべきであつたのに、私共は七條位まで徒歩すると、義兄はSと相談して人力車に乘ることになつた。其日に長池といふ所に一泊することになつたのであるが、旅宿に着くと義兄とSは酒肴を命じて盛に飲む。やがて藝者が三味線を彈き、義兄とSが躍り出すといふ騒ぎだ。私は全く閉口頓首した。其翌日は再び人力車に乘つたのであるから、比較的早く奈良に到着した。私共は二日間の滞在で殆んど奈良全部を見物したのであるが、いよ〳〵其次の日歸京するといふ間際になつて突然悲喜劇が演出された。義兄はSが相當の旅費を持つて居ると考へ、Sは又義兄に旅費の準備があるものと信じて居たのであるから、いざ勘定となれば、これを仕拂ふことは出來ない。今日の如く電報爲替で金を取寄せるといふ譯にも行かぬから、遂に相談の結果京都の附近に親戚を有つて居るSのみが歸京して送金するといふことになつた。義兄と私は更に二日間滞在して奈良附近の名所古蹟を訪問した。禍を轉じて福となすといふのは斯の如き場合に適用すべきではないかと思ふ。冬季休暇が終りて第二學期の授業が開始されたのであるが、私は例の通り下宿から毎日學校に通ふて居た。義兄も原も二學期の終る頃一先づ郷里福岡に歸り、更に九月頃東京に行く計畫を立てゝ居たのであるから、義兄は私にも三月下旬一應歸郷することを勧めた。これがため第三學期（四月から六月下旬迄）を休むことになるけれども、郷里に於て原に教へてもらひさへすれば、九月同志社に歸りて試驗を受け、其結果現學級に留まることが出來るといふのである。これは決して得策ではなかつたけれども、父母の家を離れて居る私は實に望郷の念堪へ難きものがあつたので、遂に義兄と共に四月の初旬京都を去つて歸郷することになつた。

中途の歸郷　これぞといふ明白な理由もなく、學年の中途で學校を休むといふことは、競爭心の旺盛なる私に取りて不思議なことであつたと今でも考へて居る。そして其れは決して賢き方法ではなかつた。若し學年を終つて歸郷したのであれば、私は夏休暇の三ヶ月をのんびりと暮すことが出來た筈であるのに、九月には第三學期の試驗を受けねばならぬといふ事情があるため、私は絶へず重荷を背負ふて居るような一種の壓迫を感じた。歸郷當時こそ親戚を訪ふたり、友人に會つたり、加布里の大西先生の許に行つたりしたけれども、九月の試驗といふことを考へる時には少しの油斷も出來なかつた。私は毎日原の宅に通ふて英語を教へてもらつた。當時同志社の教育法は集中主義といふ一語を

以て表現することが出來ると思ふ。徹頭徹尾英語によりて知識を與へるといふことが目的であつたから、一學年は殆んど全く英語習得のために費されたのである。而も英語の教科書といふものは僅に二三種に限られて居た。私が原に就て學んだのは單に英語讀本と英文典の二つであつた。英語讀本は單に難解の所だけ質問すればよいのであつたが、英文典の方は大分原の助けを借りたようであつた。兎に角九月の試驗に失敗すれば一學年を損する譯であるから、私は十二分の準備をするために努力した。然し私に多少の餘裕があつたことも事實であつた。當時父は前にも簡單に述べて置いた如く戸籍臺帳謄寫のため十數名の人を伴ふて太宰府の附近に在る某村に出張して居た。私も一週間許り手傳のため父の許に滯在し、其序を以て寶滿山に上つたこともある。歸鄕後早くも四ヶ月を經過したのであるから、私は九月四日福岡を出發することに決定した。義兄も原も東京行を志して居たのであるから、私は勿論一人で出發する外はなかつた。然し意外にも私には滿足なる同行者が出來た。それは附屬小學時代の親友不破彦麿が親の許可を得て同志社に入學することになつたことである。當時十六歲であつた二人の少年は親戚や友人に送られて勇ましく博多を出帆した。不破の入學手續も濟み、私も幸にして未濟試驗に及第した。私の同志社生活はこれから始まるのである。

第五章　寄宿舍生活

寄宿舍　私は寄宿舍生活を述べる前に先づ同志社の寄宿舍が如何なるものであつたかを說明しなければならぬ。今は同志社の敷地は大分擴張されて居るのであるが、明治十二三年頃の敷地は全部で五六千坪位のものではなかつたかと思ふ。其所に三個の寄宿舍が建設されて居たのであるが、何れも洋風の木造建築であつた。東の方から數へて第一寮、第二寮、第三寮と呼ばれて居たが、此等は何れも二階だけが寄宿舍であつて、第一寮の下階は事務室、應接室、教師室として、第二寮の下階は教室として、第三寮の下階は圖書室及び教室として使用されて居た。其外には食堂及び炊事場としての一棟があつた。私が卒業するまでには寄宿舍專用としての第四寮及び講堂兼禮拜堂の一棟が建設されたけれども、大體から言へば實に貧弱なる設備であつた。然し四圍の境遇から見れば同志社は確に勉學のため絕好の位地を占めて居たと言へる。北は相國寺といふ禪宗寺に接して居り、其境內は可なり廣くして、其門を入れば蓮池があり、續いて松林がある。南は舊皇居を中心とした廣大なる庭園に接して居る。東も西も交通頻繁なる市街からは遠く離れて居るのだから私達は何等の障害なく靜に勉强

することが出來た。學校の敷地は全部竹垣で圍まれて居たが、これが又同志社の誇りの一であつた。何となれば、其竹垣が低く且つ破り易きものであつたに拘はらず、門限後に於て學生がこれを乘り越えたといふ事實は一度も起らなかつたからである。寄宿舍の部屋は八疊と六疊の二種であつて、八疊には三人、六疊には二人といふ割合で學生を收容することになつて居た。學生の數が增加した場合には八疊の部屋に四人を收容したこともあつた。言ふまでもなく部屋には種々なる點から見て、優劣の差があつたのだから、其公平を期するため、一學期毎に部屋替が行はれた。これがためには學生が部屋替委員を互選し、委員は前學期及び前々學期のことをも參照して部屋の割當を決定するのである。卽ち以前劣等なる部屋に居た者は優等の部屋に、八疊に居た者は六疊に轉ずるといふが如きである。第二に委員が注意せねばならぬことは二人若くは三人の同室者を如何に組合はすべきかといふことであつた。これは同志社教育の立場から見て可なり重大なる問題ではなかつたかと思ふ。若し一年生が二人同室することになれば、彼等は必ず放縱に陷り易いのであるから、先づ室內の監督者として五年生及び四年生を各室に配置し、これに三年生以下の學生を適宜に附屬せしむるといふことが原則となつて居た。殊に不良性を帶びた新入生は德望の高い上級生と同室せしむることになつて居た。

睡眠と食事　私共の寄宿生活は恰も兵營生活の如く實に規律正しきものであつた。然し其れは決して强制的ではなく全く任意的であつた。學校は特に規則を設けて私共を取締るが如きことをしなかつたけれども、學生は自治的に種々なる規約を設けてこれを實行したのであるから、遂にこれが動かすことの出來ぬ習慣となつてしまつた。私共は一年を通じて午後十時に就寢し、午前五時半に起床したのである。序に述べて置きたいことは校內に於ける種々なる仕事が學生によりて行はれたといふことである。起床、就寢の時間は勿論、授業の開始や終了も一々鐘を鳴らして學生に知らしむるのであるが、これは小使にあらずして學生が擔任することになつて居た。學校は彼等に相當の報酬を與へて居た。寄宿舍に於ける部屋の掃除は各自が擔任して居たけれども、廊下と階段の掃除及び雜巾かけは學生の中特に學資に乏しきものが若干の手當を受けて、これを擔任して居た。後には學校內の掃除や紙屑拾ひまで學生の手によりて行はれるようになつた。話は元に戻るのであるが、私共は十時の鐘を聽くや否や逸早く床を敷き、燈を消して就寢するのであつた。若し十時後に尙ほ勉强を續けて居る者があれば、寮長は一應彼に注意を與へる。現在の如く私共が電燈を用ひて居るのであれば、問題は極めて簡單であつたに相違ないが、其當時は悉くランプであつたから、試驗前などは押入に豆ランプを持込んで規則違反を行ふ者もあつたようだ。兎に角七時間半の睡眠は十五歲から、廿歲位までの學生に必要なことであるから、私は正直にこれを嚴守した。現在でも旅行の場合を除くの外私が七時間乃至八

時間の睡眠を取つて居るのは全く其當時の習慣の繼續である。私共は睡眠時間に對すると同じく食事時間に對しても嚴重であつた。朝飯は午前六時、晝飯は正午、晩飯は午後五時であつた。米國教師の中にはゴルドン先生といふ醫學博士が居たのであるから、食物は決して私共の味感を滿足せしむる程のものではなかつたけれども、なるべく多く榮養分を攝取することには可なりの注意が拂はれたようである。毎週一二回は米飯の代りに「モシュ」と稱するものが私共が食卓に供せられた。これは麥粉を原料としたもので、今日の「オートミール」によく似て居る。又豌豆をよく煮潰し、これに砂糖を入れたものが米飯の代用として供せられたこともあつた。兎に角私共の食事が其質に於て不滿足であつたことは學生が時々蕎麥屋、餅屋、牛肉屋、料理屋等に出入したことにより證明することが出來る。同志社は禁酒禁煙を勵行し、學生も亦比較的嚴重にこれを遵守して居たに拘はらず、牛肉屋や料理屋に出入することは普通のことゝ考へられて居た。後年私が米國で寄宿舍生活を送つて居た時の經驗によれば、米國の學生は殆んど料理店に足を入れるといふことはなかつたやうである。其理由は極めて簡單である。米國の寄宿舍では明治廿五六年頃（約四十年前）に於ける一ヶ月の食費が十五弗であつた。卽ち我貨幣では三十圓といふことになる。三度の食事は實に贅澤であつて、私共の食慾が如何に旺盛であるにしても、決してこれ以上のものを要求しなかつた。これに反して同志社の食費は一ヶ月二圓五十錢であつた。これで私共の食慾が滿足を得る筈はない。私は自分の經驗から食慾を滿足せしむることが青年教育に最も重要なるものではないかと思ふ。序に述べて置きたいのは同志社生活に要した私の學費が幾何であつたかといふことである。重なる支出は食費が二圓五十錢、學費は一期間で二圓五十錢、月割にして八十錢餘、書籍代及び雜費が約一圓二十錢、合計四圓五十錢である。私は毎年夏休暇に歸鄕したのであるが、其等の費用を合しても、五年間を通じて私の學費は合計三百五拾圓に過ぎなかつた。

食後の散步　新島先生と三人の米國教師を除くの外、教師も生徒も悉く和服を用ひて居た。殊に同志社の特色は學生の全部が袴を用ひなかつたことにある。私はそれが何故であつたかを知らないし、又それを先輩に質問したこともないけれども、それが多分新島先生の平民主義に起因して居るのではないかと考へる。封建時代に於て袴を着けたものは武士階級であつたから、四民平等、卽ちデモクラシーの上に立てる同志社が袴を用ひないからと言ふて何等不思議なことではない。兎に角同志社は多分に米國の學風を取り入れたのであるから、あらゆる點に於て漢學塾とは其趣きを異にして居る。食事にも睡眠にも嚴重なる規律があつたことは既に述べた通りであるが、衞生に關しても同樣であつた。私共は何時も熱心に勉强した。然し無茶苦茶に勉强して健康を害することは愚の至りであること

を先生達は諄々と私共に教へて呉れた。食後直に勉強すれば胃の消化を害することになるから、少くとも三十分間は讀書を慎まなければならぬ。これがため食後の散歩といふことが私共の習慣となつた。散歩のためには同志社が最も便利な位置を占めて居ることは前に述べた通りである。私共は食後三々五々友人と共に御所を一周するのが習慣であつた。殊に晩飯後には比較的多く休息時間があるから、鴨川の堤を散歩したことも度々であつた。此の如く私共が比較的多く衛生に注意したのは醫學博士ゴルドン先生や其他の先生の指導に負ふ所が少なくなかつた。某先生は或日講堂に於て次の如き話をされたことがあつた。昔或所に一人の老名醫が住んで居たが、病氣に罹り、最早恢復の望さへなくなつた。彼の親友達は其側に在りて『若し先生に萬一の事があらば、私達は今後如何にしたらば宜いか』と失望落膽したので、名醫は靜に『決して御心配には及ばぬ、私は諸君のために三名の大家を紹介する積りだ』と答へた。親友達は大に喜び、速に其姓名を承りたいと催促したので、名醫は口を開き『第一はドクトル、フード、第二はドクトル、スリープ、第三はドクトル、エキサーサイズである』と言つた。要するに食物、睡眠、運動の三博士を顧問として其命ずる所に服從さへすれば、醫師の助けがなくとも長壽を全ふすることが出來るといふ教訓である。同志社が創立當時から、こんな考へを以て學生を指導して居たことは確に米國の學風から影響を受けたものであると思ふ。

遠足　米國學風の影響と言へば今一つ述べて置かねばならぬことがある。教場で勉強するのは毎週五日間であつて、土曜日は體育のため、日曜日は德育のために全く課業を休むことになつて居た。これが私共のためにどれだけ利益であつたかも知れない。私は同志社に入學する前に於ても、又卒業した後に於ても可なり勉學には熱心であつたが、それでも同志社時代に於ける勉強が最も激烈であつたやうに思ふ。兎に角毎週二日の休息があるのだから、殘り五日間の努力は實に素晴しいものであつた。午前も午後も授業時間の外に多くの自修時間はあつたけれども、私共が眞劍に勉強したのは夜の四時間であつて、午後五時に夕飯を終り、三四十分食後の散歩をやつた後、六時には各自部屋に歸りて勉強を始める。各寮には部屋毎にランプの光が輝いて居るけれども、寂として恰も人なきが如しであつた。勉強時間に室内で談話するものがあれば、寮長は直に警告を與へる。前に述べた如く十時の鐘が鳴れば一同は燈火を消して眠に就くのである。斯の如く毎週五日間の勉強を終つた後土曜日を迎へるといふのが私共に取りてどんなに愉快なことであつたか知れない。私共は二三日前から來るべき土曜日を如何に費すべきやといふことを考へ始める。晴天でさへあれば私共は數名乃至十數名の團體を造り、辨當を携へて三四里乃至五六里の遠足に出かける。團體は必ずしも同級生に限られては居なかつた。何分百名餘りの學生が殆んど全部寄宿生であり、朝夕寢食を共にして居たのみでなく、宗教

生活といふ精神的團結の中に融合して居たのであるから、恰も一家族であるかのやうに思はれた。私共は多く草鞋に脚絆といふ扮裝であつて、寒い日や降雨の虞れある日には赤毛布を被つて歩行したものだ。京都は實に遠足のため便利な所である。三四里乃至五六里を隔てた所には多くの名所古蹟がある。私は四ヶ年の寄宿生活中殆んど全部京都附近の地に足跡を印した。登山だけに就て言へば、比叡山、鞍馬山、愛宕山、大文字山、笠置山、及び近江の三上山がある。比叡山の如きは幾たび登山したか記憶して居ない位だ、暗夜に提燈を提げ大文字山を越えて大津に行つたこともある。琵琶湖の沿岸は私共に取りて最も愉快なる土地であつた。瀨田の唐橋から石山寺の附近までの景色は今でも鮮に記憶に殘つて居る。夏休暇の外に冬休暇と春休暇とがあつた。何れも十日乃至二週間であつたから、これを利用して數日間の旅行を試みるものが少なくなかつた。私が十數名の同窓生と共に笠置山、月ヶ瀨、奈良の三ヶ所を往復四日間で訪問したのも或年の春休暇であつた。其當時我國には未だ西洋風のスポーツが輸入されて居なかつたから、これと言ふ程の體育法はなかつた。私が三年生になつた頃ラーチッド先生が體操を指導されたことがあつたけれども、興味がなかつたためか、永くは繼續されなかつた。私は體育のため一時柔道の教師を訪ひ其指導を受けたけれども、矢張り興味がなかつたため間もなく中止した。これがため私は散歩と遠足を唯一の體育法として繼續して居るのである。但し後年は庭球に熱中したのであるが、これも筋肉リューマチのため中止することになつたので、結局散歩が生涯を通じて私の唯一の運動法となつた。體操は今でも時にふれて行ふことがあるけれども、これはどうしても習慣となるには至らない。然し散歩は既に私の習慣となつて居る。極暑と極寒の時期は別として、郊外を散歩することは私に取りて非常な趣味であり娯樂である。これは同志社生活の賜であると言はなければならぬ。

第六章　知育の方面

學課の編成　同志社の體育方針が既に一の特色を發揮して居た如く、知育の方面に於ても全く現在我國に行はれて居るものとは其趣を異にして居た。我國の中等學校に於て毎週約十三課目と約三十時間の授業が課せられて居るに反し、同志社は毎週二課目乃至三課目を課し、授業時間は僅に十五時間に過ぎなかつた。これがため課業は毎日午前中の三時間で終り、午後と夜分は全く豫習のために費すことが出來た。即ち自修主義と集中主義が徹底的に行はれて居たのであるから、僅か五年間で私共は普通學を修むると共に英語にも可なり上達するようになつた。其當時の同志社卒業生は單に英書を自由に讀むことが出來たのみならず、英語を書くことも話すことも出來た。前にも述べた如く、私共は一年級に於てウエブスターのスペリングブックとリーダーを教科書として使用した。其外には文典を用ひたのであるが、一年級を終るまでにはリーダーの第四卷を修了した。一年級に於ては主として英語を教へるのであつたけれども、教科書は單に二つであつた。最初はスペリングとリーダーだけであつたが、スペリングが終ると、リーダーと英文典を用ゆることになつた。要するに英語を英語とし

て學んだのは單に一年級だけであつて、二年級からは學科を主として語學は從となつた。即ち知識を得ると同時に英語を學ぶといふのであるから、教科書は全部英書を用ゆることになつた。今日から見て同志社教育が餘りにも極端であつたと思はれる點は第一が教科書として全部英書を用ひたこと、少しだけ漢學（隨意科といふ程度）を教ゆる以外には一切日本に關すること、即ち日本地理や日本歴史を教へなかつたことであつた。勿論私共は當時の小學校に於て地理や歴史を教へられて居り、且つ同志社に於ては自分で日本の書籍を讀む時間が充分與へられて居たのであるから、學校としては英語に全力を集中したものらしい。斯くて私共は二年級に於て第一學期に萬國地理と算術、第二學期に地文學と算術、第三學期には大英文典と算術を教へられた。言ふまでもなく算術にも英語の教科書を使用したのみでなく、教師の質問も生徒の答辯も悉く英語で行はれた。教師は授業の終りに必ず翌日の課業には何頁から何頁まで準備すべしと言ひ渡すのであるから、私共は懸命に豫修をなすのであつた。要するに學生は獨修した所のことを翌日教場で試驗されるのであつた。現代の學生は毎年二三度の試驗を受くるために間歇的努力をなすのであるが、私共の試驗は毎日行はれたのであるから、其緊張は連續的であつた。三年級からは課目の數が增加したけれども、それでも尙ほ三課目に過ぎなかつた。一學年は三學期に分れ、第一學期は九月の中旬から十二月の廿日頃まで、第二學期は一月十日

頃から三月下旬まで、第三學期は四月上旬から六月下旬までゞあつた。學課目は大概一學期で終了するようになつて居たが、或課目のためには二學期を費したこともあつた。私は次に三年級以上に於ける學課の配置を示すことにする。三年級では第一學期が萬國史、代數、演說、第二學期が萬國史、幾何學、演說、第三學期が英國史、三角學、演說であつた。四年級では第一學期が物理學、修辭學、英作文と演說、第二學期が物理學、化學、英作文と演說、外に論理學が毎週一時間、第三學期が歐洲文明史、生理學、英語會話、外に漢字、五年級では第一學期が心理學、論理學、經濟學、第二學期が心理學、天文學、政治學、倫理學、第三學期が地質學、英文學史、倫理學であつた。學課の名稱も泰西文化の輸入日尙ほ淺き當時に於ては今日と大分異なつて居た。例せば三角學を測地學、生理學を人身究理、倫理學を道義學と譯して居た如きである。演說、英作文と經濟學及び政治學を除く外は凡て英語の教科書を用ゆることになつて居た。經濟學と政治學に限りラーネッド先生が英語で口授したものを文章其まゝ筆記したのであつた。當時京都には、洋書を販賣する書籍店はなかつたから、私共が使用する教科書及び其他の洋書は一々ラーネッド先生が米國から取寄せて下さつた。學生は時を定めて先生の宅に至り一々代價を拂ふてこれを受取つたものだ。毎學期末には殆んど規則的に教科書全部を讀了して、次の學期のために新しき教科書二三冊を購ふて持歸る時の嬉しさは今も尙ほ忘れることが出來ない。現在の如く毎週十種以上の學課に精力を散漫せしむるよりも、注意を二三科目に集中する方が遙に有效なる方法ではないかと思ふ。一年間に亘り同一課目をダラ〳〵と勉强するよりも、三ケ月毎に新しき學課に移つて行くといふ方が、どんなに學生の興味をそゝるかも知れない。今や同志社も文部省の教育系統内に加入して全く昔の特色を失ふことになつた。私は昔の同志社教育のみが理想的であつたとは言はない。然しこれが一つの有效なる教育法であることは斷言し得る。產業界の統一は極めて望ましきことであるけれども、教育界の統一には幾多の弊害がある。私は今日でも尙ほ同志社の如き教育法が少くとも教育界の一部に行はれることが有益ではないかと思ふ。

英語教育　同志社教育の方針は英語によりて學生に泰西の新知識を與へるといふことにあつたらしい。これは全く無理のないことであつた。明治十二年の頃に於ては第一日本語で書かれた教科書及び參考書がなかつた。第二には洋書の飜譯も極めて少なかつた、これが爲に比較的滿足に泰西の知識を與へんとするには英語に賴る外はなかつた。餘りに泰西思想に傾き過ぎたといふ點はあつたけれども、兎に角英語が泰西知識の寶庫を開く唯一の鍵であると考へられたから、同志社は其點に全力を注ぐことになつた。私共には數學にしても、理化學にしても、さては政治、經濟、天文、地質にしても全く新知識であつたから、學問といふものが非常に面白きものと考へられた。然し此等の新知識を得るた

めには否應なしに英語といふ門戸をくゞらなければならなかつた。英語の意味が不明瞭である限り勿論知識を獲得することは出來ない。そこで私共は讀書百遍意自ら通ずといふ意氣込で英語を解することに努力した。教師に質問すれば直ぐ解決が出來るけれども、他力本願は私共の希望でなかつた。これが私共に自修心を鼓舞した大なる原因である。最初の一年間は英語を解するために英語を學んだ。然し二年生になつてからは學課を理解するために英語の書物を讀んだ。換言すれば、英語は目的でなくして方便であつた。然し英語を英語として學んだ場合が全然なかつたとは言へない。私共は三年級や四年級に於て英作文、英語會話、英語演說などを課せられたこともあつたのだ。兎に角同志社に於ける五年を現在の中學に於ける五年に比較したならば、何人も其處に大なる相違のあることを認めるであらう。學科の內容は暫く別問題としても、英語といふことに於ては全く比較にならぬ。中學五年生が英語の教科書によりて心理學、倫理學、天文學、地質學などを理解するといふことは殆んど考へられない。況んや教場內で英語を以て質問や答辯をなすに於ておやである。私の同級生に三好文太といふのがゐた。彼は二年級か三年級の時に、同志社の學生となつたのであるが、其以前には大阪の某宣教師の家に寄宿して居たゝめ同級生中では最も英語を話すことが巧であつた。心理學は森田久萬人先生の擔任であつたが、時々私共に準備が出來て居ないことがあるので、私共は其時に限り課業の進行を防止する目的を以て盛に質問をしたり議論をやつたりした。斯の如き場合には森田先生よりも英語に於ては達者であつた三好が何時も急先鋒であつた。森田先生は私共に斯る計略があらうとは露知られないのであるから必死になつて應戰された。其中に時間は經過して論戰は翌日に延期された。これは無邪氣な惡戲に過ぎないけれども、其當時に於ける私共の英語が單に讀書力のみに限られて居なかつたことが判る。私は卒業後スペンサーの哲學書やリトクヴィルの『亞米利加共和國』などを讀んだ位であるから、傳記や修養書の如きは容易に讀み得たように記憶する。同志社には各方面の外國人が訪問して來たのであるから、私共學生は英語演說を聽く機會が比較的多かつた。私共は英語を話すことは決して自由自在ではなかつたけれども、聽く方は可なり上達して居たように思ふ。私は卒業後一年半を經ない中に教師として再び母校に歸つて來たのであるが、其頃に禁酒演說家として有名なるレビット夫人が京都に來り數回の禁酒演說を試み、私は每回其通譯の任に當つた。同夫人に關する逸話が今でも私の記憶に殘つて居る。一日、夫人は化學研究所の一室で演說を試みた。會場は木造家屋の二階であつて、約千人の聽衆があつた。滿員のため緣側にも數千名の人々が鮨詰になつて居た。演說が始まると間もなく、緣側の板が毀れて數名の聽衆が墜落した。室內の人々は其物音を聽きて總立となつた。單に二三名が墜落した外別に異狀がなかつたけれども、室內の不安はまだ全く取去られな

い。私も一時通譯を中止して其處置に迷ふて居たが、レビット夫人は靜に美しい聲で歌ひ出した。聽衆は水を打つた如く靜寂に耳を傾けた。夫人は幸にして其話を續けることが出來た。私は其時日本外史で讀んだ一節を憶ひ出さゞるを得なかつた。宇治川を挾んで源平の戰が行はれた時義經は全軍に命を下さんとしたけれども、騷々しくて耳を傾けるものがない。彼は平等院の鼓を携へ來りポン〳〵とこれを打鳴らしたが、全軍は靜に耳を傾けたので、彼は遂に其目的を達することが出來たといふのである。これは餘談に過ぎないのであるが、私は廿二歳の頃から度々通譯を依賴されるようになつた。然しこれは決して私に限られたことではない。私の同級生は殆んど全部同樣であつた。

演說の練習　現在は各種の學校に於て學生が自發的に雄辯會を組織して演說の練習をやつて居る。然し同志社は創立以來演說を正科として學生に課して居たのであるから、明治十二年私が入學した時代にも演說は盛に行はれて居た。但し正科として課せられて居たのは三學年からであつた。何故に同志社が演說に重きを置いたかと言へば、これには種々な、理由があつたやうに思はれる。第一は同志社の教育が米國を模範として組織されたからである。米國及び英國に於ては小學校時代から演說の練習が行はれる。參觀人があれば教師は生徒をして演說せしめるといふことが殆んど習慣のようになつて居る。これがため小學及び中學程度の學校に於ては殊に發音に關する課目が設けられて居る。私共は演說の練習を爲す前に國語を正當に發音することを學ばなければならぬ。我國に於て此種の教育が缺けて居ることは大に考慮すべきことではないかと思ふ。吃音さへも矯正することが出來る今日であるから、殊に小學教育に於て兒童の發音を指導することは最も必要なることであらねばならぬ。私の經驗する所によれば、我國民にして不明瞭なる發音をなす所の人が決して少なくないやうである。これは單に地方的訛言にのみ原因するのではない。要するに私共の言語は極めて明瞭に且つ齒切れよく發音されねばならない。同志社に於ては別段發音科といふものを設けては居なかつたが、演說が教師によりて指導されることになれば、發音に就ても充分なる注意を與へて呉れることになる。演說が斯の如く奬勵されるようになつた第二の原因は同志社が基督教宣傳を目的として創立されたことに在る。これは第一の原因に比して遙に重大であつたと考へられる。同志社の宗教教育及び宗教生活に就ては尙ほ詳細に述べる積りであるが、兎に角基督教的文明を我國に輸入することを第一の目的とした同志社が演說の練習に重きを置いたのは何の不思議もない。よし演說が正科でなかつたとしても、私共は否應なしに演說を好むやうになる境遇に置かれて居た。毎日學科の初まる三十分前に私共は殆んど强制的であるかのやうに禮拜堂に出席することを要求された。若しそれが宗教的禮拜のみであつたならば、左程に學生の興味を惹くことはなかつたかも知れない。然し三十分の內二十分は修身講話のため

に盡された。日本教師も米國教師も毎朝一人づゝ學生に向つて種々なる問題につき有益なる教訓を與へて呉れた。私共は單に講話の内容を面白く感じたのみでなく、其演說振りにも敬服した。長演說は稍もすると冗長に陷り易く、從つて聽衆を感動せしむることも少ないが、二十分位の演說は簡潔にして無駄がない。私共青年には教師達が如何にも先達者であるが如く思はれた。當時新島先生が年長者で、三十四五歲の働き盛り、其他の先生は概して廿二三歲から廿五歲位までゝ、今日ならば、まだ大學の生徒に過ぎなかつたのであるが、私共には偉大なる人物であるかの如く思はれた。此の如く毎日私共は雄辯家に接するのだから、何時とはなしに自ら演說家たらんことを希望するようになつた。同志社は又絕えず有名なる内外人の訪問を受けたのであるから、私共は屢此等の人々の雄辯に接して學ぶ所が少なくなかつた。以上述べた如き理由によりて同志社に於ける學生は殆んど例外なしに演說の練習に熱中した。正科としての演說では滿足が出來ないので、學生は十名位の同志を集めて雄辯會を組織した。一時はこんな團體が四つも五つも出來たのであるが、此の如く小團體が多く組織されたのには相當の理由がある。私共は演說練習會を開くに當り、會員全部が演說することを第一の條件としたのであるから、會員が多數であると此目的を達することが出來ない。聽衆の多少は全く問題ではなかつた。此の如くして土曜日の晩には此處彼處の教場に於て幾組かの演說會が開かれた。言ふまでもなく、演說は單に辯舌を練ることのみが目的でない。寧ろ思想の豐富であり新奇であることに重きを置かなければならぬ。私共は辯論と思想との二點を常に考へて居たから、演說をなすためには絕えず新しき書物を讀む必要があつた。四年生になつた頃から、私共は圖書館の英書を借りて熱心にこれを讀んだ。此點に於ても可なり激烈なる競爭が行はれたので、私共の同級生中には其讀みつゝある書籍を机の引出に隱し、これを何人にも示さなかつた者さへあつた。私共の演說は美辭麗句を陳列するといふ風ではなかつた。中には宗教的熱情に驅られて大聲疾呼するものもあつたが、概して六ケ敷言語を避け出來るだけ平易に演說するといふことが私の理想であつたらしい。或教師は私共に鳩翁道話や心學道話などを讀むことを勸めた。德川幕府の末期には江戸に通俗的道學者なるものが出現した。彼等は論語や孟子の如き書によりて民衆を教訓することの如何に困難なるかを考へ、極めて平民的なる言語を以て道話を試みたのであるが、これは今日の口語文と同じく婦女や兒童も容易に了解することが出來た。鳩翁道話や心學道話は實に私共のため良き參考書であつた。言ふまでもなく演說の第一條件は思想そのものであるけれども、これを表現するには聽衆をして理解せしめ、且つ面白く感ぜしむることを目的としなければならぬ。四五十年前米國にムーディーといふ有名なる宗教家があつた。彼の說教は如何なる無學者をも感動せしめたといふことで有名になつた。或時彼が說教に成功した理

由を質問した人があつたが、彼は次の如く答へたといふことである。自分は出來るだけラテン語から出た英語を使はないで、アングロサキソン系に屬する語のみを用ゆることにして居る。これが私の成功の最大原因であると思ふ。これは恰も漢語を避けて、出來るだけ日本語を用ゆるといふのと同一意味である。同志社に於ける演說練習は明にこれを目的として居た。基督教は社會の凡ゆる階級に向つて說くべきものであるから、無學無智の階級に對する準備さへ出來て居れば、其他は比較的容易であるといふのが私共の考へであつた。同志社は演說練習の一部として對話をも奬勵した。學期試驗や學年試驗の終りには殆んど規則的に餘興として對話が行はれた。多くは英語であつたが、時には大々的に日本語で行はれたこともあつた。現今は各學校に於て英語會主催の下に演劇の行はれることは少しも珍らしくないが、明治十五年の頃同志社學生が日本語でマーチヤント・オヴ・ヴエニスを演出したことは恐らく我國に於ける最初の出來事ではなかつたかと考へる。私も一度四年級時代に英語の對話をやつたことがある。筋書はかうだ。或紳士の住宅に一人の乞食がやつて來た。病氣のために仕事が出來ないから助けて呉れといふのだ。紳士は哀れを催ふし銀貨二三個を與へる。然し病氣は何病だと尋ねる。乞食は躊躇して答へない。紳士は怪んで益ゝ追及する。乞食は遂に私のは『怠惰』といふ病氣だと醫者が申しますと答へる。紳士は大に怒り、逃げ出す乞食の後を追ひ、『この横着者め』とステ

ツキで彼を擲るといふので幕だ。私は、父が維新の頃西洋式の練兵をするために造つた洋服を仕立直したものを持つて居た（其當時洋服を持つて居た學生は二三人に過ぎなかつた）ため、私が紳士の役を演ずることになり、乞食の役は同級生の小野英二郎（後の興業銀行總裁）が勤めた。これを思ふと私は今でも失笑を禁じ得ない。然し私共の雄辯術練習は何時までも校内だけに局限されるやうなことはなかつた。私が初めて寄宿舍に入つてから間もなく、同志社の教師は遂に街頭に進出することになつた。

講演會　歐米諸國では可なり以前からユニバーシチー、エッキステンションといふことが行はれて居た。これを直譯すれば大學擴張とか大學普及とか言ふべきであらうが、要は大學教育の恩惠を廣く社會に及ぼすといふ點に在る。我國の諸大學が行うて居る校外教育が卽ちこれである。校外教育は講義錄及び書籍の出版により、或は講演會の開催によりてこれを行ふことが出來る。今や我國の大學は何等かの形式に於て校外教育を行うて居るのであるから此點に於ても同志社は先鞭を着けて居る。卽ち學術演說會といふ名稱の下に第一回の公開演說會が行はれたのは明治十三年十一月廿日であつた。其當時演說會場として、適當なる所がなかつたので、東山の雙林寺といふ寺院を借ることになつた。これを見れば當時佛教と基督教との間に何等反感のなかつたことが、想像される。第一回の聽衆は約三百名位であつた。勿論無料であつた。其後此演說會は度々開かれたのであるが、それが學術

的であり且つ通俗的であつたことは疑はない。然し當時の人々は演說といふことに就て全く無關心であつたやうに思はれる。三百人の聽衆中三分の一は同志社の學生であつたから、入場無料で二百人の聽衆とは餘りに心細い。然し私共學生に取りては、それが實に有益なる講演會であつた。私共はこれによりて新知識を得たのみでなく、大に雄辯術を學ぶことが出來た。講演者は主として同志社の教師であつたが、時には上級生から一人位其仲間入りを許されることがあつた。これは學生に取りて最高の名譽であつたと言ひ得る。私は其當時の日記を見て、講演者の擇んだ演題が如何に平凡にして野暮らしきものであつたかを感ぜざるを得ない。今其實例を示すことにする。第一回の演說會に於ける辯士と演題は次の如くであつた。山崎爲德が『心の解剖』、加藤勇次郎が『一大自由團』、ゴルドン博士が『目の養生』（通譯者は綱島佳吉）、宮川經輝が『皇國の一大敵』といふのであつた。山崎氏とゴルドン博士は同志社の教師、加藤と宮川は同志社女學校の教師であつた。綱島は五年級の學生であつたが、殊に英語が得意であつたため通譯の任に當つたのである。山崎は岩手縣水澤の人で少年時代には後藤新平と共に秀才として竝び稱せられたのであるが、最初帝國大學に入學したけれども、同志社の學風を慕うて中途轉學し、卒業後教師となつたのである。宮川と綱島とは後宗教界に於ける第一流の雄辯家として知られたのである。第二回の演說會に於ける辯士及び演題は次の通りであつた。三輪振次郎が『物價騰貴の說』菅野某が『關婚姻衞生論』ラーネッド博士が『生產上の改良器械を製する論』山本覺馬が『統計表の社會に有益なる論』、新島襄先生が『日曜日と文明の關係』であつた。三輪は學生ではあつたが、可なりの年長者であつたから、演說者として推薦されたのであらう。菅野が如何なる人であつたか、私には全然記憶がない。ラーネッド博士は同志社に於ける三人の米國教師中第一の學者であつて、私共に經濟學を教へたのも此先生であつた、山本覺馬は新島夫人の令兄であつて、同志社創立のためには新島先生の片腕となつて盡力した人である。其當時彼は京都府會議長を勤めて居たのであるが、盲目であり且つ跛者であつた。故に府會に於ても演說會に於ても彼夫人に負はれて其席に就いたのであつた。これを見ても彼が尋常人でなかつたことを知ることが出來る。私は新島先生が基督教主義の學校を設立するため、何故佛教の中心地たる京都を撰ばれたかに就ては未だ嘗て研究したことはないけれども、山本が此地に住んで居たといふことも其理由の一ではなかつたかと思ふ。それは兎に角として、其當時の演題は實に振つて居るではないか。今日から見ると如何にも古色蒼然たる骨董品の如き感じがする。

佛耶對抗演說講演會

は遂に發展して宗教演說會となつた。元來同志社の目的が基督教的文明を我國に輸入するに在つたことは既に述べた通りであるから、講演會によりて街頭に進出した同志社が

遂に宗教の研究から宗教の宣傳へ進展したのは當然のことである。言ふまでもなく京都は佛教の根據地であるだけに寺院の勢力は依然として强大であつた。此金城鐵壁の中に基督教が突然飛込んで來たのであるから、其處に多少の衝突が起つたのは實に已むを得ない。基督教は未だ鞏固なる地盤を得て居なかつたけれども、新しき活動力に富んで居たため、明治十四年頃から京阪神地方に於て大活動を開始することになつた。佛教側も新知識を有する人々を召集して盛に應戰したのである。これは殆んど今日見ることの出來ぬ事實であるから、私の日記を資料として其當時の模樣を述べることにする。基督教側は明治十七年五月十七日京都四條の劇場に於て大規模の基督教大演說會を開いた。これは殆んど前後に類例のなき演說會であつた。卽ち晝夜二回引續き開會したのであるが、午後は一時から五時まで、夜は七時から十二時まで、合計九時間であつて、辯士の數は合計二十名であつた。政談演說に於て二十名の辯士が出演するといふことは珍らしきことではないかも知れないが、九時間の演說會といふことは日本に於ける、否世界に於けるレコードではないかと思ふ。私は一々辯士の名は擧げないが、演題は古物展覽會の樣な面白味があるから、煩を厭はず、これを擧げることにする。開會の趣旨、神之性質、靈魂之說、眞理の勢力、基督教之傳、見えざる神を見るの法、基督教の結果、萬國基督教の現況、聖書之說、世界を救はんとするものは基督教なるか、阿彌陀如來の說、基督教と學術の關係、基督教の證據、罪之說、十字架の勢力、眞正の自由、信仰、愛神愛隣の說、天啓の要用なること及び其適宜なる證據、因果應報、何れを見ても演題としては實に平凡極まるもので、其內容も現代の人から見れば實に幼稚なものであつたに相違ないが、其當時に於ては新しく、且つ力ある說として聽衆の心を動かしたらしい。更に六月十一日には大阪道頓堀の劇場に於て同一規模の大演說會が開かれた。晝夜二回で辯士も二十名であつた。此二回の演說會は單に佛教徒を刺戟したのみでなく、東京の學者間にも基督教が論議されるようになり、大阪京都の新聞紙も宗教論で賑ふやうになつた。勿論新聞紙の殆んど全部は佛教を擁護したのであるけれども、大阪日報のみは基督教に贊意を表した。然し佛教徒は尙ほこれにて滿足することが出來なかつたと見え、東京から福澤先生の門下生數名を聘して基督教攻擊の演說會を開いた。これは第一回が大阪で開かれたのであるが、第二回は京都新京極の金蓮寺といふ寺院で開かれた。時は明治十七年六月であつた。私も傍聽に出かけたのであるが、今其辯士と演題を紹介すれば左の如くである。高木喜一郎が『外教論』、竹下康之が『困つた世界』、桐原捨三が『外教妄信者の迷夢を覺す』、高島小金治が『文明諸國又國教のあるあり』、波多野承五郎が『人を以て結合すべき論』といふのであつた。僧侶の中には新思想を會得せる人が少なかつたと見え、わざわざ東京から西洋思想を理解せる人々を迎へたのであるから、其雄辯は勿論、其論旨に就ても聽くべ

き點が少なくなかつた。同志社の學生達は幾たびか「ノーノー」と呼んで辯士の所論に反對を試みた。基督教が街頭に進出して大に世人の注意を喚起した際であるから、佛教側の襲擊を其まゝに放任して置く譯にゆかない。そこで金蓮寺に於ける演說會から四日後に於て同志社關係の人々は東山雙林寺に於て反駁演說會を開くことになつた。例の如く辯士と演題を紹介すれば次の如くである。森田久萬人が『基督教と學術の關係』、杉浦義一が『國教論』出崎爲德が『耶蘇教三大派論』、宮川經輝が『耶蘇教國の道德』、市原盛宏が『基督教と邦國の關係』といふのであつた。其當時サイエンスを科學ではなく、學術と譯し、ステートを國家ではなく、邦國と譯して居たのも面白い。金蓮寺の佛教演說會に多數の基督教徒が傍聽して多少の妨害をやつたといふので、雙林寺の演說會には多數の佛教徒が押かけて來た。豫期の如く彼等は復仇的にノーノーを連發して演說の妨害を試みた。會場の椽側は可なりの廣さがあつたので、此處にも多くの聽衆が立つて居た、彼等はノーノーだけでは物足らないと見えて盛に板張りを蹈み鳴らした。遂には板を蹈み破りて二三名の聽衆が墜落するといふ珍事さへ惹き起した。其後佛教徒側でも京都に於て數回の演說會を開いたのであるが、其度毎に同志社の學生は傍聽に出かけて盛に彌次を飛ばしたものだ。然しさすがに宗教家同士のとであるから、腕力沙汰に及ぶやうなとはなかつた。演說會に於てノーノーといふことを言ふやうになつたのは明治十四年頃が最初ではないかと思ふ。

第七章　憶出深き先生

若き先生　同志社の先生は單に學課を教ゆる教師ではなくて、自ら生きた模範を示して學生を指導する所の先生であつた。同志社は嚴重に禁酒禁煙を勵行して居たのみでなく、劇場や寄席に出入することも嚴禁されて居た。然し先生や上級生がこれを實行して居るのであるから、新入生がこれを嚴守することは比較的容易であつた。私は母、伯母、兄が常に煙草を用ひて居たのであるから、私も同志社入學前には既に煙草の味を覺ゆるやうになつた。酒は祖父母が好んで飲んで居たため、私は七八歳の頃から飲み習つたといふことである。今でも日本酒の芳醇は私に快感を與へる位であるから、若し私が同志社に入學して居なかつたならば一流の酒豪になつて居たかも知れない。これを思ふと私は同志社に對して深く感謝しなければならぬ。明治十二年から十七年に至る五年間に於て私共を指導して下さつた若き先生は市原先生、山崎先生、森田先生、及び下村先生の四人であつた。市原先生は一年級のリーダーを擔任されて居たから、私共は入學すると直に先生の教授を受けた。先生は雄辯なることに於て他の先生よりも優つて居た。後年米國に留學し、歸朝後は日本銀行に入り、遂に朝鮮銀行總

裁になられた。山崎先生は既に述べた如く、先生の中では最も優秀なる學者であつたが、健康が充分でなかつたため、早逝された。森田先生は秀才ではなかつたかも知れぬが、篤學者であつた上に眞面目であつたため、私共學生は非常に親しみを感じて居た。下村孝太郎先生は物理學を擔任されたのであるが、私共が教科書として用ひたガノー著物理學を説明するにも常に英語を用ひられた。先生も後年米國に留學し、歸朝後同志社のハリス理化學校に於て教師生活を繼續された。理學博士の學位を得られた後漸次視力衰へ、今や全く失明され居るのは、實に同情に堪へない。此四先生は何れも同志社神學部の卒業生であつて、私の入學當時は何れも二十二三歳の青年であつたやうに思ふ。私共と同じく寄宿生活を送つて居られたが、これがため第一寮の階下に特別の室が設けられて居た。然し食事は三度とも學生と同樣食堂に於てなされた。散歩とか遊戯とかも先生は常に私共と其行動を共にされた。其頃は先生も生徒と同じく教場内に於てすら袴を用ゆることはなかつた。斯の如く年齢に於ても、生活の樣式に於ても、教師と生徒との間に殆んど差別はなかつたけれども、學生は先生に對して尊敬の念を失はなかつた。漢學塾では昔の風が遺つて居て、先生は一種の威嚴を以て塾生に臨んだものであるが、同志社は全くデモクラチックであつた。これは基督教によりて指導された米國文明を其まゝ同志社教育の基本精神としたためであつたと思ふ。デモクラシーといふことは決して理論だけで

會得の出來るものではない。これは當然日常生活に於ける實驗によりて修養すべきものである。此意味に於て五年間に亙る私の同志社生活は實に有意義であつた。然しデモクラシーといふことは決して長幼の別もなく、教師と生徒の差がないといふことを意味するものではない。物質的或は外面的に見れば私共はすべて平等の位地に立つて居たけれども、精神的或は内面的には少からぬ差異のあることを認めて居た。だから學生は教師を尊敬して居たのみでなく、下級生は上級生によく服從して居た。特に私が述べて置きたいことは前記の四先生の外に上級生が下級生の授業を擔任して居たといふことである。勿論これは特別の場合に限られて居た。私が一年生であつた時に後年有名な學者となつた大西祝は四年生であつた。彼は學才から言うても品性から言うても當時の同志社に於ける第一の模範生であつたから、特に撰ばれて二年級の數學を擔任することになつた。多分學校からは多少の手當を拂つて居たやうである。尚ほ學校とは何等の關係なくして上級生が特に下級生のため特別教授をやつて呉れた例が少なくない。私共が五年生であつた時綱島佳吉（當時神學部在學）は私共有志のためにミルトンのパラダイス・ロストを講義して呉れたこともあつた。これを見ると同志社は一面に於て漢學塾の如きであつたとも言ひ得る。私共が三四年生であつた時市原先生と森田先生は良緣を得て同じ日に結婚式を擧げられた。一部の學生は其席に招待された。其後教師にして學生と同じく寄宿舍生活を

なす人は殆んどなくなつた。市原、森田兩先生の夫人は同志社女學校の卒業生であつたが、私は序に此女學校に關しても一言して置きたい。米國の習慣から言へば、男女共學は少しも珍らしきことではないけれども、明治十二年頃同志社に於てこれが行はれて居たことは餘り廣く知られて居ないやうだ。私の入學當時同志社女學校の上級生四五名は度々同志社の教場に來り、男生と共に講義を聽いて居たのであつた。若し政府が何等干渉を加へなかつたならば、男女共學制度は今一層大規模に行はれて居たかも知れない。然し教場内に於ける男女共學は間もなく廢止されたけれども、同志社に大なる講堂が建設されるようになつてから、日曜日に於ける禮拜説教には女學校の生徒も全部出席するようになつた。私は今でもこれが男女學生に良き影響を與へたのではないかと考へて居る。

米國教師　私の入學當時先づ私共に英語を教へて呉れたのはデビス先生であつた。大學卒業後南北戰爭に參加して大尉の任に就いて居たといふのだから、何となく軍人らしい淡白さと活潑さとがあつた。米國教師は何れも立派な人であつたが、其中でもデビス先生が學生の間に最も人氣があつたやうに思ふ。ラーネッド先生はエール大學に於ける秀才であつて學者の系統を受けて居る。寡言沈默の人であつて、實に規律正しき生活を送られた。私は度々先生が午後四時頃散歩に出かけられるのを見たことがある。多分先生には食事時間、睡眠時間、勉强時間等が嚴重に規定されて居たらしい。近頃私は友人留岡幸助から次の如きことを聽いた。留岡が同志社を卒業して宗教運動に從事して居た頃、一日晩飯後にラーネッド先生を訪ひ種々なる雜談に耽つた。然るに先生は突然ランプを手にして玄關の方に歩みながら『もう私の勉强時間になりました』と言ひつゝ否應なしに留岡を送り出したといふことである。私が一昨年渡米した時ローサンゼルスの附近に餘生を送つて居られる先生と其夫人を訪問した時にも同じ様なことを經驗した。先生は質素な家に居住し、三度の食事は近所の下宿屋でされるといふことを聞いて居たのであるから、私は先生に再會の喜びを述べると同時に私も下宿屋で晝飯をいたゞきたいと申出た。先生は勿論これを快諾された。食事は十二時であるが、先生は談話中五度も六度も時計を見て居られたが、二分前になると急に談話を中止し、私を促して家を出られた。私は先生が昔にかはらぬ規律正しき生活をされて居るのを見て感激せざるを得なかつた。ゴルドン先生は前に述べた如く醫學博士であつたから、衛生に關することに就ては常に私共を指導された。殊に先生は米國教師中日本語に最も巧みであつた。後年グリーン先生も同志社の教師となられたが、私共の課業を擔任されたのは四年の第一學期及び第二學期に於ける英語演説及び英作文に過ぎなかつた。米國教師は何れも結婚して居り、中には二三人の子供を有つて居る人もあつたが、まだ三十代の壯年であつた。兎に角日本まで出かけて來る位であるから、熱烈なる宗教心に燃えて居たことは言ふまでもない。

從つて其人格も確に私共の模範となり得べき人々であつた。私は此項を終るに先きだち、日本教師及び米國教師に共通した面白き事實を語らねばならぬ。それは各教師が各自專門以外の學課を擔任したといふことである。現在の教育方針から言へば、大學は勿論のこと、中學といへども、各學課は何れも專門の教師が擔任することになつて居るけれども、同志社の教師は左樣でなかつた。森田先生は哲學方面を專門として居られたから、心理學を擔任されたのには何の不思議もないが、私共の級に對しては、二年生の時に算術、三年生の時に代數、幾何、三角、四年生の時には修辭學、五年生の時には心理學の外に地質學を擔任された。ラーネッド先生も可なり多くの學課を教授された。私共が三年生の時には英語演說と英國史、五年生の時には政治學、經濟學、天文學を擔任された。ゴルドン先生が生理學と化學を教授されたのは當然であるが、醫學博士の肩書を有する先生が倫理學を擔任されたといふことは今日から考へると少し變であるかも知れない。デビス先生が論理學と英文學史を擔任されたことも多少問題になるが、下村先生が物理學と歐洲文明史を擔任すると共に隨意科として論理學を教授されたことも注意すべき事實である。新島先生が學課を擔任されることは殆んどなかつたのであるが、教師の手が足りない場合には自ら進んで教壇に立たれた。私共は三年生の時單に一學期間だけ先生の下に萬國史を學んだことがある。言ふまでもなく同志社は極端に集中主義を實行したのであるから、一學期を通じて學課は普通三科目に過ぎなかつた。然し各學科につき一人づゝ專門の教師を雇ふことになれば、少くとも十人乃至十五人の教師を要することになる。これは財政的に見て、當時の同志社には不可能のことであつたやうに思はれる。斯の如き理由あるがため同志社の教師は何れも三面六臂であるかの如く多能であつたのである。然しこれは決して同志社教育の價値を減ぜしむるものではなかつた。大學教育には當然專門の教師を必要とするけれども、其當時に於ける同志社は單に普通教育を目的として居たのであるから、凡ゆる學課に對して概念を得ることを必要として居た。殊に同志社は英語の教科書を用ふることを原則として居たから、教師は主として其教科書を學生に了解せしむることを目的として居た。學生は各自教科書を讀んで自ら其知識を得ることに努力した。教師は單に其補助者たるに過ぎなかつた。

新島先生　私が明治十二年九月初めて同志社に入學した時先生はやつと三十歲を超へられた位の壯年であつた。私は玆に先生の傳記を述べる必要を感じないが、單に何故先生が同志社を創立するに至つたかを叙述するだけに止める。先生は青年時代國禁を犯して米國に赴いた。若しこれが露顯して官憲の手に渡されたとしたならば、先生が吉田松蔭と其運命を共にせられたことは言ふまでもない。若し又先生が基督教の感化を受けられなかつたならば同志社は當然設立されなかつたであらう。此意味

に於て先生の渡米は我國文化のために一種特別の貢獻をなしたものと言ひ得る。私は入學以來殆んど毎日先生に接する機會を得た。勿論最初は直接に先生と話を交ゆる樣なことは出來なかつたけれども、先生の演說や說敎を聽くことは其幾度なるかを知ることが出來ない位であつた。殊に私が明治十九年から二十年にかけて同志社の敎師となつた時には一層親しく先生に接近する機會を得たのであつた。先生は理智の人といふよりも寧ろ情熱の人であつた。先生の演說や說敎には聲涙共に下るといふことが度々あつたので、それだけ聽衆を力强く感動せしめた。先生は渡米前に於て東洋流の敎育を受けられたのであるが、米國に於ては主として基督敎の感化により人格の修養に努力された。故に或人の言へるが如く先生の人格は東洋流の英雄と基督敎的紳士との二分子によりて構成されて居ると言ひ得る。もつと適切に言へば東洋的英雄といふ素質に基督敎の磨きをかけたのが卽ち先生の人格である。先生の詩や歌には確に英雄的人格が現はれて居る。明治維新に於ける志士が憂國の志に燃へて居た如く、先生も亦憂國の人であつた。先生は又書道にも達せられて居たやうであるが、其書體を見ても先生の英雄的方面が窺はれる。先生の容貌は實に堂々たるものであつた。背は普通人よりも高く、肉附は普通であつた。髮も口髭も漆黑であつて、髭は多い方であつた。眼は黑色で烱々人を射るといふ風であり、唇は締つて居た。然し先生が微笑される時には眼元にも口元にも何とも言へぬ愛嬌があつた。威

あつて猛からずといふことは先生の場合に最も適當した語であるやうに思はれる。先生の生活は凡て西洋風であつた。住宅も衣服も左樣であつた。外出の時には必ず洋服を着用されたが、自宅に於ても和服を用ひられたことは殆んどなかつたやうである。同志社には時々有名なる來客があるので、時の文部大臣なども學校視察のため來訪することがあつた。斯る場合には學生全體が講堂に集まつて、其珍客を迎へると共に其人の演說を聽くのであつた。此場合に於ても私共は先生の風采が誰よりも堂々たるを見て少からぬ誇りを感ずるのであつた。其當時先生は三十歲前後の壯年であつたから、進んで學生に接近することを努められた。同志社の初代に於ける體育の一つは山野を駈け廻るといふことで、これがため兎狩が度々催ふされた。先生も輕裝してこれに參加されたのみでなく、若し獲物がなく、若くは少なき場合には自ら鹿肉や牛肉を寄贈し、學校の食堂に於て私共と食を共にされるのであつた。先生はデモクラシーの精神に徹底して居られたのであるから、私共を恰も同輩であるかの如く待遇された。其一例を擧ぐれば、先生は嘗て學生を呼棄にしたり、或は何々君と呼ばれたことはなかつた。如何なる人を呼ぶにも何々さんと言はれたのである。これは決して學生だけに限られて居ない。學校の小使であらうが、人力車夫であらうが、先生の目から見れば何れも同胞兄弟である。姓名が不明である場合には小使さんとか車屋さんとか言はれる。先生は學生から『先生々々』と呼ばれることを好

まれなかつた。或時先生は私共にこんなことを言はれたことがある。『私共は神の前に於て誰も同胞兄弟であるから、今後皆さんはどうぞ私を新島さんと呼んで下さい』先生は眞面目にこれを要求されたけれども、これだけは何人も服從することが出來なかつた。概して言へば其當時に於ては現在に於けるが如く『先生』といふ語を濫用しなかつたやうだ。私には明瞭なる記憶はないけれども、私共は同志社の教師を呼ぶに何々さんと言つて居たのではないかと思ふ。若し左樣であるとすれば新島先生だけは全く例外であつたのだ。何分同志社は僅に百二三十人の生徒を有して居たのだから、先生と學生とは極めて親密であつた。先生は一々學生の顏と名前を記憶されて居るのみでなく、其學才や性質まで悉くこれを知つて居られたのであるから、學生に何か異變が起れば、先生は決してこれを棄て置かれるやうなことはなかつた。明治十三年十二月二年生であつた私は瘍を病みて寄宿舍の一室に獨り淋しく臥床して居た。瘍が恐るべき病であることは幼少の頃から聞いて居たのであるから、病院に於て醫師から瘍といふことを診斷され卽座に手術を受けた時私は强く恐怖の念に襲はれた。私は第四寮の三疊の部屋を獨りで占領して居たのであるが、一日新島先生は私を訪問して種々なる慰安を與へて下さつた。のみならず見舞品として蜜柑を澤山いたゞいた。今一つ忘れることの出來ぬことが明治十六年一月に起つた。附屬小學校時代に於ける私の同級生に木村正吉といふ秀才があつた。彼は私より二年も後れて同志社に入學したのであるが、不幸にして彼はチブスに罹り京都の府立病院に入院した。私共數名の福岡人は交代で看護したのであるけれども、不幸にして彼は遂に不歸の人となつた。これは午前四時頃であつたが、夜の明るを待つて私共はこれを新島先生に通告した。先生は間もなく病院に來て下さつた。私共は早速葬式の準備に取かゝつたが、先生と夫人は棺の中に敷くべき白布の蒲團を造つてこれを送られた。殊に葬式の場合先生自ら追悼演說をなされたのは、單に故人のために大なる光榮であつたのみでなく、大に私共を感激せしめたのである。以上記する所のことは單に私のみに關係して居ることであるけれども、同志社學生の多數は必ず同樣の經驗を有して居ると信ずる。明治二十三年先生が大志を懷きながら大磯の海邊で永眠された時、同志社の學生が雪解けの途を徒步しながら、先生の遺骸を納めた棺を京都驛から寺町通丸太町上る先生の住宅まで運んだのも、更に葬式の日に先生の住宅から若王寺山上まで擔いだのも、全く先生を追慕する眞情の流露に外ならない。

デモクラシイーの敎育

同志社の學生は徹頭徹尾平民主義を以て押通ふした。前に述べた如く同志社の學生が袴を着けなかつたといふことも要するに平民主義の現れではなかつたかと思ふ。其當時の學生で卒業後官吏になりたいといふ希望を有して居たものは一人もなかつたやうである。私が同志社入學の目的は海軍々人たらんがためであつたけれども、二年生になつた頃は既に其希望を棄てゝ居

た。要するに學生の全部は役人たることを以て寧ろ恥辱であるかの如く考へて居た。これも新島先生の感化が然らしめたものであると信ずる。先生の滯米中には岩倉具視、田中不二麿といふが如き著名なる人々が米國を訪問した。先生は度々其依頼によりて彼人々のために通譯の勞を取られたといふことである。若し先生に役人たらんとの希望があつたならば、岩倉や田中の如き人は必ず先生を要路の人々に推薦したに相違はない。私の聞いた所に據ると有力なる役人の中には先生に官吏たることを勸誘したものもあつたらしい。然し先生は基督教的文明を我國に輸入することが國家を愛する所以であると固く信じて居られたから斷然これを謝絶されたといふことである。先生が京都の地に同志社を創設してこれを經營されるには殆んど想像の出來ぬ程多くの困難があつたらしい。先生が其頃詠まれた歌に『岩がねも通ふれとはなつますらをの心の矢先き神のまにまに』といふのがある。萬難を排して先生が苦闘された有様が目に見ゆるやうに思はれる。明治十七年四月先生は歐米漫遊の途に上られたのであるが、折々先生の通信が禮拜堂の集會に於て發表された。今日でも明瞭に私の記憶に殘つて居るのはローマから送られた先生の通信である。ローマに行かれた序を以て羅馬法皇にも面會したいといふ希望があつたから、其手續を調査された所、法皇に面會する者は必ず其の前に跪いて敬意を表しなければならぬといふことが判明した。これがため先生は法皇に面會することを斷念された。『私の膝は法皇の前で曲げるには餘りに固すぎる』といふことが其理由であつた。實に先生の面目躍如たるものがある。何年頃のことであつたか斷言は出來ぬが、多分明治十九年の頃に基督教會合同問題が當時の基督教界を賑はした。其頃日本には各派の基督教例せばプレスビテリアン教會、メソデスト教會、監督教會、組合教會の如きが殆んど同時に輸入されたのであるから、國民の中には其歸趨に迷ふ者もあつた。現在我國に於ける無産黨の合同問題と同じく其當時の少壯基督教者は何れも戰線統一論者であつた。然し新島先生はこれに贊成されなかつた。其理由は要するに指導精神の相違といふことであつた。同志社は組合教會派に屬するのであつて、英語ではコングリゲーショナル・チャーチといふのであつた。メソデスト派や監督派は監督制度であつて、言はゞ中央集權に傾いて居る。之に反してコングリゲーショナル派は會衆を本位にして居るから、各自の教會には自治權がある。換言すれば組合教會派に於て最も多くデモクラシーの精神が實現されて居る。故に各派の合同が行はれゝば、それはデモクラシーの衰退を意味するといふのが新島先生の意見であつた。勿論先生は教育を主とされて居たから、表面に活動することは遠慮されたけれども、私共に對しては熱心に合同の不可なることを說かれた。合同論者の多數は同志社第一期の卒業生（神學部）で、年齢から言へば、廿七八歳から三十歳までの壯年であつた。新島先生と共に合同反對の意見を有して居たものは二十歳前後の青年であつた。

合同論は遂に不成功に終つたのであるが、これを見ても、新島先生が如何に熱烈なるデモクラシーの擁護者であつたかを知ることが出來る。私は講堂に於て教會に於て先生の演說や說教を聽くこと幾回なるを知らないが、今尙ほ記憶に殘つて居るのは二三に過ぎない。其中平民主義に關係あるものを一つだけ擧げることにする。或時先生はゼンツルマン卽ち紳士といふことの說明を下されたことがあるが、其時次の如き實驗談をされたことを記憶して居る。先生が留學中或都市に於ける通行繁き街路を通行されて居た時のことである。或婦人が人道を横ぎらんとする時馬車が疾走し來つたので、あわや其婦人は引倒されんとするのであつた。其時一人の男子は急いで其婦人を助けたので、幸に事なきを得た。其時婦人の夫が飛んで來て、いきなり今助けて呉れた人の手を握り you are gentleman（あなたは紳士です）と言つたそうだ。こんな精神で同志社の學生は薫陶されたのである。

第八章　宗教的感化

宗教生活　前に述べた如く私は最初の一年を寄宿外で送つたのであるから、同志社の宗教生活に接する機會がなかつた。然し私が宗教的感化を受けるようになつたのは比較的急速であつた。私の寄宿生活は明治十八年九月六日に始まつたのであるが、私の日誌に據れば同年十月九日には京都寺町で聖書を購つたとある。當時聖書は唯一部のみ飜譯されて居たのであるが、全部の譯が出來たのは數年後のことである。私は寄宿外に在る時も特に基督教を研究せねばならぬといふ熱心はなかつたが、さらばと言ふてこれに反感を懷くやうなことはなかつた。私は宗教に對して全く白紙であつた。當時政府の基督教に對する態度は寧ろ禁止的であつて、校内でバイブルの講義をなすことは嚴禁されて居た。然し校外に於て宗教を說くことは自由であつたから、同志社は道を隔てゝ學校の向側に在る一軒の家屋を買入れ、これを聖書研究所として使用した。然しこれも暫時のことで、間もなく校内でも聖書の研究が出來るようになつた。私は何時頃から眞劍に宗教を研究するようになつたかと言へば、それは前に述べた如く、私が瘍を病んだ時からである。明治十三年の十二月末には第一學期の試驗があ

るといふので懸命に地理書を暗記して居た。少し前から鼻と唇の間に小き腫物が出來て居たのであるが、時を經るに從ひ恰も針で刺すが如き痛みを感ずるので、遂に府立病院に至つて醫師の診察を乞ふた。然るにそれは瘍であつたから、直に手術を受けることになつた。少し發熱もしたので、試驗準備を中止して病床に臥した。私は幼少の時分から瘍といふ腫物は恐ろしきもので、一朝これに惱めば、患者の多數は生命を奪はれるといふことを聽かされて居た。私は死が刻々身邊に迫つて居ることを感ぜざるを得なかつた。遠き旅の空で死ぬるといふことは遺憾此上ない。若し父母がこれを聞いたならば、如何に悲嘆するであらうかなど考へた時涙は止め度なく流れた。私は數日間全く死生の十字街に立つて居た。其時こんなことも考へて見た。若し基督教の說くが如く死後尙ほ來世があるとすれば、私共は敢て死を恐れるに足らぬではないか。然し永遠の生命といふことが果して事實であるかどうか。幸にして此度死を免れることが出來るならば眞劍に基督教を研究しよう。是れが其當時私の考へたことであることは今も尙ほ明瞭に記憶して居る。幸にして病氣は漸次快復したけれども全快までには約二十日を要した。全快の數日前私は再び病院に行つたが、醫師は私に次の樣なことを語つた。『あなたの發病した少し前のことである。あなたと殆んど同年位の女子が而もあなた同樣鼻と唇の中間に出來た瘍の手術を賴みに來たが、少し手遲れであつたゝめ手術後遂に死亡した。あなたは本當に幸運だつた』。私は全く自分の幸運を喜ばずには居られなかつた。病氣全快後私の基督教研究に對する態度は極めて眞劍であつた。自ら聖書を讀むことは勿論、日曜日の說教や其他の宗教的集會には勤めて出席した。病氣回復後四ヶ月を經て私は熱心なる基督教徒となつた。私は父母が私の信仰に就て如何に考へるであらうかを多少懸念したけれども、何時までもこれを秘することは出來ないのであるから、私は手紙を以て此事を父に報告した。それは明治十四年四月一日であつた。私の父は極めて放任主義の人であつたから、私の信仰に就ては少しも干涉するが如きことはなかつた。然し私の信仰は單に個人的のことであつて、一般に基督信徒として認められるには洗禮といふ儀式を經なければならなかつた。當時洗禮といふことは重大事として考へられて居たのであるから、敎會も洗禮希望者も極めて愼重なる態度を取つた。學校內に敎會を設くることは出來なかつたので、敎師でも學生でも洗禮を受けて居る者は學校外に在る何れかの敎會に屬せねばならなかつた。明治十四五年頃には新島先生の住宅に接近して小き敎會堂があつた。これは同志社關係の人々が禮拜する所であつた。同志社に關係なき人々は別に三條通りに敎會を設けて居たから、私共はこれを三條敎會と呼んで居た。其後敎會の數は漸次增加したのであるけれども、新なる入會志願者に對しては可なり嚴重なる試驗を行ふことになつて居た。此試驗は單に信仰問題のみでなく、人格問題にまで及んだ。換言すれば其素行に於て

も、友人間の評判に於ても缺點なきことを要するのであつた。入會志願者に對しては日を定めて教會員全體が種々なる質問をする。質問終了後教會員のみが入會を許可すべきや否やを決するのである。教會員の大部分は同志社の教諭や上級生であるから、志願者の信仰狀態、操行、品性とに關して比較的詳細に知つて居る。若し志願者が此試驗に落第するようなことがあれば、これは可なり大なる恥辱である。これがため自ら進んで志願する者は殆んどなかつたように思はれる。よし自ら志願しなくとも、上級生の多數が充分だと認めるようになれば、彼等が推薦するようになる。これが志願者に取りて最も安全なる方法であつた。言ふまでもなく洗禮は一の宗教的儀式に過ぎない。然し一方から見れば、洗禮を受けるといふことは人格試驗に及第したといふ折紙を附けられた樣なものである。同志社學生に取りてはこれが確に大なる名譽であつた。私が信仰の決心を父に告げたのは明治十四年四月一日であつたけれども、洗禮を受けたのは十五年二月五日であつた。斯の如く洗禮を受ける準備に約十ケ年を要したといふことは以上述べたような事情があつたゝめである。其當時今出川通りで同志社女學校から餘り遠くない所に教會堂が出來て居た。これは第一教會と呼ばれて居たが、私が洗禮を受けたのは此教會に於てゞあつた。其日洗禮を受けたものは十數名であつたが、私の同級生である新原俊秀及び岸本能武太も其中に在つた。勿論洗禮は一の形式に過ぎないけれども、私共はこれによりて一種特別の感銘を受けたことを感謝して居る。それは新島先生が私共に洗禮を授けて下さつたといふことである。

信仰の經路　私は基督教を信ずるに至つた經路に就き今少しく詳細に語つて見たいと思ふ。前に述べた如く私が癆を病んだといふことが私をして信仰生活に突進せしめた動機であることは言ふまでもないが、私がよくもあの當時に於ける基督教の信仰を丸呑にしたものだといふ疑問に對して多少の說明を試みることにする。現在に於ける私の基督教觀は大に同志社時代に於けるそれと異なつて居る。現在の私には基督の教義（ドグマ）中何が必要であり、何が不必要であるかは判然として居るけれども、同志社時代に於ては聖書中に在る一言一句を悉く眞理として信ぜねばならぬように强要された。例へば基督が神の力によりて處女マリヤから生れたといふこと、從つて基督は超人間であることゝ又基督には種々不思議なる奇蹟を行ふ力があつたといふこと、十字架で殺された後不思議にも蘇生したといふことなどは現代の人々が容易に信じ得ないことであるに拘はらず、私共は何等の矛盾をも感じないでこれを信じて居た。若し此等ドグマを否認した人があれば、彼は必ず異端者として排斥されたに相違はない。然るに私共青年學生は勿論のこと、教師に至るまで、眞面目にこれを信じて居たのは何故であるか、私はこれが理由を說明する。前にも簡單に述べた如く、同志社の學生は禁酒、禁煙、

禁劇の校則を嚴重に守つて居たばかりでなく、人格といふことに重きを置いて居た。學生間の談話と言へば宗教か勉强のことに限られて居て、現在の如く戀愛問題を口にするが如きことは大なる罪惡であるかの如く考へられて居た。勿論これが何時までも繼續したといふ譯ではない。私が卒業する頃には生徒の數も著くし增加したのであるから、德富蘆花の小說『黑の目茶色の目』にあるが如き不良分子が既に混入して居たかも知れぬ。然し大體に於ては漢學塾などの生活に比して同志社の其れは全く別天地の感があつた。學生の多數が親切であり、且つ高尙なる氣品を具へて居た。私はかやうな境遇の中に置かれたのであるから、無意識的に宗教と道德とが不可分のものであると信ずるようになつたらしい。同志社學生の多數は熱心なる基督教徒であるがため、高潔なる人格を造り上げたのである。故に私自身も人格修養のためには基督教を信ずるの外はない。所謂鹿を追ふ者は山を見ずといふ道理で、私は何等の研究をも爲さずして不可解なるドグマをも丸呑にした。これが第一の理由である。更に述べて置きたいことは其當時に於ける基督教が相當哲學や科學によりて理論づけられて居たといふことである。これがため私共青年には不可解なるドグマが必ずしも迷信ではないように考へられた。單に自らこれを信ずるのみでなく、後には人々に向つても大膽にこれを說くようになつた。これが第二の理由である。更に私共青年を强く刺戟したことは西洋文明が全く基督教の力によりて出來たものであると敎へられたことである。其當時に於ける文明國は何れも基督教國であつたから、我國をして歐米諸國の如き文明國たらしむるには基督教を輸入する外ないと信じたのも決して無理ではなかつた。これが第三の理由である。今日から見れば其當時の思想は極めて幼稚であり單純であつて、到底永く持續すべき筈のものではなかつたが、よし其れが迷信であつたにせよ、私共が眞劍にそれを信じて居たことは事實である。

宗教宣傳運動　私が初めて基督教を信じた當時の意氣込に就て少しく述べて見たい。私が信徒たることを決心した時、先づ最初に考へたことは父母にこれを通告するのみでなく、一日も早く父母を信徒たらしめんといふことであつた。若し父母が私の信仰に反對するが如きことあつても、私は斷じてこれに服從しない積りであつた。若し父が學費を送ることを拒絕するようなことがあれば、私は自活の途を求むる決心であつた。兎に角其當時に於ける私共の信仰は恰も基督教の初代に於けるが如く熱烈なるものであつた。私は將來基督教の宣傳者たるべきか否かに就ては判然と考へては居なかつたけれども、兎に角基督教的精神を以て如何なる事業にも從事すべしといふことは堅く決心して居た。基督教は個人をも社會をも救濟するといふ旗幟を標榜して居るのであるから、基督教徒は各自小救主を以て任ぜねばならぬといふのが私共の抱負であつた、明治維新は我國の政治組織を一變したのであ

るが、私共は精神的方面から第二の維新を來さねばならぬと考へて居た。信仰の高潮に達した時には『神は私に其目的を達せしめ玉ふまでは必ず私に生命を與へ玉ふ』といふ確信すら起つたことがあつた。斯の如き情勢であつたから、同志社の學生は機會さへあれば基督教の宣傳に從事した。私共は前に述べた如く演說の練習に熱中して居たのであるが、若年の者は容易に公衆に向つて演說する機會を得ることが出來なかつた。然し私には比較的早く其機會が來た。私は毎年夏休暇には鄉里福岡に歸つたのであるが、其頃福岡にも基督教の講義所が出來て居て、私共の先輩である不破唯次郎氏が其主任であつた。毎週日曜と水曜の晩に演說會が行はれたので、私は毎回不破の前座を勤めることになつた。これが公衆に對する私の處女演說であつて、其時私は僅に十七歲であつた。其夏は度々福岡に於て演說したのであるけれども、言はゞ田舍廻りの役者見たようなもので、京都若くは大阪神戸などの檜舞臺では容易に演說する機會がなかつた。然し明治十六年十一月には私も既に五年生であり、年齡も十九歲であつたから、京都の第二基督教會に於て開催された演說會の辯士として晴れの演壇に立つことが出來た。翌年の二月には京都の松原通に在る小劇場で演說した。同年四月には神戸に招かれ楠公前の大黑座といふ可なり大なる劇場で演說した。これで私もやつと一人前の辯士として取扱はれるようになつた。明治十七年七月私が卒業した時には鄉里には歸らずして、夏休暇の大部分を丹波で送ることにした。勿論これは基督教宣傳のためであつた。私は以前にも一二度丹波に宣傳旅行をやつたことがあるから、丹波と私は可なり親密な關係があつた。船枝村には井上半介といふ漢學者があつて十數名の學生を薰陶して居た。先生も弟子の一部も基督教徒であつたから、私は度々其塾を訪問した。其頃は殆んど毎晩のやうに各地で演說したのであるが、雄辯術の練習としてこんな好機會はなかつた。同志社學生が比較的早く實際社會に出て演說することが出來るようになつたのは全くこんな好機會が與へられたからであつた。

信仰復興　私共は基督教を信仰して以來歐米諸國に於てリヴァイヴァルといふことがあることを度々聽かされた。これは信仰復興の意味であつて、普通の信仰狀態から急激に熱狂的狀態に轉化することを意味する。私共は斯の如き事實を同志社に於て見ることが出來た。其後これに類することが起つたかも知れぬが、斯る大規模の信仰復興は其前に於ても其後に於ても聞いたことがない。今私は其大要を述べて見よう。時は明治十七年三月で第二學期を終了する少し前のことである。私共同級生は其年の七月に卒業するのであるから、何よりも勉强といふことに心を注いで居た。然るに其當時の二年生であつたと記憶するが、數名の有志は度々小集會を催ほして宗教的修養をやつて居た。或日彼等が何時もの如く熱心に神に祈つて居る中に或一人は一種のインスピレーションに打たれた。彼が自

ら其感想を語るや、恰も鐵が磁石に觸れて自ら磁力を得ると同じく、聽者も亦悉く其靈氣に感動した。斯くて二年生の精神靈動は群衆心理の作用によりて全校を動かした。これが上級生でなく、寧ろ下級生の力によりてなされたといふことは面白き事實である。僅に十五六歳である二年生は殆んど全校を震動せしめたのである。彼等は進んで京都市内に在る二三の教會に出席して其信仰を直裁に語つたのであるが、教會員は恰も物の響に應ずるが如く悉く靈感に打たれたのである。此運動は忽ち燎原の火の如く大阪神戸の諸教會にも燃え廣がつた。恐らく日本中の教會にして多少なりとも其影響を受けなかつたものはあるまい。同志社の學生は何れも信仰の最高潮に達して居るのであるから、勉强や試驗などに拘泥すべきではない。宜しく全國の諸教會を動かし、更に日本全體に向つて福音を宣傳すべしといふのが輿論であつた。然し新島先生はこれに賛成されなかつた。學生の本分は勉學に在る。宗教の宣傳は未來のことである。信仰の復興は喜ぶべきことであるけれども、目前に迫れる試驗はこれを中止する譯にはゆかぬ。試驗の後には一週間の春季休暇がある。此時こそ諸君が大擧して宣傳を爲すべき時であると、先生は理を盡して訓誨された。學生は代表者數名を各地に送つて宣傳せしめ、自らは止つて試驗の準備を行ふことになつた。私は此信仰運動に對して少しも反對する考へがなかつたのみでなく、寧ろ信仰の最高潮に達して見たいと思ふたのであつた。然し私と他に二三人の者はどうしても精神靈動といふことを經驗することが出來なかつた。私の同級生にも白熱的信仰を有つて居たものがあつたから、私は寧ろこれを美んだ位である。然し私は結局此宗教的運動によりて自分の素質が決して情熱的でないといふことを確めることが出來た。感情は決して永續的のものでないから、此宗教運動も一ケ月後には靜寂の狀態に歸した。大風一過の後幾多荒廢の跡を見るが如く、同志社のリヴァイヴァルにも不幸にして悲慘なる犧牲が現はれた。每晩禮拜堂や教室に於ては幾多の小集會が催ほされた。連日連夜の活動と興奮は或學生をして半狂亂の狀態に陷らしめた。私の同級生の一人は遂に全くの狂人となつた。彼は木村といふて同級生中の最長年者であつた。學校卒業後は必ず宗教々師となることを目的として居たゞけ彼は實に熱心なる信徒であつた。信仰復興運動の起るや彼は忽ちこれに參加して一方の旗頭となつた。然るに彼は連日の疲勞のため遂に精神に異狀を呈するようになつた。新島先生は大に心配して木村のために住宅の一室を開放されることになつた。私と同級生村井知至とは看護の任に當つた。木村はさすがに宗教に熱心であつたゝめ、其言ふこと爲すことは悉く宗教的であつた。彼は全く理性を失つて居たから、其考へは絶えず動搖して居た。時には自分が大說教家であると考へたり、時には基督の弟子ポーロであると思つたり、時には基督自身になつたりした。病室は二階に在つて、其横が可なり廣い緣側になつて居る。其二階からは東山がよく見えた。木村は

或朝縁側に出で、下を向いて唾を吐いた。私を顧みて『此唾はやがて雀になるから見ておれ』と言つたが、此時彼は基督になりすまして居た。彼は平常高度の近眼鏡を用ひて居たが、其時彼は眼鏡をはづして東山を見ながら、驚いて叫んだ。『これは不思議だ、眼鏡がなくとも東山がよく見える。眼鏡を用ゆるようでは到底大説教家になる資格はない。今のやうに眼鏡が要らなくなれば、こんな有難ことはない。これといふのも神様が私を大説教家にするといふ思召があるからだ』と言ふのを見れば、彼は大説教家を以て任じて居るようだ。私共同級生は交る〴〵彼を看護したけれども急に回復の見込がないので、一週間の後には精神病院に入院せしむることになつた。其後一二回私は彼を訪問したけれども、彼は全く私を認識することが出來なかつた。結局彼は數ヶ月の後病院で最後の安眠に就いた。

社會問題の萠芽　私が朧氣ながら今日の所謂社會問題といふことを考へるようになつたのは十六七歳の頃からであつた。前にも述べた通り同志社の北隣りは相國寺といふ禪寺であつて、其境内は可なり廣い。門を入ると道路の左側に蓮池があり、其れに隣して小き松林がある。松樹の下は芝生であつて夏季の休息所としては最も適當である。私共は此境内を食後の散歩場として居た。何分禪寺のことであるから、全く俗世界を離れた感があつた。故に散歩のみでなく、思索のためにも、私共は此境内を利用した。然し此清淨無垢なる靈地に於て、此世ながらの地獄を見せつけられることが屢であつた。朝飯後の散歩に於て私は何を見たのであつたか。松樹の下で一夜を過したらしい乞食も見た。空腹を訴へて居る旅人、動くことの出來ぬ行路病者をも見た。貧乏といふことは決して今日に始まつたことではない。明治十二年頃の京都には失業者も貧乏人もあつた。缺食兒童といふことは新しき語であるけれども、五十年の昔に於ても其事實はあつた。加茂川堤の修繕に雇はれる人夫は必ず辨當持參といふ規定があつたゝめ、空の辨當箱を携へて働きに來た者があつたといふ話を聽いたこともある。私は此等の事實に疑問を持つようになつた。私にはまだ貧乏は如何にして生じたかといふが如き疑問を起すだけの能力はなかつたけれども、貧者に對して同情するといふ心は充分に有して居た。これは必ずしも基督教の精神から出發したものではない、何となれば救世軍の出現は遙に後のことで、基督教會は未だ一般に社會事業といふが如き方面に進出して居なかつたからである。私が比較的早く貧乏問題に對して關心を持つようになつたのは全く自らの經驗から來たものである。明治維新のために私等武士階級に生活の大變動が來つたことは前に述べた通りである。私は幼年時代から貧乏生活を續けて來たのであるから、貧乏に對して強い同情を有して居ることに何等不思議はない。後年基督教に熱中するようになつてからも、私は決して貧乏問題を忘れることは出來なかつた。基督教は人類の精神的方

面に解決を與へることが出來るけれども、物質的方面の幸福を與へることは出來ない。勿論基督教は精神的方面の解決さへ出來れば自然に物質的方面の解決も出來ると說くのであるけれども、實際の事實は決してこれを證明しない。私はまだ救世軍の出現しない前に於て恰も救世軍に等しき考へを有して居た。卽ち基督教を以て人類を精神的に救ひ、何等かの方法を以て人類を物質的に救はねばならぬといふのが私の希望する所であつた。然し何等かの方法といふことが私には未だ判らなかつた。差當り慈善事業でも宜いではないかといふ位の知識しかなかつた。然し私が十九歲となつた明治十六年の秋初めて經濟學を學んだ時私の疑問は大部分解決したように考へた。卽ち精神生活は宗教により、物質生活は經濟學によりて指導さるべきものであるといふ結論に達した。今日から見れば、これは實に平凡なことであるけれども、當時十九歲の靑年であつた私が遂に後年社會主義者となるに至つたことは全く其時の結論に起因するものと言はなければならぬ。私の卒業演說の題目が『宗教と經濟』であつたことを見ても、私が其當時どんな考へを懷いて居たかは大體推測することが出來ると思ふ。但し私が遺憾に堪へないことはラーネッド先生が經濟學の講義をされた際に社會主義の問題にも觸れられたに拘はらず、私が何等それに對して注意を拂はなかつといふことである。後年私は其筆記を見て、先生が既に此問題をも取扱つて居られたことを知り、恐らく我國に於て社會主義といふ字を用ひた最初の人ではないかと考へた位だ。然し先生が社會主義と共產主義とに對する說明は極めて簡單なものであつたから、私共の記憶には少しも殘らなかつたのであらう。昭和四年の夏私が渡米した時は幸にして恩師ラーネッド先生に再會するの機會を得た。私は其時先生が日本に於て社會主義といふ文字を用ひた最初の人ではないかといふことを質問したのであるが、先生は或は然らんと答へられた。其後私は某雜誌に其事につき一文を寄せたことがあるが、或親切なる人はわざ〳〵加藤弘之氏の方が其點に於ては先達者であるといふことを知らせて呉れたのである。それは兎に角として明治十六年頃私は既に社會主義といふことを耳にして、十年後の明治二十六年に至り初めて其信奉者となつた。

第九章　卒業前後

卒業式　初代の同志社は學生數が極めて少なく、私共が卒業した時にも同級生は僅に十名に過ぎなかつた。これがため卒業式の場合には卒業生の全部が演說をしたり、文章を朗讀することになつて居て、教師或は校賓の演說は殆んど何時も一人に限られて居た。つまり卒業式は學生本位であつて、教師は單にこれを援助するのみであつた。卒業生は英語演說、邦語演說、邦文朗讀、英文朗讀の四種の中から一種を選擇することになつて居たけれども、これを全く卒業生の任意とすれば、必ず一方に偏する虞れがあるから、教師と卒業生との協議により、これを決定することになつた。私の同級生が撰んだ題目は確に明治十七年時代を偲ばしむるものがあるから、左にこれを示すことにする。

卒業生中邦語演說をやつたものは四名であつて、其姓名と演題は次の如くであつた。松尾熊夫（基督教と一個人の進步）。村井知至（人間終極の目的）。山岡邦三郎（我何を爲すべきか）。竹內磯雄（宗教と經濟）。次に邦文朗讀は二名であつて、新原俊秀（謝知己）。堀正義（處世之見）。次に英語演說が二名で、重見周吉（泰西之學）。三輪禮太郎（文學世界）。英文朗讀が二名で、瀧能武太（社會と一己人の關係）。三好文太（斯氏倫理學批評）であつた。普通ならば新島先生が最後に卒業生を送る意味の演說をなし、且つ卒業證を渡されるのであるけれども、先生は其年の四月五日に歐米漫遊の途に上られたのであるから、山本覺馬氏が其代理を勤められた、序に述べて置きたいことは、十人の中三人までが後に改姓したといふことである。松尾熊夫は後に南と改姓し、瀧能武太は岸本となり、竹內といつた私は後に安部となつた。斯の如く同級生が三名までも改姓したといふことには相當の理由がなくてはならぬ。これは後に述べることにする。

同級生　一年生の時には約三十名もあつた私の同級生は漸次減少して、卒業間際には僅に十人となつた。一年級の時には可なり秀才と思はれる人々もあつたが、家庭の事情とか其他の理由とかで中途退學する者も少なくなかつた。然し小野英二郎の如く米國留學の目的を以て退學した者のあることを記憶しなければならぬ、私の同級生中には比較的多く英語學者を出した。前にも述べた如く、三好文太は學生時代には英語に於て最も傑出して居た。讀書力もあるし、英作文にも長じて居たが、殊に英語を話すことに於ては級中の第一人者であつたように思はれる。或時の如きは餘りに喋り過ぎて米國教師を怒らせたこともあつた。然し彼の英語を以て單に外國人案內者の其れと同一視するのは當らない。彼の卒業式に於ける英文朗讀の如きは確に彼の努力の結果である。其英文はスペンサーの倫理

學を批評したるものであつて、彼は當然原書によりてスペンサーの倫理學を熟讀したものに相違ない。僅か二十歳の青年が斯の如きことを企てたといふだけでも、彼が非凡なる秀才であつたことは推測される。彼は在大阪の宣教師に親密なる關係を有して居たため、卒業生十人中のトップを切つて洋行した。彼は確に秀才であつたけれども、人格として多少の缺點を有して居たゝめ、同級生にして卒業後彼と親交を續けて居た者は殆んとなかつたようだ。彼は歸朝後仙臺の第二高等學校に招聘されて暫らく教鞭を執つて居たけれども、不幸同級生に先だつて此世を去つた。彼の外に英學者として名を成したのは村井知至と岸本能武太の二人である。村井は永く東京外國語學校の教師を勤め、後自ら第一外國語學校を東京本郷に創立し、多くの子弟を教育したのであるが、今や後繼者を得て自らは第一線から退くことになつた。彼は邦語演說に於けると同じく英語演說にも達者である。日本人にしてあれ程自由に英語を使用することの出來る人は極めて稀であらうと思ふ。彼はユーモアーに富んで居る。聽衆が全く彼の談話に魅せられるのはこれがためである。彼は米國留學時代にも常に演說旅行をやつて居たのであるが、其後幾度も演說旅行のため米國に出かけた。或時のこと彼は米國の田舍に於て演說をやつた、これを終ると聽衆の中から田舍臭い老婦人が彼に近づいて來た。低聲で『日本でも月は矢張圓いですか』といふ奇問を發したので、彼はすかさず『いやいや日本の月は四角いですよ』と答へたさうだ。兎に角彼は英語に巧みでユーモアーに富んで居る。我國民は英語學者としての彼の名を永く記念することであらう。岸本能武太は不幸にして數年前此世を去つたが、彼も英語の大家として知られて居た。然し彼は村井とは異なつた意味の大家であつた。彼の得意とする所は英文法及び發音法であつて、會話ではなかつた。岸本は日本語の演說でも雄辯といふ方ではなかつたので、滔々として英語の演說をやるといふことは彼に望まれなかつた。然し何事でも科學的及び哲學的に考へるといふ風であつたから、彼の英語も自ら其方面に特色を有つて居た。彼は同志社時代に於ては最も數學に秀でて居たが、米國のハーヴァード大學に留學して居た時代には主として宗教哲學を研究して居た。若し歸朝後此研究を繼續する機會が與へられて居たならば、彼が其方面に於ける大家となつて居たことは確かである。岸本は初め高等師範で、後早稻田大學及び日本女子大學で教鞭を執つた。南熊夫も卒業後米國に留學したのであるが、今尙ほ慶應大學に於て英語を擔任して居る。三輪禮太郎は新原俊秀と共に同級生中に於ける文學趣味の人であつた。元來同志社は主として英語を教ゆることを目的として設立されたのであるから、一時隨意科として漢學を教授することになつたけれども、進んでこれを學ばんとする者はなかつた。それにも拘はらず、和歌を學ばんとする學生が多少あつたことは實に案外のことであつた。私共が四年級であつた時分に二年級か三年級の學生に池袋淸風といふ歌人があつた。此

人は有名なる歌人香川景樹の弟子である八田知紀に就て和歌を學んだ人である。私共よりも下級生であつたが年齢は私よりも遙に上であつた。毎年冬になると痩せた體が丸々と膨れる程衣服を重ねなければ必ず風邪に罹る虞れがあるといふので、襦絆、衣服、羽織など合計十三枚を身に着けて居た。然も嚴寒の最中でも學校の前を流れて居る小河で水浴するのが彼の日課であつた。彼が得意の和歌を教授することになると、案外多くの人々が集まつて來た。私の級からは三輪を筆頭として新原、岸本、重見、及び私が參加した。中にも三輪と新原は最も優秀なるものと教師にも認められて居た、新原は和歌のみでなく、漢學に於ても級中の錚々たる者であつた。三輪は溫厚なる君子人であつて、如何にも歌人に相應した品性を具へて居た。彼が割合に若くして此世を去つたことは痛惜の至りである。私共の全く異なつた方面に進んだのは重見周吉であつた。彼は卒業後米國に留學し、エール大學で醫學を修めた。歸朝後は東京の下町方面で開業して居た、久しく再會の機を得なかつたけれども、五六年前には二三回同級會にも出席するようになつた。然し彼は間もなく不歸の人となつた。山岡は卒業後基督教の傳道に從事して居たが、後年父の業を嗣いで實業界に活動して居た。然し近來は健康を害して、社會からは全く退隱して居る。堀正義は同級生中最も長く宗教事業に關係して居たのであるが、今や其職を去つて東京の郊外に餘生を送つて居る。小野英二郎は四年級に在つた時米國に留學したのであるが、歸朝後同志社の教師となり、更に實業界に投じて銀行家となり、同級生中最も花々敷生涯を送つたのである。彼が數年前忽焉として此世を去つたことは實に遺憾此上なきことであつた。最後に述べねばならぬのは卒業間際になつて信仰復興運動の犧牲となつた木村經夫のことである。若し彼が幸にして私達と共に卒業して居たならば、彼は宗教界に於て目覺しき活動をなしたことであらう。實に惜むべきことであつた。以上私共の同級生と認むべきものは合計十二名である。然も其内六名は最早此世の人でない。これは當然私共の到達すべき運命であるから、何等悲觀すべき理由はない。私は寧ろ過去を顧みて此の如き人々と同級生であつたことを感謝する。私共の間には可なり激烈なる競爭が行はれた。それは單に教室に於てのみではなく、卒業後に於ても左樣であつた。小野は四年生の時に洋行した、續いて三好、重見、村井、南、岸本が洋行した。私は家庭の都合により同級中最後の洋行者となつた。然し私は如何にして此不名譽を回復すべきかといふことをも考へて見た。私より前に洋行した者は何れも米國留學だけであつたから、他日自分が洋行する場合には更に進んで歐羅巴にも留學するよう計畫すべしと考へた。幸にしてこれが實行されたのであつた。然し私共の競爭は全く精神的で、其間に何等不純なるものはなかつた。私共十人が何時までも同樣に親交を繼續することは出來なかつたけれども、村井、岸本、山岡、新原と私と合計五人の同級生は卒業後各其所在地を異に

して居たけれども、絶えず手紙によりて交際を續けて居た。各自が個々別々に四人へ消息をするのは無駄であるから、一個の手紙が他の四人に巡廻するような便法を考へた、これによりて私共は相互に消息を知るのみでなく、或問題につきて意見を鬪はすようなこともあつた。然し後年村井、岸本が東京に住居するようになり、私も明治三十二年東京に出て來たのであるから、自然に三人は一層親密なる關係を結ぶようになつた。私が明治三十二年五月に早稻田大學の前身たる東京專門學校の教師になつたのも岸本の推薦に因つたのである。岸本は其時既に東京專門學校の教師であつた。私が十數年前現在の住宅を購ふようになつたのも岸本の勸誘によるもので、且つ彼は自分の所有地を擔保として日本勸業銀行から金融の途を開いて呉れた。村井は外國語學校に於て、岸本と私は東京專門學校に於て教鞭を執り、何れも教育事業に關係して居るといふことに於て共通點があつたのみでなく、私共三人は自由基督教を標榜するユニテリヤン協會を中心として宗教運動にも從事することになつた。私共は米國に於て數年間の研究を積んだ後、傳統的基督教が決して私共の理性を滿足せしむるものでないことを確信し、歸朝後盛に自由基督教を宣傳するようになつた。私共は殆んど日曜毎に今は日本勞働會館と稱して日本勞働總同盟の本部となつて居るあの建物で講演會を催ほした。これは約十年間も繼續したのであるが、これによりて私共三人の友情は益濃厚の度を加へた。

學生の動搖　同志社は平和の天地であつたけれども、時には突發的事件のため、全學生を動搖せしめたことがある。第一は前に述べた信仰復興である。これは全般的動搖であつて、恐らく學生中一人でも其影響を受けなかつたものはあるまい。然し學生の動搖はこれのみに止まらなかつた。私は更に二つの事件を述べて見たい。一つは明治十五六年の頃學生の中に東京遊學の熱が燃え上つたことである。明治十年頃は勿論のこと、私が入學した時でも東京にはまだこれといふ程の學校はなかつた。前に述べた如く山崎先生などは東京の學校を棄てゝ熊本の英學校に入り、更に轉じて同志社に來られた位である。當時の同志社學生は何れも自分の學校を恰も最高學府であるが如くに信じて居た。然し其後東京に於ける教育設備は漸次完成して、帝國大學といふ各稱さへも用ひられることになつたから、學生が憧憬の念を起すようになつたのに何等不思議はない。學生の中には同志社を退いて東京に行くものが少なくなかつた。私の附屬小學時代に於ける同級生不破彦麿も其一人であつた。此動搖が結局如何になるか、殆んど見透しがつかぬ位であつたから、校内は何となく不安なる空氣に包まれた。然し一方には飽くまで同志社に蹈み止まることを決心するのみでなく、進んで東京遊學志願者を諫止するといふ運動も起つた。文章に卓越せる一學生は同志社建學の精神より說き起し、官立學校を羨望することの如何に卑屈なるかを痛論した堂々たる一文を圖書館内に備へ置き、全學生をして之を讀まし

めた。私は其論文に序文を書くことを要求されたのであるが、序文の代りに次の如き出鱈目の句を書いた。それは筆頭巧弄鬼神力繫得洛陽幾片花といふ詩とも何ともつかぬものであつた。これは私自身全く忘れて居たのであるが、蘆花の小說『黑の目と茶色の目』に出て居るのを見て苦笑を禁じ得なかつた、兎に角東京熱が流行した時には殆んどこれに感染しないものはないようであつた。本當のことを白狀すれば私自身も輕微ではあつたが矢張患者の一人であつた。明治十六年三月頃の日誌を見れば、私の考へは中途同志社を退學するといふよりも、卒業後帝國大學に入學するといふことにあつたらしい。且つ私は同志社卒業後尙ほ十年間を勉學に費すといふ計畫を立てゝ居たのであるから、帝國大學を卒業した後には、其當時東京の築地に設立されるといふ噂さのあつた基督敎主義の大學に入學するといふことを考へて居た。これは私の日誌によりて明である。だから私が帝國大學に入學せんとしたのは單に知識慾滿足のためであつて、名利のためでなかつたことは言ふまでもない。私は最後の目的を基督敎主義の大學に置いて居たのだから、將來基督敎の宣傳者たらんとする目的には何等の變動もなかつたのである。以上は東京遊學熱のため生じた同志社學生の動搖であるが、第二の動搖は徵兵令の改正が其原因であつた。明治維新が行はれた後武士階級は全く其特權を失つたけれども、長い間の習慣により士族は何となく平民を蔑視するの風があつた。然るに徵兵令實施後の兵卒は士農工商の階級から一樣に徵集されるのであるから、世人は兵卒に對して全く尊敬心を失ふようになつた。從つて徵兵忌避といふようなことは大した問題にならなかつた。日淸及び日露戰役後に於て國民は初めて眞劍に愛國といふことを考へるやうになつたけれども、明治十年以後は全く天下泰平で、軍人たらんことを志願する者は極めて稀であつた。私は海軍々人たらんがために同志社に入學したけれども、入學後一二年を經ぬ中に私は軍人たる志望を棄てたのみか、却て非戰論者となつたのである。要するに私は軍人たるよりも精神的方面に働く方が自分のためにも人類のためにも有益であると考へた。これが其當時同志社を支配して居る思想であつた、故に徵兵忌避は普通のことゝ考へられ、官憲も亦嚴重にこれを取締るとか、或はこれを罰するといふやうなことはなかつた。今日とは全く隔世の感がある。私の本姓は岡本であるが、明治十六年二月に竹內と改姓した。其頃の徵兵令によれば、家族を扶養する義務ある者は兵役を免ぜられるといふのであつたから、私の如く二男として生れた者は當然適齡になるや否や徵集されねばならぬ。然し二男であつても、若し結婚して居れば其妻を養ふ義務があるから、徵兵を免除されることになる。私の父は此の如き法律の解釋を或人から聽いたものと見え、私に名義だけの結婚を行ふことを命じた。私は異議なくこれに服從した。其結果私は竹內と改姓することになつた。其手續は一切鄕里に在る父が引受けて呉れた。勿論正式の結婚ではなく、單に名義だけの

ことであるから、十圓か十五圓を與へさへすれば、獨身の女戸主はこれを承諾した。要するに私は人夫として其戸籍を入れてもらつたのである。其時私は十九歳であつたが、名義上の妻となつた婦人は既に三十三歳であつたといふことである。斯る出鱈目なことをやつても、社會の非難もなく、官憲の取締りもなかつた。然るに同年十二月再び徴兵令の改正が行はれた、これに據れば、適齢者はよし扶養すべき兩親を有して居ても、未婚者である限り必ず徴集されるといふのであつた。これがため同志社は一時混亂狀態に陥つた。此法令に據れば長男も安心は出來ない。よし實際に老祖父母を扶養して居るものでも駄目だ、これがため既に戸主となつて居るもの、若くは相續者たるべき長男には大恐慌を來した、彼等は急に結婚するか、若くは洋行するより外に途はなかつた。私は既に其年の二月に結婚の手續きを終つて居たゝめ何等の影響を受けなかつたけれども、學生の大部分は殆んど落着いて勉强するものはなかつた、私の同級生中に、結婚する者もあつたが、小野英二郎の如く洋行の決意をなして中途退學する者もあつた。當時の同志社學生が卒業後比較的多く洋行するようになつたことは、勿論他に主なる原因があるけれども、徴兵令の改正が其一因であつたことは爭はれない。明治十八年に又徴兵令の改正が行はれた、それに據れば、徴兵免除の特典は單に既婚者といふだけでは得られない。彼は又六十歳以上の老人を扶養する義務を負ふものでなくてはならぬ。これがため私は又窮境に陥つた。此時私は既に同志社を卒業して鄕里福岡に居たのであるから、父と相談の結果次の如き手續きを取ることにした。私の籍が竹内に在る限り徴兵免除の特典はないのであるから、第一に取るべき途は竹内家から離籍することであつた。卽ち竹内家では親戚會議を開き、家風に合はぬといふ理由で私を離緣することゝなつた。此打續が終ると同時に私共は六十歳以上の老人の居る家庭を八方手を廻はして探して見た。幸にして註文通りの人が見つかつた。年は六十以上の婦人、實子はあるけれども籍は別になつて居る。實子が彼を扶養して居るので、何等他の者に厄介をかける必要はないといふのだ。相談が都合よく纏り、私は僅に十五圓を出して其家の養子となつた。實子からは將來實母のために決して扶助料を要求するが如きことをしないといふ證書を私に渡した。此時私は現在の安部姓を冒すことになつた。然しこれは全く形式的のことであつて、私は其老婦人や其實子に一度でも面會したといふ記憶がない。

東京行の中止

私が卒業後鄕里福岡に歸るやうになつた其事情につき概略を述べることにする。明治十七年頃には附屬小學時代に於ける私の同級生は多く東京で勉强して居た。暫く同志社に學んで居た不破彦麿は中途東京に轉じ、山座圓次郎、塚本道遠を初め其他東京に在學する者が少くなかつた。私は勿論前に述べた通り卒業後必ず東京に行くことを決心して居た。然し其希望は全く夢の如く消へ

失せた。私の父は一日も早く私が卒業することを千秋の思ひで待つて居たらしい。私の兄は既に獨立して居たけれども、父は其後尚ほ引續きて私の學資を送ることが出來なくなつた。元來私の父には私を同志社に送るだけの餘裕がなかつたのであるけれども、私の義兄が學資の半分位は補助するといふので、父も澁々私の遊學を許すことになつた。然し義兄が私を補助して呉れたのは僅に六ヶ月で、其後の四年間は全く父が私の學資を送つて呉れたのである。勿論私に生活の第一歩、而も重要なる第一歩を踏み出させたのは私の義兄であるから、私は全生涯この恩は忘れることは出來ないけれども、四年間私に學資を送るため汲々として働いた父の努力を憶ふ時私は感謝の念に打たれざるを得ない。父は四年間何等財政的窮狀を私に告げなかつた。これがため私は東京遊學も可能であると考へて居た。然し父は私が卒業すると同時に送金を中止するのみでなく、幾分かの援助を私に期待して居たらしい。私には一種の失望ではあつたが、東京行は斷然中止することにした、よし父を財政的に援助することは出來ないにしても、此上父に學資を要求することは不可能である。父は卒業後速に歸鄉することを希望したけれども、これは私に取りて全く無意味であるやうに思はれた。何れの方面に活動するとしても、今少しく準備をしなければ決して有用なる人となることは出來ない。若し東京に行くことが出來なければ、寧ろ同志社の神學科に於て勉學することが唯一の途である。結局私は爾後一切父から學資を仰がぬといふことを條件として、京都に止まることを相談したのであるが、父も快くこれを承諾した、私は毎年暑中休暇には必ず歸鄉したのであるけれども、明治十七年卒業直後の夏は丹波に於て基督教宣傳のために活動した、其當時は我國の基督教史に於て特筆大書すべき時機であつた。泰西文明の輸入が盛になると同時に各地の新聞紙は基督教に對して是非の論を試みるようになつた。大阪の「立憲政黨新聞」及び京都の「京都滋賀新聞」の如き其例であつた。其以前に伊藤博文は獨逸より歸朝して盛に歐化主義の氣勢を擧げ、條約改正問題のため結局基督教公認の必要が論ぜられるに至つた。僅に二十歳の青年であつた私共の演說に人々が耳を傾けたといふのも全く時勢の然らしむる所であつたと言はなければならぬ。斯くて滿二ヶ月間を宗教運動のために費した後私は再び同志社に歸つた。神學部の開始は九月十五日であつて、卒業生中五六名は踏み止まつて其授業を受けた。然し私共はこれに對して滿足することが出來なかつた。殊に外國教師の教授に對する不平は甚しかつた。私共は五年間殆んど教師に對して何等不滿足を感じなかつたのに、神學科の授業を受くるや否や、斯の如く不平が勃發したのは何のためであらう。これは決して教師の責任ではなくて、學課其ものの缺點であつた。私共は基督教に熱中して居たのであるから、神學其ものにも大なる價値があると信じて居た。然し神學其もの、性質に接して見ると私共は全く失望せざるを得なかつた。基督教の實際的方面

であればこそ私共は熱心にこれを受け入れたのであるが、一たび其理論的方面を見れば、傳統的基督教は到底青年學徒の心を引着け得るものではない。其結果私共は二つの要求を學校當局者に提出した。第一は三年の課目を二年に短縮すること、第二は或教師を變更するといふことであつた。其交渉には村井と私が當つた。當局者はこれを容れなかつたのであるから、私共は同盟退學をなすことに決心した。これは同志社創立以來第二回のストライキであつた。然し私共にはストライキを以て當局者を屈服せしめんとする考へはなかつた。まして學校に波瀾を捲き起すといふことは出來るだけ避けたいと考へた。相談の結果村井と私が責任を負ふて退學することになり、他の者は學校に殘ることゝなつた。これは九月廿六日のことであるから、授業開始後僅に十日を經たに過ぎない。村井と私は一々教師の宅を訪問して別を告げた。恰も其時小野英二郎は渡米の準備を終つて京都に來て居り、村井も渡米準備のため歸鄉するのであるから、九月廿七日同行して大阪川口に至り汽船の乘場に於て別れを告げた。小野は渡米のため東に、村井と私は歸鄉のため西に向つた。

第十章　再び母校に歸るまで

英語教師　結局私は父の希望通り鄉里福岡に歸ることになつた。これは明治十七年九月卅一日であつた。其頃兩親は兄と別れて村上家に同居して居た。村上の主人は明治十五年十月に死去し、其夫人も明治十三年頃に不歸の人となつたのであるから、私の兩親は三人の遺子を世話するために同居したものらしい。これがため私も歸鄉後其家に滯在することになつた。私は勿論學校の教師となり、財政的に父を援助すると同時に勉强する積りであつたが、當時外國語の研究は未だ盛に行はれて居なかつたから、適當なる位地を得ることは出來なかつた。其結果私は十月初めから十二月の終りまで約三ヶ月間を專ら讀書に費した。其當時は飜譯書も甚だ不充分であつたゝめ、勿論私は英書によりて知識を得る外はなかつた。前にも述べた如く村上家の住宅は山を負ひ海に臨んだ閑靜の地であり、且つ訪問客も稀であつたから、勉學のためには此上もなき場所であつた。然し私は自修のみでなく、特別の希望者には英語の個教人授をした。其外には日曜日に說教若くは演說をすることが私の任務であつた。後には基督教會に於ても英語學校を設くるようになつたので、私も少しくこれを手傳ふことにし

た。同時に師範學校生の有志者に對して心理學の講義をしたのである。今から其當時を回想すると何だか擽つたいような氣がする。斯の如くして明治十七年は空しく過ぎ去つたのであるが、翌年一月六日から私立英學塾にて教授することになつた。此英學塾はメソデスト派の基督教會が設立したのであつて、毎日午後二時間教會内の一室で授業したのである。生徒は僅に十數人で、多くは師範學校の生徒であつたと記憶する。私はこれによりて毎月拾圓の俸給を受けることになつた。現在から見れば餘りに小額であるけれども、其當時に於ける貨幣價値で換算したならば、適當の報酬であつたかも知れない。兎に角一定の收入を得るといふことは私に取りて最初の經驗であるから、何となく嬉しく感ぜられた。其頃の青年には一人でも時計を所有して居るものはなかつた。時計は實用品であるよりも寧ろ贅澤品であるかの如く考へられた。だから私も其時まで時計を買ふといふ考へもなく、又其必要を感じなかつたけれども、教師となれば時計の必要を感ずることが痛切となつた。私は最初の俸給を受取るや否や時計のためにこれを使用した。それは質屋が抵當として預つて居た古時計であつたが、今から考へると其時代の時計は隨分高價であつたことが想像される。私の私立英學塾に於ける勤務は同年の九月中旬頃まで繼續したのであるが、其間に於ける私の生活には二つの記念すべき事件が生じた。第一は明治十八年六月七日福岡に於て基督教會が正式に設立されたことである。前にも述べた如く福岡に於ては數年前から同志社に於ける私共の先輩たる不破唯次郎が基督教宣傳に專心從事して居た。信徒も相當に增加したのであるから、其時まで基督教講義所と稱して居たものを教會組織に改むるといふのであつた。恰も現在に於て政黨支部組織の場合本部及び各支部から代員を列席せしむると同樣に、教會組織の場合には本部及び各地の教會から代員を送つたものである。教會設立其ものも私を滿足せしめたのであるが、殊に私が嬉しく思ふたのは、伊豫の今治教會を代表して私の同級生村井知至が來たことである。前年九月大阪で別れて以來絶えず手紙の往復はして居たけれども、未だ一年も經過しない中に再び手を握つて語り合ふ機會を得たのは、爾來交友に餓ゑて居た私には大なる滿足であつた。第二は明治十八年の春私が村上家の長女と婚約をしたことである。其當時の事情に就き少しく述べて見たい。

婚約　前にも簡單に述べた如く、二男として生れた私は其の當時から村上家の養子となつて居たが、村上家に男子が生れると同時に當然私は舊姓に復した。然し明治十五年十月村上家の主人が死亡したので、其年の十二月父は手紙を以て私に村上家の養子たることを勸告して來た。私は基督教の立場から結婚が如何に重大なる問題であるかを說き、其相手たる娘の性格を知らずして結婚の約束をなすことは双方のため不利益であるといふよりも、寧ろ罪惡であるといふことを述べて父に返答した。

これで此問題は沙汰止みとなつた。時に私は十八歳であり、四年級であつた。然し此問題は私が卒業後郷里に在つた時再び持上つた。或日伯母（私の父の兄の妻は）私を招いて突然村上家の婚と結婚する氣はないか、若し結婚が出來ぬとしても婚約だけしては如何と勸めた。伯母は口を極めて娘を賞讃した。啻に伯母のみでなく、父母も亦熱心にこれを希望して居るといふことであつた。若しこれを他に嫁せしむるようなことがあつては家族の失望此上もないと熱心に私を說くのであつた。此時の私は最早明治十八年の私ではなかつた。私は既に半年以上も村上家に在つて詳細に娘の性格を知ることが出來た。私の伯母や父母に對し、或は弟妹に對する彼女の態度に就ては私も心から感服して居たのであるから、何等考へる餘地もなかつた。唯私は前途に種々なる理想を懷いて居たのであるから、勿論直に結婚するといふ考へは毛頭なかつた。それで私は婚約だけならば快諾すると返答したので伯母は嬉し涙を流した。然し私は伯母に向つて次の如く言つた。『結婚は全く自由意志によりて決定すべきものでありますから充分に先方の意志を尊重して下さい。少しでも强制がましきことがあれば、其れは全く私の意志に反します』。いよ〳〵話が纏まつた後私は直接娘と面會して、將來の方針につき語り合つた。私は洋行の希望を達せねばならず、娘は尙ほ修學を繼續せねばならないから、私共の結婚が何時行はれるか殆んど見當がつかなかつた。然し私の婚約は少くとも私に取りては大なる幸福であつた。私共は婚約成立のために何等の形式をも取らなかつたのであるが、別に祕密にすべきことでないから、必要ある場合には親戚や友人にもこれを公にした。私共の結婚は明治廿八年に行はれたのであるから、婚約後約十年を經過した譯である。これには次の如き理由があつた。娘は單に小學校を終つたゞけで、其當時現在の高等女學校に相當する程の學校がなかつたから、唯裁縫といふが如き家事向きの稽古をする外はなかつた。私が村上家に同居するやうになつてからは、日本外史の如き漢文を讀むことになり、私が毎晩これを指導したのである。然しこれでは如何にしても滿足の出來る筈がない。其當時神戸にも大阪にも既に基督教主義の女學校が設立されて居たのであるから、私は婚約後駒尾（娘の名）を是非共此種の女學校に入れねばならぬと考へた。然し其當時私の收入では如何ともすることが出來なかつたから、私は其時機の來るを待つ外はなかつた。明治二十年四月私が岡山基督教會の牧師となるに及び、初めて財政上の餘裕が出來たので、私は其年の九月駒尾を神戸女學院に入學せしむることにした、其後駒尾は大阪の梅花女學校に轉じた。兎に角廿一年の時英語を初めて學び、其他の學科も新奇のものが少なくなかつたから、駒尾に取りては少からぬ努力を要したこと丶推察される。斯くして駒尾が卒業せんとする間際に私は積年の希望を達して米國へ留學することになつた。これが豫想以上に婚約時期の長くなつた理由である。

香春學校　私の英學塾生活も案外に短かつた。或人の推薦により私は同じ福岡縣内に在る豐前田川郡の香春學校に英語教師として赴任することになつた。今日ならば汽車の便により三四時間で行ける所であるけれども、其時私は早朝家を出て飯塚に一泊し、翌日やつと香春に到着することが出來た。勿論道中は全部人力車を利用したのであるが、私の日誌に據れば人力車代は一里平均三錢位であつた。以て其時代の物價が如何に低廉であつたかと想像することが出來る。香春に到着して第一に問題となつたのは下宿である。幸にして小學校の或教師が英語の個人教授を受くるといふ交換條件で私を下宿させても宜いといふことになつたので私は直に其家に行くことになつた。主人たる小學教師は養子であつて妻君と其老母と三人暮しであつた。一人も子供がないといふので私は非常に安心した。勿論田舍のことであるから、生活には種々不便があるけれども、私には八疊の部屋が與へられ、周圍が全く靜肅其ものであるから、私は充分に讀書が出來るであらうと心潛に喜んだ。私が教へるといふ學校も極めて近いのであるから便利である。學校は修學年限四年の中學であつて、郡立であつた。到着の翌日は學校の附近に在る郡役所に出頭したのであるが、私は助役から辭令を受取つた。後に私は助役が學校長をも兼任して居るといふことを聞いた。其次の日には學校が始まるのであるから、時間を嚴守して私は出席した。教員室には大なるテーブルが備へてあつて、教師は其を圍んで着席することになつて居る。教師の數は八九名であつたやうに記憶するが、彼等は俸給額の多少によりて其席順を定められて居るといふことを後に聽かされた。初日に先づ驚いたのは私の席が一番上席ではないかと思はれたことである。數日の後これが事實であるといふことを聽かされた。私の俸給が十六圓であつて、然も私が主席であるといふならば、他の教師の俸給は幾何であらうか、これが私には一の疑問であつた。然し此問題も日を經るに從つて漸次に解決されて來た。次席であつた理化の教師は廿四五歳の人であつたが、其俸給は十五圓であつた。當時六十歳位と思はれた長野秋山といふ漢學先生は十三圓であつた。其他の教師の中には十圓以下の人もあつたに相違ないと思はれる。然し人力車代が一里三錢といふ時代だから、十六圓の俸給は決して少額ではなかつた。私は其頃から毎月父母を援助するために拾圓を送ることにした。僅に六圓の金で生活することの出來たのを見れば、其當時に於ける貨幣價値はこれを現在に比して少なくも六七倍ではなかつたかと考へる。僅か廿一歳の青年が如何に田舍であつたとは言へ、教師中首席を占めて居たといふことも何だか夢物語りのやうに思はれてならない。香春に於ける私の教師生活は單に三ヶ月に過ぎないけれども、それは私に取りて有益なる經驗であつた。以前私立英學塾に於て英語の教授をなした經驗はあるけれども、學生の數が少かつたゝめ、殆んど個人教授といつた方が適當であるかも知れない。然るに香春の學校は其れが小規模であつ

たにしても、其校舍の設備は今日の學校と殆んど同一であり、一學級に於ける生徒數も三四十名であつたから、私は初めて學校らしい教授を行ふことが出來た。勿論私は英語のみを教授するのであり、而もそれが初歩の英語であつたゝめ何等の準備をも要しなかつた。然し教授法に就ては種々なる考案を立てゝこれを實驗して見た。要するに私は學生をして英語に興味を感ぜしめることに努力した。言ふまでもなく教育の秘訣は學生の興味を喚起するに在るから、私はそれを原則として教壇に立つた。然し學生をして興味を感ぜしむるには教師自らが先づ興味を感じなければならぬ。私は前後を通じて殆んど三十三年間教師生活をしたのであるが、私は唯の一日でも教場に出て倦怠の情を起したことはなかつた。毎日學校に出勤するといふことは私のためには勤務ではなくて道樂であつた。單に趣味といふ點から言へば、私には宗教よりも政治よりも、教育が最も多く適して居る。而して香春學校に於ける三ヶ月の教師生活は確に私をして教育に趣味を感ぜしめた第一歩であつた。然し私の受持時間は毎日三四時間位であつたから、其他の時間はこれを自らの讀書に費すことが出來た。私は其當時に讀んだ書物を一々記憶して居ないけれども、其中一つだけは明瞭に記憶に殘つて居る。それは佛人トクヴィルの書いた『亞米利加共和國』といふのであつた。原書は勿論佛語で書かれたのであるが、私は其英譯を讀んだのであつた。其時代には佛人モンテスキューの Spirit of Law が盛に日本人の間に讀まれて居たのであるから、私もトクヴィルの著書に興味を感ずるやうになつたものらしい。兎に角私は此書を非常に面白く思ふたのであるから、其時分でも政治に對して全く無關心でなかつたことは明である。此の如く私が靜に讀書する暇を得たといふことは教師の間に餘り交際が行はれなかつたといふことも其一原因であつた。私と理化の教師は其學年から新に教ゆることになつたといふので、他の教師は私共二人のために歡迎會を開いて呉れた。香春も郡役所の所在地であつただけに小規模の料理屋があつたから、それが會場に宛てられた。教師の全部は盛に飲む、一人の田舍藝者が酌をする。後には教師の中から躍る者が出て來るといふ有樣で、私は本當に閉口した。數日後私は理化の教師と相談して返禮のため同じ料理屋で他の教師を招待した。然し宴會らしきものはこれだけで、其後私は毎日靜に勉學することが出來た。同時に私は同志社で得た散歩の習慣を忘れなかつた。殊に香春は自然の美に富んで居るのであるから、散歩するには好適の地であつた。町の後には香春嶽といふ山が突兀として聳へて居る。禿山ではあるが特色のある姿をして居る。私は昭和三年四月頃九州遊説の途に上り、豐前の後藤寺町で演説をした時偶然控室の窓から外側を眺めた。眞正面に高い山が見えるではないか。これは香春嶽ではないかと思つた時私の胸は轟いた。私が香春を去つてから既に四十三年だ。香春がどんな所であつたか、香春嶽がどんな姿をして居たか私は全く忘れて居た。勿論後藤寺町に來

た時にも香春のことなどは殆んど考へて居なかつた。然も四十三年後に香春嶽を見て忽ちこれを記憶から呼び起すことの出來たのは心理學の所謂潛在意識なるものであらう。斯の如く私は香春嶽を中心として天氣の好き日には各方面に散歩した。然し遠足と稱すべき程のものは三ヶ月の滯在中僅に三度に過ぎなかつた。一度は私一人で豐津まで遠足した。距離僅に二三里位であつたと思ふが、私は多少觀測を誤つて午後遲く出かけた。豐津に着いた時は日暮に近かつた。歸路は急速力で歩行したけれども、秋の日の暮れ易く、まだ半分の道をも終らないのに暗黑が迫つて來た、八時過ぎに人通りのない峠を越えた時には餘り好い氣持はしなかつた。其次は教師の一人と小倉に遠足した。距離は六七里であつたやうに記憶する。途中少しは人力車を利用したけれども、大部分は徒歩した。其次は彦山に上つたのであるが、同行者は殆んど私と同年位である松本といふ教師であつた。私は元來登山に興味を有して居る。京都附近では比叡山、大文字山、愛宕山、笠置山、鞍馬山等にも登つたが、近江では三上山にも伊吹山にも登つた。東京附近では大島の三原山、伊豆の十國峠、安房の鹿野山、最近には鋸山にも登つた。機會を得たならば富士山や日本アルプスにも登つて見たいと思ふて居る。當時彦山の座主は男爵高千穗宣麿氏であつて、故德大寺や西園寺の弟に當る人だと聞いて居る。高千穗は東京から九州に來り、而も片田舍に住んで居るのだから、隨分生活の激變に驚いたことであらう。然し幸にして昆蟲學に興味を有して居たから、蝶の採集を一の道樂として居たらしい。私の同行者松本は彦山を下つた時高千穗を訪問しようじやないかといふことを提案した。私に何の異議があらう筈がないから、高千穗の玄關を訪うて來意を告げた。平常淋しさを感じて居る彼は快よく面會して呉れた。私共の希望に應じて蝶の標本を澤山に示して呉れたのみでなく、次から次へと談話が面白く進んで行つた。最後に酒肴が運び出されたので私は閉口した。私は同志社時代の禁酒主義を嚴守して居たから、香春學校の教師から招待された場合でも斷じて酒は飲まなかつた。私は高千穗に向つても同樣に自ら禁酒主義者であることを告げた。以上は私が香春學校滯在中の遠足記事に過ぎないのであるが、其當時に於ける學生の運動に關しても少しく述べて見たいことがある。香春學校の生徒は可なり遠方から通學して居る者もあつたから、別に都會に於ける學生の如くに運動を强制する必要はなかつた。然し學校では規則的に體操を課して居たやうである。唯私が驚いたのは運動會に於ける學生の活動が如何に猛烈であるかといふことであつた。彼等は旗奪ひといふ競技を行うた。學生を二組に分ちて敵の旗を奪ふといふのであるから、全く力の競爭であつた。これは同志社に於ても久しく行はれて居たのであるが、實際壯烈な競爭であつた。私はまだ廿一歲の青年であり、且つ力自慢の方であつたから、若き二三名の教師と共にこれに參加した。斯の如く香春に於ける私の生活は單調なるが如く見えて、其

中に幾多の面白味があつたため、私は少しも他に轉ずるといふ希望すら有して居なかつたのであるが、意外にも、外部から私を動かす力が現はれて來た。簡單にこれを述べて見よう。私は明治十七年九月同志社を去つて歸鄕したのであるが、十八年の四月にゴルドン先生から手紙が來て私が再び同志社に復歸するよう勸告するのであつた。私は神學研究といふことには全く絕望して居たから、先生の厚情を謝すると同時に復歸のことは斷然拒絕した。然し同年十二月にゴルドン先生は再び私に復歸を勸誘して來た。私の心は大に動いた。何となれば今度の復歸は學生としてではなく、教師としての復歸であつたからだ。既に述べた如く私は香春の生活に少しも不滿を感じて居なかつたけれども、若し長く香春に止まつて居ては何時洋行の目的が達せられるかも知れない。同級生中三好、重見、小野の三人は既に渡米した。近き中に村井、岸本、南の三人も渡米することになつて居る。同じく教師をする位ならば、同志社に行く方が得策ではないか。父母を扶養することが出來ると同時に渡米の目的を達する機會も多くなる。これが熟考の末私が達した所の結論であつた。私は直に本學期限りで辭職するといふ屆を郡役所に出した。十二月廿四日香春を辭して一旦鄕里福岡に歸り十二月卅一日出發して母校同志社に向つた。

第十一章　再度の同志社生活

擔當學科　明治十九年一月五月同志社に於ける第二學期の授業が開始された。私は教師として初めて母校の教壇に立た。私は其時廿二歳であつた。其當時には教授とか助教授とか講師とかいふ差別的名稱はなかつた。殊に平民的な同志社に於て左樣な區別を設くることは禁物であつた。然し實際に於て私は今日の助教であり、米國での所謂テューターであつた。特種の場合に於て新島先生から直接命令を受けるやうなことはあつたが、教授機關に參與するが如きことは全然なかつた。且つ又私の授業時間は比較的少かつたけれども、受持學科は比較的多かつた。最初私の擔當したのは二年生の萬國地理と邦語神學生の萬國歷史であつた。地理は英語の教科書、歷史は『萬國史略』といふ邦語の教科書を用ひた。これが終ると私は二年生の地文學及び代數を擔任することになつた。何れも教科書は英語であつた。此の如く一人の教師が地理、地文學、歷史、數學の教授を兼任するといふことは、今日の制度から見て、甚だ亂暴なことであるけれども、前に述べた如く、初代の同志社に於ける教師は何れも八面六臂の活動をなしたものである。元來同志社の教育は自修といふことに重きを置いて居る。充

分に教科書を理解さへすれば必要なる知識はこれによりて得られる。教師は單に學生をして教科書の意味を理解せしむる補助者に過ぎない。教師自らが知識を與へるのではなくて、學生と著者との媒介者となるのである。故に教師が八百屋的に多くの學科を擔任するといふことは、一學級の學生數が少き場合に於ては家に已むを得ぬことであつた。然しこれは教師に取りては偶然の利益であつた。何となれば彼等は各專門以外の學科に就て相當の知識を得ることが出來たからである。私の擔任は既に述べた如く、地理、歴史、數學であつた。これがため私はどれ程勉强したかも知れない。數學は學生時代に私の最も得意とする所であつたから、餘り多くの準備を要しなかつた。地理も其内容は比較的簡單であつたから、これを教授するのに大した困難を感じなかつた。唯私が最も努力したのは地文學であつた。これを教授するには、天文學、地質學、物理學、動物學、植物學等に關する豫備知識がなくてはならぬ。或事實を説明するために私はエンサイクロピディヤなどを引張り出して、幾日も研究したことがあつた。諺に『教ゆるは學ぶの半』といふことがあるが、私は教ゆることは學ぶの全部であると考へた。私が教へた二年級の學生は私の學生時代と異なつて人數も多く、且つ秀才が少なくなかつた。彼等が發する質問の中には卽答の出來ぬものもあつたので、私は多くの參考書を讀んで其解決を求めた。恐らく其時分程一生懸命に讀書したことは私の生涯を通じてないだらうと思ふ。兎に角私は學生々活から教師生活に移つた。これと同時に毎月父に學資を仰いで居た私が其時以來毎月父母の生活費を送らねばならぬことになつた。これがため私は依然として學生時代の如く寄宿舍生活をなすことに決した。これは經濟的であると同時に多くの舊友と交際するに便宜であつたからである。私が同志社から離れて居たのは僅に一年と三ヶ月であつたので、私が再び歸つて來た時には三年級以上の學生は尙ほ悉く私の舊知であつた。これがため私は教師であると同時に生徒と同一の生活をして居た。友人十數名と共に笠置から月瀨に出で、更に奈良をも訪問したのは此時であつた。

傳道旅行　明治十九年の正月再び同志社に歸校して以來私の生活は學生時代の其れと少しも異なる所はなかつた。毎週五日間は授業の傍ら自分の勉學に專念した。土曜には必ず遠足に出かけ、日曜日には教會に出席したり、或は自ら説教したりした。其當時新島先生の補佐役として金森通倫が學校經營の任に當つて居た。金森は私共の先輩であつて、熊本組の一人であつた。熊本組とは何であるか、私は簡單にこれを述べて見よう。熊本藩には明治の初年に米人ジェーンスを招聘して英學校が開かれて居たのであるが、藩の秀才は多く此處に集まつて居た。ジェーンスは熱心なるクリスチャンであつたから、英語を教授すると同時に基督教をも宣傳した。學生の中には多くの信徒を出すに至つたのであるが、其當時のことゝて、彼等は家族や親戚のために少からぬ迫害を受けた。ヂェーンスが歸

國するや彼等は大擧して同志社に轉校することゝなつた。これがため同志社の基礎が定まつたのであると言ふも決して過言ではあるまい。この熊本組は直に神學部に入りて勉學し、明治十二年の七月には卒業した。彼等の内將來社會の各方面に於て頭角を現はした者が頗る多い。宗教界に於ては海老名彈正、小崎弘道、宮川經輝、金森通倫、横井時雄、不破唯次郎、教育界に於ては山崎爲徳、森田久萬人、浮田和民、下村孝太郎、實業界に於ては市原盛宏、外交界に於ては吉田作彌等である。金森は卒業後岡山に聘せられて基督教を宣傳したのであるが、數年後には我國に於ても有數の基督教會を設立することとなつた。彼の雄辯は有名なもので、私共は何時も彼の説教には感動させられたものだ。明治十九年の冬休暇には金森の發起により、私共數名を以て傳道隊を組織し、各地に於て基督教の宣傳を爲しつゝ岡山まで徒歩旅行を試みることにした。一行は金森の外に岡山出身の岸本能武太、原忠美の二人及び松尾音次郎と私の五人であつた。日程は第一日が京都から明石まで、第二日は姫路、第三日は赤穗、第四日は備前の香登、第五日は岡山着といふのであつた。第一日は京都から神戸まで汽車を利用し、明石まで徒歩するといふのであつた。明石、姫路、香登には教會があつたので豫め打合せをしたのであるが、赤穗にはまだ教會がなかつた。然し姫路から香登までの道を一日で突破することは不可能であつたから、四十七士の遺跡を弔ふといふ意味で一泊することにした。毎日五六里の遠足を終りて演説するのであつたけれども、血氣盛りの私達は毎夜十一時過まで滔々と雄辯を振つたものだ。然し實際のところ私共には夜の演説よりも晝の遠足の方が嬉しかつた。私共は金森の發意で獵銃二挺を携へることにした。これが私共の徒歩旅行をどんなに助けて呉れたかも知れない。勿論大した獲物はなかつたけれども、鳥を探しながら歩行して居れば疲勞などは殆んど感じなかつたのである。私は再び同志社に歸つて來て以來銃獵には非常な興味をもつやうになつた。土曜日には京都の郊外に出かけて度々鳥打を試みた。然し私は露國の文豪ツルゲネーフの話を讀んでから全く鐵銃を持つことが嫌になつた。其話といふのはこれである。ツルゲネーフは幼年時代父に伴はれて獵に出かけた父は叢から飛び出す雉子に向つて發砲したが、鳥は尚ほ十四五間も飛んで地に降りた。ツルゲネーフは父と共に其處を探して見たが、鳥は翼を廣げたまゝ死んで居た。其下には數疋の雛が黄色な嘴を開いて待つて居た。これがためツルゲネーフは生涯銃獵をやらなかつたといふことである。話は再び徒歩旅行に戻る。私共は赤穗を出發した朝本道から北に折れた横道に入り、有名なる閑谷黌を訪問した。これは備前の藩主池田家が創立した學校で、四方山に圍まれ、全く仙境に在る感がした。岡山を去ること五六里で、近所の町に出るにも可なりの不便があつた。これは學校よりも寧ろ寺院を建てるに適當なる場所である。此處に學ぶものは全く僧侶になつたやうな氣持でなければ辛棒が出來さう

に思はれない。講堂は立派な建築である。全部板張りであつて、恰も禪宗寺に見るやうな小き藁の敷物がいくつとなく竝べてあつた。講堂を離れて控室とも見られるやうな六疊と四疊半位の部屋があつた。此二室の間には半疊許りの爐があつた。名君として知られた池田新太郎少將が此所に滯在中は附近の農夫と爐を隔てゝ新しく談話を交へたといふことである。此學校に教鞭を執つた人の中には山田方谷といふが如き學者もあつたが、西毅一の如きも此學校に關係があつた。西は第一議會か第二議會かには岡山縣から選出されて代議士となつた程の德望家であるが、政界を退いた後には此學校の校長として働いた。或時學生のストライキが起つた時廉直なる西は池田家祖先の墓前で割腹して其罪を謝した。私共は其日の夕暮豫定通り香登に到着し、兒島といふ家に案内された。兒島家の主人は龜士というて、同志社に於ける私共の後輩であつた。斯樣な關係があるので、私共は非常に歡待された。夜の演說會も大成功であつた。其翌日私共はいよ〳〵岡山に到着した。同行者の中には自宅に歸つたり、他の家に行つた者もあるが、私は岡山基督教會員であつて、辯護士であつた石黑涵一郎の宅に厄介になつた。石黑は代議士となつたこともあるが、出版法に觸れて入獄したこともある。兎に角岡山縣に於ける辯護士としては成功者の一人であつた。

岡山教會

岡山に於ける基督教の宣傳が大に効を奏したのは米國宣教師の努力に因ることは勿論であるが、其主たる原因が金森の熱烈なる信仰と雄辯に在つたことは言ふまでもない。明治十二三年頃から運動を開始し明治十九年には既に約四百名の會員を有する大教會となつたのであるから、其發達や實に驚くべきものがある。私が初めて岡山を訪問した時には既に教會堂も新築されて居た。現在も尙ほ其まゝに維持されて居るのみでなく、附屬建物も增築されて居る。其當時は腰掛を用ひなかつたのであるから、八十疊の座席と後方に在る二階の座席とを合すれば六七百名の人々を容れることが出來た。其時代に於て三百名以上の信徒を有する教會は日本全國を通じて五六に過ぎなかつたやうであるから、岡山教會と言へば殆んど代表的教會であるかの如く思はれて居た。然るに金森は新島先生の補佐役として無理に同志社に引取られたため、岡山は容易に其後任者を得ることが出來なかつた。僅に宣教師などの應援で其活動を繼續するに過ぎなかつた。恰も其時以前の牧師であつた金森が若手の連中を四人も伴うて來たので、盛に演說會や說教會が催ほされた。到着の翌々日卽ち十二月廿六日午後に說教會、廿七日には午後と夜分と二回旭座といふ劇場で演說會があつた。廿八日には再び說教會が行はれた。結局私は二回の說教と二回の演說をやつた譯である。私共は廿九日岡山を出發し、汽船で歸途に就いた。此遠足旅行は大なる成功であつて、今尙ほこれを思ひ出しても愉快に堪へない。然し此旅行が全く金森によりて仕組れた一種の芝居であつたことが近年になつて明白になつた。私が

數年前新潟縣に旅行した時偶然にも汽車中で金森と一所になり、柏崎に到着するまで種々なる談話に耽つた。其時の說明に據れば金森は私を後任者として岡山教會に推薦するためアノ遠足旅行を企てたのである。さうなると私が岡山で演說や說敎をやつたのは全く岡山敎會員の前で試驗されたやうなものだ。若し遠足旅行者が五人でなく、單に金森と私のみであつたならば、私は直に金森の計略を看破し得たに相違ない。何分五人の同行者であり、何れ劣らぬ自稱雄辯家であつたから、まんまと金森の計略に致されたのは無理もない。兎に角私は無事試驗に及第したから宜い樣なもの、、若し落第して居たならば馬鹿々々しい話だ。私は岡山を去る前に敎會から正式の申込を受けた。餘りに突然のことであるから私は卽答することが出來なかつた。遂に岡山敎會の代表者は京都に來て私の決意を促した。勿論私は宗敎宣傳の必要を知るのみでなく、其方面に對して趣味を有して居たのであるから、決して岡山に行くことを好まなかつた譯ではない。唯私が其時目標として定めて居たことは三十歲位まで修養するといふことであつた。然るに僅か二十三歲の青年が約四百名の信徒を有する敎會を指導するといふことは何となく冒險であるように考へられた。兎に角私は數日間愼重に考へて見た。勿論三十歲まで修養するといふことも單に希望だけであつて、何等具體的成案があつた譯ではない。其當時に於ける修學の途と言へば、帝國大學に入るか或は米國に留學するか、二者の中其一を擇ぶ外はなかつた。

然し父母扶養の義務を負うて居た私には二途何れも塞がれて居た。殘る問題は現在のまゝ同志社に留まるか或は岡山敎會の招聘に應ずるかであつた。同志社に於ける授業時間は極めて少ないので、自修時間は充分であつたけれども、當時の同志社は高等の學問を爲すには餘りに刺戟が足りなかつた。第一に指導者がなく、第二に書籍が缺乏して居た。若し學問を第二位に、人物修養を第一位に置くならば、實際的宗敎運動に參加した方が宜いではないか。これが私の爲に開かれた唯一の途ではないかと考へた。其結果私は正式に承諾の意を岡山敎會に返答した。これは明治二十年一月九日のことである。但し同志社に於ける授業の關係もあるので、三月末の試驗終了後岡山に行くことを約束した。然るに同志社に於ては三月末までに後任者を得ることが出來なかつたから、私に是非夏休暇まで岡山行を延期するやうにといふことになり、新島先生は特に岡山敎會と談判するため私に岡山行を命ぜられた。私は三月の試驗を終るや否や岡山に急行して新島先生の意を傳へたのであるが、敎會員の鼻息頗る荒く、寧ろ同志社に對して逆襲を試みるといふ有樣であつた。同志社は先に金森を岡山から奪ひ去つた。安部の赴任も同志社の都合で三ヶ月の延期を承諾したではないか。今又三ヶ月の猶豫を要求するなどとは以ての外のことだといふのが敎會側の意見であつた。勿論同志社側としては少しも强制がましきことを言ふ考へはなく、單に岡山敎會に哀願するといふ程度のことであつたから、私は直に京都に歸

り一々其事情を新島先生に報告した。其結果新島先生は送別の意味で私を晩飯に招待して下さつた。新島夫人は私が早晩結婚の必要に迫られるであらうことを仄かされたけれども、私は何故か私に婚約のあることは打明けなかつた。

第十二章　岡山時代

教會員

私は明治二十年四月八日京都を引拂うて岡山に赴任することになつた。岡山教會が私の住宅として定めて呉れたのは七番丁に在る大西祝の家であつた。大西は同志社に於ける私の先輩であつて其當時は兩親と共に東京に住んで居た。東京帝大を卒業した後東京專門學校（今の早稲田大學）で教鞭を執り、更に政府の留學生となつて獨逸に學び、歸朝後は京都帝大の文學部長となつた。同志社時代から拔群の成績を擧げて居たのであるが、人格者としても知人の間に推賞されて居た。若し彼にして長命を保つことが出來て居たならば、或は世界的哲學者として名を成したかも知れない。不幸彼は獨逸留學中に健康を害し、歸朝後間もなく不歸の客となつた。彼の本姓は木全であるが、彼は早くから叔母の嗣子となつて其姓を冒して居た。私が岡山に落着いた時其叔母である大西女史は尙ほ其家に在つたので、一人の女中と共に何かと私の世話をして呉れた。然し數ケ月後私は旭川の東に在る門田屋敷といふ所に轉居した。此所も七番町と同じく靜なる所で、讀書のためには適當なる所であつた。私は其當時に於ける宗教運動の情況に就き少しく述べて見たい。岡山市は言ふまでもなく、岡

山縣全體に基督教が比較的早く傳播したのは全く教育が普及して居たためではないかと思ふ。概して言へば岡山縣は昔から可なりよく教育が普及して居た。啻に男子のみでなく、女子にも讀書や習字の素養があつたやうに思はれる。一言にしてこれを表はせば岡山人は男女に拘ばらず何れも聰明であつた。これは決して近代式教育の結果ではなく、封建時代からの教育に基因するものである。これがため基督教は比較的容易に彼等の受け入れる所となつたものらしい。其當時教會の代表的人物は何れも其年齢に於て、其經驗に於て私よりも優つて居た。中には私の父母と同年位の男女があつた。男子では前に述べた石黒涵一郎と中山寛が辯護士であり、吉岡正矩、丸毛眞應、福家篤男といふが如き老練の人々が最も多く教會のために盡力して居た。殊に婦人には傑出した人々が星の如くに輝いて居た。長老ともいふべきは中川横太郎の夫人であつたが、其に次ぐ者は中村靜、炭谷小梅、加藤春、横山ハナ、大西絹の人々であつた。此等は單に代表的の男女を擧げたに過ぎないので、若き男女の中に幾多の人物が隱れて居たことは言ふまでもない。此等の男女は何れも三十歳以上であり、中には四十歳以上の人もあつたのだから、僅に二十三歳であつた私が彼等を指導するといふことは全く滑稽の至りである。然し私には意外の點に於て有利なことがあつた。それは私が年齢に比例して大人らしく見えたことである。私が前年初めて岡山を訪問した時私は同級生岸本能武太の宅に招かれたことがある。私が其家を辭去した後、岸本の父は『安部といふ人は三十歳位に見へるが、本當に其位かな』と岸本に質問したといふことを聽いた。實際私は三十歳位に見えたらしい。兎に角これがため牧師といふ要職が大した失策なしに勤まつた譯だ。それと同時に教會員中の先輩が私を援助し指導して呉れたことがどれだけ私の奬勵となつたかも知れない。教會には毎年教會員全體を集めて總會を開き、來年度の事業とか會計とかを議するのであるが、或年の總會に於て一小波瀾が生じたのである。私は何時も議長の任に當つて居た。私は公平といふことを理想として居たのであるから、何人にも發言の機會を與へたのであるけれども、議場が多少騷々しかつたために發言者を悉く滿足せしむる譯にはゆかなかつた。一人の先輩は發言の機會が與へられないのを憤慨して、自分は退席すると怒鳴り出した。私も少少癪にさわつたので『それはあなたの勝手です』と言ひ放つた。やがて總會が終ると丸毛眞應といふ溫厚であり、然も考練である教會員は私に向つて『アノ先輩を怒らせるといふことは教會のためになりませんから、今直ぐ彼の家を訪うて和解なさる方が宜しい』と言ひながら、私と共に其家に行つて呉れた。これで一時の衝突も無事に納まつた。これは單に一事に過ぎないけれども、教會員が如何に私を援助し指導し呉れたかゞ判る。婦人達は又恰も母や姊の如く私の住宅や衣服のことに氣を附けて呉れた。私は全く大家族の和氣靄々たる中に養育されたやうな氣がした。教會員の大部分を占むるも

のは知識階級に屬する俸給生活者や學生であつた。其當時岡山に於ては既に師範學校や中學校が設立されて居たのみでなく、岡山醫科大學の前身である岡山醫學校も存在して居た。後には基督教主義の女學校（現在の山陽高等女學校）も出來たのであるから、教會の諸集會には女學生の數が比較的多かつた。商人及び職人で教會員となつた者は多少あつたけれども、現在の所謂自由勞働者は絶無であつたやうに思ふ。然し一方には特殊部落の中から教會員になつた人があつた。岡山の隣接地に竹田村といふ特殊部落があつた。其處から中塚といふ一家族が率先して岡山教會員となつた。其家には多少の資産があつたのみでなく、主人には相當の教養があつた。毎日曜の午前には教會堂で日曜學校が開かれ、幾組にも分れてバイブルの講義を聽くことになつて居た。教師は教會員中の元老が務めるのであつて、中塚も其一人であつた。其當時中塚は四十五六歳位であつたと思ふが彼の講義を聽く者は多く六十歳以上の老人であつた。其中には舊藩時代の士族階級に屬する者が一二名あつた。私は赴任後此光景を見て感激に堪へなかつた。基督教の精神が博愛主義であり、平等主義であり、平民主義であることは同志社時代に於て充分に會得して居た。私が基督教に引き附けられたのも全くこの精神のためであつたと言ひ得る。然るに明治二十年の頃昔の武士が特殊部落の人からバイブルの講義を聽いて居るのを見た時私はこれが卽ち基督教の力だなと感ぜざるを得なかつた。基督の死後に於ける信徒の生活が如何に愛の表現であつたかはバイブル中の『使徒行傳』の記事により之を想像することが出來る。彼等は單に精神的方面に於て結合して居たのみでなく、物質的方面に於ても人類同胞主義を實現して居た。富める者は其財産を提供して貧しき信徒を援助した。卽ち小規模に於て彼等の間に社會主義が實現されて居たのである。我國に於ける初代の基督教會には此精神が漲つて居た。勿論社會主義の理想が實現されて居たとは言はれないけれども、教會員の不幸に對して教會全體が深き同情を表し、且つ物質的援助をも惜まなかつたことは事實である。教會員の間に多少感情的衝突を來したことはあるけれども、それは決して表面に現はれる程のものではなかつた。自ら善き模範を示して基督教會の信用を得ねばならぬといふことが其當時に於ける教會員の覺悟であつた。現在の教會に比すれば初代の教會は確に異彩を放つて居たといふことが出來る。

宣教師　岡山教會のことを追想する時私はどうしても岡山在留の米國宣教師を除外することは出來ない。私が赴任した前にベレーといふ人が居たのであるが、其後面會はしたけれども、親交を結ぶに至らなかつた。ケレーといふ宣教師も私が赴任して間もなく岡山を去つたのであるから、其後も自然に疎遠になつた。私が四年間最も親しく交際したのはペテーとローランドの二人であつた。ローランドは私よりも遲れて岡山に來たのであるから、何と言つても私はペテーと最も長い且つ親しい交際

を續けた。ベレーは宣教師であつたけれども本職は醫者であつた。基督教の宣傳を爲すと共に彼は縣立岡山病院で働いた。當時日本の醫術は未だ幼稚であつたから、ベレーは西洋人の醫者として非常に歡迎されたといふことである。岡山には中川横太郎といふ人物が居たのであるが、彼はベレーを助けて醫術の方面のみでなく、宗教宣傳の方面にも盡力した。これがためベレーの名は岡山縣全體に轟き渡つた。これが基督教宣傳のためどれだけ助けになつたかも知れない。中川は岡山西郷と言はれる程の代表的人物であつて、自ら教會員とはならなかつたけれども、基督教贊成演說は盛にやつた。私は中川とベレーの二人が基督教宣傳のため間接的援助を與へたことは岡山教會の發達に大なる關係があると信じて居る。明治二十年頃の岡山縣に於ては基督教の宣傳に對し殆んど何等の妨害がなかつた。佛教側の反抗運動も微々たるものであつたから、基督教は全く順風に帆を揚げて靜かなる海上を走る觀があつた。勿論これは泰西文明謳歌の時代となつたゝめでもあるが、中川とベレーが基督教宣傳のため少からず努力したことが此結果を來すために大なる貢獻を爲したことは疑がない。ベレーの名は今日でも岡山縣人の記憶に尙ほ殘つて居る。日本政府は彼の功勞を記念するため先年勳章を贈つたやうである。ペテーは教會に取りても私自身に取りても大なる恩人であつた。私は同志社を離れると共に圖書館にも離れたのであるが、哲學とか文學とかに關する書籍はペテーから借りることが出來た。

今一つは英語の練習であつた。ペテー及び其家族とは常に英語で談話することになつて居たから、此點に於ては同志社に居る時よりも便宜が多かつた。ペテーは日本語には最後まで上達しなかつた。說教も餘り上手な方ではなかつたけれども、實に好人物であつたゝめ、彼を知る者は何人も彼を敬愛した。私が後年米國に行つた時ペテーは必ず彼の鄕里を訪問して吳れと依願した。彼の鄕里といふのはヴァーモント州に在るので、私の滯在して居た所とは可なり離れて居たけれども、一度其所を訪問してペテーの近親に面會したことがある。ペテーは數年前に不歸の客となつたが、夫人は今尙ほ健在である。長女は横濱に在る關東學院長テネー博士に嫁して居る。次女も既に嫁して米國に住んで居る。ローランドはペテーよりも若く、然し日本語には巧であつた。彼はハートホード神學校の出身である。私が後年其神學校に入學するやうになつたのは全く彼の紹介によるのであつた。以上紹介した宣教師の外に女宣教師も數名あつた。彼等は主として山陽女學校で教鞭を執つたのであるが、私は今一々其名を記憶しない。最後まで岡山に蹈み止り、其一生を社會事業のために捧げたのはアダムス孃であつた。彼はペテーの親戚であつて、約四十年間岡山市のために働いた。先年日本政府は彼の功勞を表彰したと聞いて居る。以上述べた如く男女の區別なしに宣教師は岡山縣のために努力したのであるから、其教會員たると否とを問はず、岡山縣人は宣教師に對して感謝の念を懷いて居た。私が岡山

に赴任した當時外國人排斥の聲が少しもなかつたのは決して怪むべきことでない。

岡山孤兒院　我國に於ける社會事業として最も古きものゝ一つは岡山孤兒院であると思ふ。其創立は私が岡山に赴任して間もなきことであつた。岡山孤兒院の創立者は石井十次であつて、私は其創立當時から關係して居た。石井は岡山醫學校の學生であつたが、熱烈なる基督教信者であつた。博愛とか同胞兄弟とかいふことには殊に感激したものと見へ、學生の身でありながら、乞食の子供三人までも拾ひ上げて、これを養育して居た。其以前には自分の學資を貧乏なる學生に與へ、自分は毎晩按摩をやつて學資を得たといふ逸話もある。一たび三人の孤兒を世話するやうになつてから、彼はこれが天より與へられた自分の使命であると感じた。彼は醫學の研究を恰も古靴の如く脱ぎ捨て、孤兒院の設立に一路邁進した。私の住居せる家の附近に一の寺院があつたので、石井は其一部を借りて孤兒院を創立することになつた。私も援助者の一人で、機會ある毎に各地に於て岡山孤兒院の宣傳をするのみでなく、寄附金の募集をもなした。私の日誌によれば、明治廿一年一月には愛媛縣地方に旅行し各基督教會に訴へて寄附金の募集をなした。孤兒院の收容人員は著しく增加し、從つて其名も廣く國内に知れ渡るやうになつた。從つて多くの經費を要することになつた。石井の經營法は幾たびか變更されたのであるが、初めて斯る事業を企てた彼に取りては實に已むを得ぬことであつたかも知れぬ。其當時英國のブリストル市にあつたシューラーの孤兒院は可なり有名なものであつた。彼シューラーは唯神の助けを祈るのみで、一切人々に向つて寄附を仰ぐことをしなかつた。石井は此話に感動され、一時寄附金募集を中止して、熱心に神に祈つた。後には又一切寄附金を謝絶することになつた。其理由は次の如きであつた。孤兒が寄附金で生活するといふことは彼等の品性を傷つくるものであるから、各自何等かの勞働によりて生活の途を求めなければならぬといふのであつた。此思想の結果として後年日向の茶臼原に於て農園を設け、年長の孤兒を其處に送ることにした。私は昭和六年五月初旬九州遊説の途次宮崎縣にも立寄り、宮崎から妻町に赴く際自動車の窓から僅に茶臼原農園の一部を見た。今は農園も衰微して昔の面影なしといふことを聞き寂寞の感に堪へなかつた。石井は更に次の如きことを考へ出した。如何程親切に孤兒を養育しても、彼等が孤兒院に居る限り、彼等に家庭の溫味を與へることは出來ない。此缺點を除くためには幼兒を信用ある家庭に里子として依託する外はないといふことで、孤兒院が養育料を負擔することになつた。斯の如く石井は種々獨創的考案によりて孤兒院を經營したのであるが、不幸にして彼は遂に大志を懷きながら此世を去つた。其後經營難に陷り已むなくこれを閉鎖するに至つたことは遺憾に堪へない。然し岡山に於て孤兒院の創立されたといふことは私に取りて極めて意義あることであつた。私は同志社以來一方には基督教によりて精神的希望を充

たし、一方には慈善事業によりて物質的救濟を行はねばならぬといふことを考へて居た。石井の孤兒院が創立された時には私自らも目的の一部が達せられたかの如くに感じた。勿論私は教會の方が本職であり、孤兒院は石井が專心一意經營に當つて居たのであるから、何も私が直接助力する必要はなかつた。然し慈善事業は私の最も重要なる目的であり、且つ趣味であつたから、機會さへあれば、これを援助したのである。後年米國に留學した時にも私はニューヨーク市に於ける多くの慈善事業を視察したのである。私をして遂に社會主義者たらしむるに至つたのも、畢竟するに最初慈善事業に對して深き興味を有して居たからだ。

毎週のプログラム

岡山に於ける私の生活は極めて規律正しきものであつた。時々基督教宣傳のため旅行することはあつたけれども、岡山に居る場合のプログラムは次の樣なものであつた。兎に角牧師として最も多忙なる日は日曜日であつた。これは牧師のみでなく、教會員全體に對しても同一のことが言へる。日曜日は午前八時から教會堂に於て日曜學校が開かれるといふことは既に述べた通りである。老若男女の區別なくバイブルを研究せんとする者は出席する。幾組にも分れて教會員中の先輩が教師の任に當つた。午前十時からは日曜の禮拜を行ふのであるから、日曜學校に出席した者は禮拜にも列することが普通であつた。此禮拜には私が當るのであつて、簡單なる儀式を行ふた後、私が約一時間許り說教するのであつた。これが私に取りて最も重要なる役目であつた。牧師の成功と失敗は此說教によりて定まると言ふても差支はない。日曜日の夜は演說會であつて、これは教會員を目的とするのではなく、主として教會外の人々に向つて基督教の何ものたるかを說明する宣傳的のものであつた。日曜以外に重要なる集會として毎週開かれたのは金曜日の晩であつた。これは教會員のみの集會であつて、會員は信仰上に關する自己の經驗を語り、或は祈る者もあれば、バイブルを朗讀する者もあり、これを一種の修養會と見るのが適當であるかも知れぬ。私は毎回必ず出席した。斯の如く私が主として擔任せねばならぬのは日曜日の午前に於ける說教、同夜分に於ける演說、及び金曜の晩の集會であつた。これ以外の時間をどんな風に費したかと言へば、先づ毎日午前中は私自身の勉强に費すことになつて居た。これは教會員によりて決定されたことであるから、教會員は午前中決して私を訪問するやうなことはなかつた。午後は來客に接するか、若くは私自ら教會員を訪問することにした。殊に教會員にして疾病に罹れる者若くは教會に遠ざかつて居る者があれば、私は彼等を訪問して慰藉若くは奬勵の言を與へた。時には教會員の中から誰々が基督教研究の希望を有して居ると報告することがある。其時は其人々の家を訪ふことにした。夜分は別に定まつたプログラムもなかつたから、來客もなく集會もなければ、午前と同樣靜に讀書し、若くは思索に耽つた。私は日曜日午前

の說教と夜の演說に對しては大なる興味を有して居たのであるから、一度でもこれを重荷と考へたことはない。寧ろ私は日曜日の來るのを樂として居た。日曜日が終ると其翌日の月曜日には其次の日曜日に於ける說教と演說の題目及び內容を大體に決定し、毎日々々機會さへあれば、それに關する材料を蒐めたり、或は思想を練つたりした。私は說教や演說の原則を次の如く考へた。說教や演說によりて聽衆を感動せしむる前には先づ自らこれによりて感動されることが必要である。換言すれば私は聽衆に向つて演說する前に先づ自分に向つて演說することを習慣として居た。自分の演說が自分を感動せしむる程のものであれば、聽衆も亦或程度まで感動するに相違ない。これが私の說教及び演說練習法であつたから、これがためどれ程自分の修養になつたかも知れない。現在でも演說は私に取りて少しも苦痛でないのみならず、寧ろ大なる道樂である。然し教會員を訪問したり、或は基督教研究志望者の家に行くといふことは義務としてやるにはやつたけれども、何時も或程度の不快を感じた。私の心に何時も疑問となつて居たのは何私故共は眞理の押賣をしなければならぬかといふことであつた。昔の漢學者は自ら進んで教を乞ふ者のみに道を說いたけれども、決して儒教の押賣はしなかつた。若し基督教を熱心に研究せんとする人があるならば、其人は進んで牧師の下に來りて教へを受くべき筈ではないか。牧師が人の家を訪ふて道を說くといふことは全く主客の位地を顚倒したものではないか。

これが私の疑問であつた。然し教會員を訪問したり、求道者の家を訪ふことは牧師の重要なる職務の一つと考へられて居たから、いやく〳〵ながら私はこれを實行した。勿論教會員全部を訪問することは不可能であつて、毎週一二度宛訪問せねばならぬ人々は全教會員の一部に過ぎなかつた。私は訪問すべき教會員の姓名を表に作り、今日は誰々を訪問し、一々其表に點を附して大に努力したものである。然し私は幾年を經ても結局これを愉快に行ひ得る程度には達しなかつた。後年私が宗教宣傳の職を止めて教育界に轉ずる樣になつたのも其主なる原因は此點に在つた。私は岡山基督教會の牧師であつたけれども、私の活動範圍は岡山全縣下に及んで居た。其當時備前備中美作の三ケ國に亙り可なり多くの基督教會が存在して居た。岡山教會に次で有力なる教會は高梁、津山、落合、天城、笠岡、倉敷（備中）等であつたが、其他小教會や講義所が至る所に設けられて居た。汽車や電車のない時代ではあつたが、私は人力車を利用して各地に出張し、幾度となく說教や演說を試みた。第一章に記した如く、私の祖先は浮田直家及び秀家に從ふて備作の各地に轉戰したのであるが、私も亦同一舞臺に立つて靈の戰を爲しつゝあるのだと考へ、一種のインスピレーションを感ずることも度々であつた。私の活動は單に岡山縣のみに限られては居なかつた。廣島縣、鳥取縣、香川縣、愛媛縣も亦私の活動舞臺であつた。尙ほ最後に述べて置きたいことは、私が教育事業にも關係して居たといふ

ことである。基督教會が教育方面に力を盡して居ることは昔も今も變りはないが、殊に明治二十年頃に於て基督教主義の學校が各地に設けられて居たことは基督教の强味であつた。兎に角泰西の文明が輸入され初めた時代のことであるから、文明國の宗教として基督教が歡迎されたのに何の不思議はない。此潮流に乘つて基督教會は各地に男女の學校を設立した。女學校は既に私が岡山に來る前に設立されて居た。明治廿一年九月には男子のため岡山英語學校が創立されたのであるが、これは私が歐米の留學を終へて歸朝した時まで繼續して居た。斯の如く學校が容易に設立されたのは全く男女の宣教師が無報酬で教授して呉れたからである。其當時官立學校ですら容易に外國教師を雇入れることが出來なかつた位であるから、基督教關係以外の私立學校が競爭し得なかつたのは當然である。其結果基督主義の學校は全く獨占的位地に立てる觀があつた。私は女學校に於ても岡山英語學校に於ても教師として働いたことがある。岡山英語學校は遂に廢止することになつたけれども、女學校は今も尙ほ山陽女學校として岡山縣下に於ける女子教育の重鎭となつて居る。

第十三章　洋行前

東京訪問　私が明治廿年四月岡山教會の牧師となつてから同廿四年七月洋行のため岡山を去つたまでの間に種々なる事件が生じたのであるから、簡單にこれを述べることにする。私が岡山に到着するや其翌月卽ち五月初旬東京に開催されることになつて居た基督教信徒大會に岡山教會を代表して私が出席することになつた。これは教會員が私を如何に優待して呉れたかを證明するもので、私は心からこれを感謝した。私は幾度東京遊學を企圖したかも知れない。然も種々なる事情がこれを許さなかつたのであるから、せめては一度東京を訪問して見たいと思ふて居た。殊に大會には代表的クリスチャンが集まるのだから、其人々に面會することも非常な利益であらうと考へた。東京滯在は約二十日間であつたが、私は出來得るだけこれを利用した。私の同級生も三四名同じ目的のため上京したのであるから、滯在中の一部は同一旅館に宿泊して舊交を溫めた。宗教的會合には洩さず出席したため、當時基督教界の名士と呼ばれた人々には殆んど全部面會することが出來た。兎に角當時の基督教は昇天の意氣で進みつゝあつたから、名士達の氣焰は實に素晴しきものであつた。私共の如き少壯

宗教家がこれによりて皷舞作興されたことは言ふまでもない。宗教大會が終つた後には多少見物もしたけれども、今尙ほ記憶に殘つて居るのは私が慶應義塾、帝國大學、東京專門學校（後に早稻田大學）を訪問したことである。其當時慶應義塾では毎土曜日に三田演說會なるものを開いて居た。私は新聞の廣告を見て福澤先生が出演されることを知り、何事をも打棄てゝ三田に出かけた。私は新島先生を尊敬すると同時に福澤先生をも慕ふて居たから、此機會を利用して先生の溫容に接すると共に其言論を聽かんことを熱望した。其時の演說會場は塾內の講堂であつたが、これは今日も尙ほ記念として保存されて居る。其日の辯士は四五名であつたが、私は一々其名を記憶して居ないけれども、獨り井上角五郎の名と其演說だけは今でもよく記憶して居る。彼は『變則の文明』といふ演題で滑稽交りに辯じ立てたが、聽衆は盛に拍手を以て之を歡迎した。演說の內容は別として、其辯舌には大に敬服した。私が同志社以來聽いた雄辯は多く宗教的であつて、謹嚴といふことが其特色であつた。井上の演說はユーモアーに富んで居たのみならず、演說全體が如何にも輕快であつた。私はこれによりて新しい演說の型を學んだやうな氣がした。井上の演說が終ると司會者は福澤先生に差支が出來て出演不可能となつたから、これで閉會にするといふことを宣した。私は此好機會を失つたゝめ、遂に一度も先生の溫容を拜することが出來なくなつた。然し井上の演說を聽くことが出來たゞけでも私に取りては大なる利益であつた。其次は帝國大學を訪問したのであるが、私の外に同行者が二三人あつた。帝國大學は日本に於ける最高學府であり、私も幾度が入學を計畫した位であるから、何を差置いてもこれだけは是非參觀せねばならぬと考へて居た。幸にして紹介者もあつたから、可なり詳細に參觀することが出來た。幾つともなく教室を巡廻して居る中に私共は圖らずも私田垣謙三博士が經濟學の講義をやつて居る教室に案內された。和田垣博士はクリスチャンであつたから、私共が宗教大會に出席のため上京したことをも知つて居る。一時講義を停止して私共を學生に紹介した。これまでは無事であつたが。和田垣博士は更に進んで學生のため何か話をして呉れよと私共に注文した。西洋では珍客が學校を訪問すると、其人に演說を依賴するといふ習慣があるやうだが、和田垣博士はこれを早速感用したものと見へる。學生達も面白半分に『どうぞ願ひます』と催促する。然し自稱雄辯家である私達も全く不意討を喰つたので、遺憾ながら敵に後ろを見せて退却した。次に私は東京專門學校を訪問した。言ふまでもなく東京專門學校は大隈の創立した學校といふので有名であつた。然し私が此學校を訪問したいと思ふたのは、これが同志社と同じく私立學校であつたからだ。然し創立後僅に五年を經過したばかりで、其建物や設備に於ては到底同志社にも及ばぬものであつた。私は其時誰に面會したか、又教室などに案內されたかどうかといふことに就ても全く記憶がない。まして十二年後に自分

が此學校の教師にならうなどゝは夢にも考へなかつたのである。私は五月十七日東京を發して歸途に就いた。其頃は東海道には汽車もなかつたのであるから、往復とも汽船による外はなかつた。即ち横濱から神戸まで、更に神戸から岡山の三番港まで汽船を利用したのであつた。現在特別急行列車を利用すれば、東京から岡山まで約十二時間を要するのであるが、明治二十年頃の汽船旅行には約四十二三時間を要したのである。

洋行の機會來る　東京から岡山に歸つて約一ケ月半を經過した後私には可なり重大なる問題が起つた。それは明治二十年七月八日のことであつた。京都に在る友人からの手紙によれば、京都の某富豪が此度歐米漫遊を試みるに付ては是非私に通譯者として同伴を願いたいとのことであつた。私は個人的に其富豪を知つて居る。私は前に述べた通り禁酒宣傳者レビット夫人の京都に於ける演說を通譯したのであるが、其富豪も多分其演說を聽いて居たに相違はない。彼は決して私を單に通譯者として利用する積りではなかつたであらう。若し私が通譯者としての任を果した後尙ほ彼地に留學したき希望を打明ければ、彼は快よくこれを承諾するに相違ない。これは私に取りて絕好の機會ではないかと思はれた。然し唯今直に洋行するといふことには幾多の困難があつた。其第一は岡山教會との關係であつた。私は岡山教會に招かれて、僅に三ケ月を經過したのみである。教會は私に凡ゆる便宜を與へて私を有能なる牧師たらしめんと努力して居る。若し私が自分の都合のみを考へて教會を無視することになれば、これは全く人格の破壞である。私は何のために基督教を信じたのであるか。これは自分の名利を棄てゝ人類のため奉仕するためではなかつたか。自分は今恐ろしき誘惑に出會つて居るのである。斯る誘惑は一氣に擊退すべきである。これが私の到着した結論であつた。然し私は數日間此問題のために惱んだ。勿論此の如き問題は教會の先輩にも知らしむべきことでないから、私自身でこれを解決しなければならなかつた。若し私の同級生が手近な所に居たならば、私は彼に其事情を打明けたかも知れない。然し私は幸にして正しき結論に達することが出來た。恰も惡夢から覺めたかのように私は輕き心で筆を執り京都の友人に謝絕の手紙を書いた。其後の結果から見れば私の判斷は確に當を得て得たと信ずる。私は此事を何人にも告げなかつたのであるから、教會員中一人でも不安や不快の念を懷くものはなかつた。而も四年後には教會員の快諾を得て私は遂に洋行の宿望を達することが出來たのである。勿論私の渡米は意外に遲れたのであるけれども、これがため私は重要なる目的を達することが出來るやうになつた。それはこうであつた私は駒尾と婚約して以來一日も早く神戸の女學校に入學させたいと思ふたけれども、學資の途がなかつたゝめこれを實現することが出來なかつた。然し岡山に赴任して以來は學費も送ることが出來るやうになつたから、其年の九月には必ず神戸につ

れて來る豫定であつた。然し私が假に歐米漫遊に出かけたとしたならば、駒尾の入學は更に延期されて居たかも知れないが、幸にして洋行を斷念したゝめ一方の問題は直に解決されることゝなつた。

私は九月末郷里福岡に歸り、十月初旬駒尾を伴ふて神戸に行き、入學の手續を終へて私は岡山に歸つた。駒尾は都合により後大阪の梅花女學校に轉校した。

新神學　明治廿三年一月廿三日には新島先生が大磯で永眠された日である。同志社は勿論のことであるが、日本の基督教界は全く光を失つたような狀態であつた。廿七日の葬式には全國から同志社關係の者が集まり來つた。私も岡山から馳せ參じた。哀愁の中に私共は先生の遺骸を若王寺山上に葬つた。これは日本全體のためにも大なる損失であつたが、殊に私共のためには大なる打擊であつた。

『吉野山花咲く頃の朝な〳〵心にかゝる峯の白雲』といふ歌は度々先生の口から聽いたのであるが、同志社の隆盛を見、基督教の發展を喜んだ先生の心には尙ほ少からぬ心配があつたのではないかと想像される。幸にして同志社の經營は金森通倫、小崎弘道の二人によりて行はれることになり、校運は益〻隆盛になつたけれども、指導者を失つた基督教界には思想的動搖が現はれ始めた。私共が同志社に於て學び得た基督教は全く傳統的信仰があつて、何等科學的批判を許さなかつた。單なる宗教的信仰としてこれを承認することは出來ても、一たび理論的にこれを研究する時には何人も其不合理なることを感ぜざるを得ない。私が同志社卒業後神學部に入學して一週間の後遂に退校するに至つたのは全くこれがためであつた。其後私は岡山に於て基督教宣傳の責任を負うたのであるが、自ら信ずることゝ、これを人に信ぜしむることゝは必ずしも一致しないといふことを感ずるやうになつた。例へばバイブルの中に在る基督の教訓と基督の不可思議なる行爲（奇蹟の如き）とは不可分のものとして私自身はこれを信じて居たけれども、これを人に說くに當りては左樣簡單に片付ける譯には行かない。私は基督の教訓が實に人道的であることに感激して、これを自分の行爲に實現することを此上もなき樂としたに拘はらず、基督が處女マリヤから生れ、十字架に磔殺されながら三日の後蘇生したといふが如きこと、或は氷上を徒步したとか、水を變じて酒としたとか、五個のパンを以て五千人を養つたといふが如き記事に至りては何人も容易にこれを信ずることは出來ぬ筈である。然し私が同志社に於てクリスチャンとなつた時代には私共の先輩も同輩も此等不可思議なることを有り得べきことだと信じて居た。兎に角私共は全知全能の神を信ずることに出發點を置いた。此出發點に語謬がないとすれば、基督の奇行も決して不思議とするには足らない。神は超自然であるから自然界の法則を變更することも出來る筈だ。私共はこんなロジックで幾分か疑問を打消したのであるけれども、自らこれを信ずる場合と進んでこれを人に說く場合とには大なる相違がある。其結果私はバイブル中に在る超自然

的記事に對して多少の疑を生ずるやうになつた。恰も其時我國の基督教界には新神學運動なるものが起つて舊式なる思想に對して大なる刺戟を與へたのであつた。金森通倫は新島先生の沒後同志社經營の任に當つて居たが、後東京に出て麴町に在る番町教會の牧師となつた。彼は其時から信仰上に大なる變動を來し、所謂新神學なるものを唱導することになつた。新神學とは主として獨逸の神學者が唱へる所の學說であつて、『これによればバイブル中に在る超自然的記事（奇蹟）は後世人が附加したもので、何等基督の教訓とは關係なきものである。私は新神學が唱へる說には充分なる理由があると考へたけれども、『まだこれを全部承認する程度には至らなかつた。其當時のことであつたと記憶するが或友人は私に次の樣なことを物語つたことがある。近頃自分はシュレーゲルといふ人の書いた歷史を讀んだのであるが、基督が十字架上で殺され、三日の後蘇生したといふことが羅馬に報告された。恰も其時開會中であつた羅馬議會の議員はこの報告を受けて大に驚き、基督は眞に神の子であるといふことを決議したといふことが其中に書いてあつた』。私はこれを聽いて少からぬ興味を感じた。若しバイブルの中に在る記事が歷史的に說明が出來るやうになれば、私は當然超自然といふことを信じなければならぬ。要するに私は將來バイブルを歷史的に研究したいといふ考へを起した。言ふまでもなく年月と金錢さへ費せば羅馬やアレキサンデリヤの圖書館に於ても歷史的研究をなす可能性があるではないが。此希望を達するためには先づ米國留學を決行しなければならぬ。今から考ふれば如何にも幼稚なる思想であるけれども、其當時の私に取りては可なり重大なる問題であつた。然し渡米の目的は單にバイブルの歷史的研究のみではなかつた。前にも概略述べた如く、私は宗教研究と共に社會問題の研究といふ痛切なる志望を有して居た。岡山に於ては幸に岡山孤兒院といふ社會事業に關係して居たから、其方面に於ける私の趣味は益濃厚になつて來た。從つて米國留學の必要が一層感じられるやうになつて來た。

渡米準備　新島先生が永眠された時私は岡山に於て殆んど滿三年の任期を終つて居た。明治廿年七月渡米の機會が偶然私に迫つて來た時私は就任後僅に三ヶ月を經たばかりであつたから、何人にも謀らずしてこれを見逃すことにした。然し今や殆んど滿三年間教會のために勤務した。勿論教會が私を棄てない限り私は永く基督教のために、且つ亦岡山教會のために努力したいと考へて居た。だから私が三年間米國留學をなすことは單に私自身の希望を充たすためのみでなく、教會のためにも、又弘く基督教界のためにも意義あることではあるまいか。私は折に觸れて教會の先輩には私の希望を語つて居た。彼等も無論これには贊成して居た。言ふまでもなく私の渡米には種々なる故障があつた。今其大略を述べると同時に私が如何にしてこれを切りぬけたかをも語つて見よう。第一私には自ら學費

を支拂ふ能力がないのであるから、學費を要することの少ない學校を撰ばなければならぬ。出來ることならば自ら働いて幾分かの收入を得なければならぬ。それがためには私は結局神學校に入學する外はなかつた。米國の神學校は恰も我國の師範學校の如く、學生の費用は大部分學校で負擔することになつて居る。卽ち寄宿舍費と食費は校費であるから、私は單に雜費を負擔すれば宜いのであつた。前に述べた如く、國山在留の宣教師ローランドは私のために米國カンネチカット州ハードホード市に在る神學校と交渉して呉れた。此學校は彼の母校であるから、相談は容易に纏つた。最初の一年はハードホード市の第四教會から特に私の雜費として若干金を寄贈して呉れることになつた。神學校では第二年目から學生が地方の教會で說教することを許すことになつて居るから、これにより相當の收入を得ることが出來る。私は殊に日本人であるといふので說教や演說のために招待されることが少なくなかつたのであるから、豫定以上に收入を得ることが出來た。ハードホード神學校は神學校中でも可なり保守的な學校であつて、新神學などには全く反對であつたことは豫め承知して居たけれども、教場に於ける授業時間は每週僅に十五時間であるといふことを聞いて居たから、其他の時間は自分の思ふまゝに費すことが出來ると考へた。私は同志社に於ても亦卒業後に於ても獨學の習慣を養成することが出來たゝめ、教場に於ける授業には餘り重きを置かなかつた。要するに私は渡米が第一で、學校は第二の問題として考へて居た。以上述べた通り米國に於ける留學の途は都合よく開けたけれども、私には尙ほ考慮しなければならぬことがあつた。第二は鄕里に在る父母を扶養することゝ、梅花女學校に在る駒尾に學費を送るといふことであつた。これは私の洋行中岡山教會が負擔して呉れることになつたが、父母は既に老境に入つて居るから臨時に費用を要することがあるかも知れない。これは附屬小學時代の同級生塚本道遠に依賴して其父から便宜を與へてもらうことにした。然しこれで凡ての問題が解決せられた譯ではない。第三の問題は渡米旅費であつた。私は旅費として幾何を要したかを記憶しないけれども、多分五百圓位ではなかつたかと思ふ。これも塚本の厚意により彼の友人から借りることにした。私が渡米の目的を達するやうになつたのは勿論岡山教會に負ふ所が多いけれども、友人塚本に負ふ所も亦決して少なくない。以上述べた所に據るも私の渡米には可なりの無理があつたことが判る。勿論私は血氣に驅られてこれを斷行したけれども、歸朝後其負債を償還するためには少からぬ困難を感じた。父も私の留守中には二三百圓の負債をして居た。父の負債にも私の負債にも相當の利子を拂ふ約束であつたから、私が歸朝した時には元利合計千圓以上になつて居た。若し私が永く教會に止まつて居たならば永久に此負債を償却することが出來なかつたかも知れない。然し私は明治廿八年二月に歸朝し同三十年八月には岡山教會の諒解を得て三たび同志社に復歸することにな

つた。更に同卅年五月には東京專門學校の教師となつたのであるが、負債を全部償却するには殆んど二十年を費した。これを思へば私の洋行は私に取りて可なり高價のものであつたに相違ない。約三年半の外遊のため二十年間もつまらぬ重荷を負うたといふことは如何にも無分別のことゝ思はれるかも知れないが、私は決してこれを後悔したことはない。何となれば私は洋行することにより、豫期の如く二つの問題を滿足に解決することが出來たからである。これは後段に於て述べることにする。私は宗教問題を解決するには獨逸に留學することの如何に必要なるかを感じて居た。言ふまでもなく私の宗教思想に變動を來したのは新神學であつて、新神學の本場は獨逸である。殊に私が行かんとして居る神學校は極端に保守的であるから、私の疑問を解決するには餘りに緣が遠い。だから米國に於ける三年の課程を終つた後には是非獨逸留學の計畫を立てねばならぬ。これが其當時に於ける私の決心であつた。斯る場合に於ても私に低級なる競爭心が絕えず働いて居た。附屬小學卒業後第一に鄕里を出で、京都に遊學したのは私であつた。同志社卒業の時に於ても私は同級生中可なり優秀なる成績を擧げた。然るに今は果して如何。同級生十八人中七人は既に洋行して居るのに、私は全く落伍者となつて居る。これは餘儀なき運命のためであるとは言へ、餘りにも口惜しきことである。然し同級生の洋行は何れも米國だけに限られて居るのだから、若し私が獨逸に洋行することになれば、忽ちにして名譽を回復することが出來る。斯くして私は依然として同級生の先頭に立ち得るのである。これは實に世間並の小名譽心であつて、今から考ふれば赤面の至りであるけれども、其當時の氣持がその通りであつたことは事實である。斯の如く私が米國留學のため絕えず準備をなしつゝあつたことは教會員も大體諒解して居たのであるから、いよ〳〵明治廿二年九月廿一日岡山教會の臨時大會を開き、此問題を提出することになつた。教會は勿論全會一致でこれを可決したのである。但し渡米は翌年八月に實行するといふことであつた。既に渡米のことも決し、岡山教會に於ける私の位地も安定したのであるから、教會の希望により私は明治廿四年四月三日按手禮を受くることになつた。これは基督教宣傳者に取りては重要なる儀式であつて、數年間宗教宣傳に從事し、充分に教會員の信任を得た者でなければ、この儀式を受くることは出來ないのである。殊に私の如き若年者は單に年齡といふ點から見ても其資格がない、故に按手禮を受けて居ないものは、よし牧師と呼ばれて居ても、其實は假牧師であるか、傳道師である。故に按手禮は其候補者自身が志願するよりも、寧ろ教會員若くは同僚からこれを推薦するといふのが普通であつた。私は既に廿七歲であり、教會に關係してから四年の經驗を有して居るといふので、教會員は勿論、先輩からも催促を受けるやうになつた。私も教會の宗教運動には興味を有して居るのであるから、喜んでこれを承諾した。これで私は一人前の牧師となつた譯である。

第十四章　米國留學

出發と海路　明治廿四年七月廿一日私は多數の教會員に送られて岡山を出發した。其當時山陽線の一部は既に開通して居たのであるから、私は神戸まで汽車を利用し、神戸からは汽船を利用して郷里に歸ることにした。駒尾も既に夏休暇を迎へて居たのであるから、私と共に歸郷することになつた。船は途中安藝の宮嶋に數時間碇泊することになつたので、私共は兼て其名を聞いて居た日本三景の一を見ることが出來た。時恰も滿潮であつて、廻廊は恰も海上に浮んで居るが如くに見えた。千疊敷と稱せられる大寺院や紅葉谷の景色は今尚ほ私の記憶に殘つて居る。歸郷後約十五日間私は父母兄弟や親戚と共に樂しき日を送り、八月十日いよ〳〵出發することにした。博多から小倉までは汽車に乘り、門司から横濱までは汽船を利用することにした。先づ第一に神奈川縣廳を訪問して旅券の下附を出願した。現在米國行の旅券を得るには實に面倒なる手續を要するけれども、排日問題の全然なかつた其當時に於ては實に簡單であつた。其頃の汽船は殆んど全部外國船であつたから、渡米者は否應なしに之に乘る外はなかつた。私はゲーリックと稱する外國船の二等客として渡航する豫定であつたが、少し申込が遲れたゝめ、遂に三等室で辛棒しなければならぬやうになつた。勿論三等客であつても米國上陸の際今日の如き嚴重なる試驗を受けることはないのであるから、上陸を拒絶せられるが如き虞れは毫もなかつた。然し二等室がないといふのは一種の計略であつた。ゲーリックは八月廿一日午前九時横濱を出帆した。船が陸を離れて間もなく一人の外國船員は三等客室に來り、四人を收容することの出來る一室があるから、若し四人で七拾圓を拂へば二等客として待遇すべしといふことを振れ廻つた。これは素敵だと考へて私は先づ第一に申込んだ。續いて忽ち申込者が三人出來た。部屋は上甲板に在つて空氣の流通は宜く、食物には何等不足の點がなかつた。僅に十八圓位の割增で三等客から二等客に昇進した私共の幸運は言ふまでもないが、船員が此の如き特別なる手段を取つたのには多少不正の點があつたのではないかとも疑はれる。現今横濱桑港間を航海する汽船は何れも完全なる設備を有し、殊に船客のためには種々なる娯樂機關を設けて居るから、比較的永い航海にも何等徒然を感ずるといふことはないけれども、明治廿四年頃の二三等船客は實に悲慘なものであつた。私が其時同室した三人の中一人は全く記憶の中にないけれども、二人は今尚ほ覺えて居る。一人は其頃桑港に於て絹織物の販賣店を經營して居る甲斐織江といふ實業家であつた。私が明治卅八年早稻田大學の野球團と共に渡米した時偶然にも桑港に於て甲斐の店の前を通行したことがある。其後渡米野球選手の

一人であつた森本繁雄が甲斐の店で働いたことのあるのも不思議の緣といふべきである。其後に於ける甲斐の消息は少しも聞かないのであるが、彼は私よりも大分年長者であるから、今は既に不歸の客となつて居るのではないかと思ふ。今一人の同室者は河野徹士である。彼は醫學研究の目的で渡米するのだというて居たが、歸朝後殆んど彼の消息に就ては知る所がなかつた。然し彼が大阪府選出の代議士として議會に現はれた時私は恰も舊知に再會したやうな氣がした。其後書面の往復はしたけれども未だ再會の機會を得て居ない。彼は今大阪に於て病院を經營して居る。船中に於ける私共の生活は無味乾燥であつたけれども、前途には希望が輝いて居たのであるから、何等不平を感ずることはなかつた。九月三日の正午無事桑港に着いた時私は初めて自分の理想が實現したかのやうに感じた。最初日本を出發する時にも私には全く同行者といふものがなかつたのであるが、桑港に上陸した後も私は依然として一人であつた。先づコスモポリタンホテルに案内され、午後は市内の見物をなし、夜分は汽車旅行に必要なるものを買ふため店に出かけた。

大陸横斷　桑港からボストンまでは直行しても約五晝夜以上を要するのであるから、充分食物を用意することが便利であると聞いて居たので、私はこれをホテルに相談した。ホテルは大なるバスケットに種々なる食料品を詰めて呉れたので、私はこれを携へて九月四日の午後シカゴ行の汽車に乘込んだ。別に寢臺もなしに旅行したのであるから、可なり苦い思ひをした。二日位でバスケットに在る食料品も盡きてしまつたから、其後は三度の食事時間に汽車が十分乃至十五分停車するのを利用して停車場の飲食店で食事することにした。然しこれは日本人に取りて危險な藝當であるから、私は其度毎に食料品を買うて、これを汽車に持込むことにした。萬一汽車に乘り後れるやうなことがあつては取り返しがつかないからである。私は途中何等の失敗もなく、九月九日午前七時シカゴ市に到着することが出來た。ボストンに行く途中キャンナンデグァといふ所に立寄る豫定であつたが、同所行の汽車は午後三時の發車であつたから、約八時間の餘裕がある。私は五晩打續きて安眠することが出來なかつたから、見物よりも食事よりも先づ第一に睡眠を要求した。私は遂にホテルに行つて午後二時頃まで眠り續けた。午後三時いよ〳〵ボストン行の汽車に乘込んだが、私はキャンナンデグァといふ所に下車した。これは日本出發の時からの豫定であつた。岡山在留の女宣教師は此地の教會に關係があるので、私のために豫め教會や知人達に手紙を出して呉れたのだから、恰も知人を訪問するやうな期待を以て其日の午後八時頃下車することになつた。不幸にして教會の牧師は旅行中であつたけれども、私は教會員の宅で歡待され遂に一夜を過した。其時は單に一夜の滯在に過ぎなかつたけれども、私は同年の冬休暇中に再び此所を訪問し、約一週間牧師の宅で客となつたことがある。十一日の午後

にキャンナンデグアを出發し、十二日午前十一時頃ボストンに到着した。ステーションでは同級生の村井知至と岸本能武太が迎へに來て呉れたので私共は暖かき握手をなして相互の無事を祝した。岸本はボストンに隣接せるケンブリッヂ市のハーヴァード大學で勉強して居た。村井はボストンから少し離れたアンドヴァー神學校に學んで居たのであるが、私を迎へるためボストンに出て來たのである。私共は一先づ岸本の下宿に集合して積る話に日の過ぐるを忘れたのであつた。前にも述べた如く私共が同志社を卒業した後にも五人だけは常に手紙を往復して親交を繼續し、自ら五友と稱して居た位であるが、今其中の三人が天涯萬里の地に於て再會したのであるから、其愉快や實に想像すべきである。私は五日間をハーヴァード大學の附近に在る岸本の下宿で過したのであるけれども、大學を見物した以外私には何等の記憶もない。然し私の學んだハートホードとボストンは約四五時間で旅行の出來る所であるから、冬休暇などに私は度々ボストンを訪問し、其度毎に觀光をもなした。殊に大正十年私が早大野球團と共に渡米した序を以てボストンを訪問した際には一層多く觀光する機會を得た。殊に私が嬉しく感じたのはハーヴァード大學の有名なる教授に面會することが出來たといふことである。ピーボディー教授は嘗て日本に來た時岸本や私も面會した關係があつたので、私は一晩同教授の客として招待されることになつた。其當時私の女婿赤木英道もボストンに居たので案内を受けた。私共二人を大學の教授達に招介するために、ピーボディー博士は七八名を招待して呉れた。其中には經濟學者として有名なるタウシッグ博士も居た。大學總長エリオット博士は差支が生じたため出席しなかつた。兎に角一流の學者達と一夕二三時間に亙つて懇談することの出來たのは私に取りて大なる愉快であり、且つ榮譽であつた。其夜赤木と私はピーボディー博士の家に一泊した。翌日私は早大野球選手と共にボストン郊外のコンコールドや其他の名所に案内された。其歸路私共は總長エリオット博士の宅を訪問して親しく其高風に接することが出來た。以上述べた所のことは私が學生として渡米した時から約三十年後のことである。斯の如く私は比較的よくボストン及び其郊外を知つて居るに拘はらず一度もアンドヴァー神學校を訪問する機會を得なかつたことを今でも遺憾に思ふて居る。此神學校は單に其當時村井が學んで居た所だといふのみでなく、實に恩師新島先生の母校である。後年此神學校はハーヴァード大學に合併されたのであるから、今尚ほ舊態を存して居るか否かは明でない。兎に角新馬先生は神學校に學ばれて居ても度々ボストンを訪問されたことゝ思はれる。何となれば先生が初めてボストンに到着されてから以後、常に先生を子の如く愛撫して呉れた人は此ボストンに住めるハーディーといふ商業家であつたからである。斯の如き因緣があるので、私は渡米前からボストンといふ所を最も懷かしき場所であると考へて居た。今日でこそニューヨークやシカゴは物質的に見て遙に

ボストンを凌駕して居るけれども、三四十年前に於けるボストンは確に米國文化の中心であつた。何れの點から見てもボストンは落着いた上品な都合である。新島先生が私共に模範的紳士の典型を示されたのは決して偶然でないと考へさせられた。ボストンに於ては當時第一流の說敎者と稱せられたフイリツプス、ブルツクスが住んで居た。私は渡米前から其名を聞いて居たので、是非一度は彼の說敎を聽きたいと希望して居た。幸にして一日私は其目的を達することが出來た。彼の敎會に入りて先づ驚いたのは可なり廣大なる會堂が殆んど立錐の餘地なきまで人を以て埋められて居るといふことであつた。ブルツクスの說敎は雄辯滔々といふよりも寧ろ咄辯といふのが適評であると思はれる位であつた。然し彼の豐富なる思想と洗練された修辭は聽衆を感動せしめずには置かなかつた。其後私は熱心に彼の說敎集を讀むやうになつた。

ハートホード神學校　私は五日間村井や岸本と愉快なる日を送り、廿四年九月十六日彼等に別れを告げて私は獨りボストンを去つた。ハートホードはボストンとニューヨークの中間に在るのだから、私は勿論ニューヨーク行の汽車に乘つた。然し割合に遲く出發したので、ハートホードに着いた時は既に午後八時であつた。自分の國でも初旅となれば多少の不安を感ずるものであるが、まして外國旅行には此感が一層深い。殊に夜分に到着したのであるから、私はホテルに行くべきか、或は直に學校に行くべきかに迷ふた。學校はステーションに近いのであるか、遠いのであるか、それすら分らない。私は兎に角直ぐ學校に行くことに決心して馬車を雇うた。幸にして學校までは僅に三四町であつた。案内を乞うて名刺を出すと、事務員は待つて居りましたと言はん計りに私を親切に部屋に案内して吳れた。學校の建物は一棟の煉瓦造で鈎形になつて居る。第一階は講堂、敎室、事務室、講師室、圖書室、食堂として使用されて居る。二階及び三階は全部學生の寄宿舍として用ひられて居る。私は直に三階の一室に案内された。部屋は勉强室と寢室の二つに分れて居る。勉强室にはテーブル一個と二三脚の椅子と書棚が備へ附けてある。寢室には寢臺の外に洗面臺がある。洗面器と水瓶との外に使つた水を棄てるバケツもある。學生は每朝其使つた水を便所に運びて棄てることになつて居る。寢室には押入もあれば簞笥もあるのだから、衣服類は一切其處に仕舞つて置くことが出來る。部屋は決して立派といふ程ではないが、學生に取りては實に便利よく出來て居る。冬になればスティームで部屋を暖めることになつて居り、食堂は第一階にあるのだから、何一として不自由なことはない。地下室には浴室が設けてあるから、每週數回入浴することも出來る。學生生活としては餘りに贅澤過ぎるやうに思はれた。只一つ現代生活に比して不自由と感ぜられたのは石油ランプを用ゆることであつた。講堂、食堂、敎室等には既に電燈を用ひて居たけれども、寄宿舍では全部石油ランプを用ひた。然し渡米前

日本に於ては未だ電燈を用ひて居なかつたから、私に取りてはそれが全く當然のことであると考へられた。私は此學校で約三年を送つたのであるが、學校生活を比較的詳細に述べる前にハートホード市に就て少しく話して見たいと思ふ。此都市はカンネチカット州の首府であつて、其當時の人口は約十萬位であつたと記憶する。市は平原の中に在つて、其附近にはこれといふ程の山がない。其東端にはカンネチカット川が靜に流れて居る。だからハートホードとニューヨークの間には此川を利用して定期船が通ふて居る。神學校は市の商業區から多少離れて居るので、少しも騷音のために勉強を妨げられるやうな心配がない。神學校に相對して堂々たる建物がある。これはハイスクールと稱する中學程度の學校であつて、嘗て東京市長であつた田尻稻次郎の學んだ所であるといふことを聽いた。私は或時學校の附近に住んで居るヴァーバンクといふ老婦人に招かれた。田尻は其婦人の家に寄宿して毎日通學して居たそうだ。其當時から田尻は實に優秀なる青年であつたと其婦人は口を極めて激賞して居た。神學校とハイスクールに接近して立派なる公園があつた。公園の中央には州廳があつて、私はこれを見る毎に實に立派なる建築物であると感じた。學校として最も大なるものはツリニティー、カリジであつた。これは堂々たる石造であつて、斷崖の上に聳えて居る。遠くからこれを眺むると恰も城廓であるかの如く見えた。ハートホード市には又五六の大教會堂があつた。有名なる神學者であり、說教家であつたブシュネルの教會も記念として遺つて居た。社會事業としても有名なるものが二つあつた。第一は精神病院であつて、第二は盲啞院である。盲啞院はコンネチカット州のみでなく、他の諸州のためにも其門戸を開放して居た。斯の如くハートホード市は宗教や社會事業の中心地であつたのみでなく、一流の文學者を有するといふ點に於ても亦誇ることが出來たのである。其當時諧謔文學者として廣く天下に知られて居たマーク・トウエーンは私共の神學校の附近に住んで居た。私は殆んど毎日其家の前を散步するのであつた。彼の家には何人も見逃すことの出來ぬ特徵があつた。其れは普通の家とは反對に臺所が前に在つて、入口が後に在つたといふことである。彼は何處までも滑稽味を徹底せしめて居たのであつた。彼の外にダッドリー・ワーナーといふ文學者も居た。然し最も有名なる文學者は『アンクル、トムス、キャビン』の著者であるハリエット・ビーチャー・ストウ夫人であつた。私も愛讀者の一人であるが、偶然にも二度其夫人を見ることが出來た。夫人は既に老境に達して居たのみでなく、精神にも多少異狀があつたので、散步する時にも常に看護婦が同伴して居た。一度は夫人が大聲を發して何事かを言つたのであるが、擧動には何等異つた所はなかつた。兎に角私は夫人を見ることが出來たのを幸運だと思うて居る。斯の如くハートホードは上品にして靜寂なる點に於てボストン以上である。私は三年間の留學が如何に私に有益であつたかを考へる時心から感

謝せざるを得ない。大正十年早大野球團と共にボストンからニューヨークに赴く途中私のみはハートホードに下車して神學校を訪問し、數名の恩師にも面會して昔を語る機會を得た。神學校は其後益發展したので、他に移轉することゝなり、廣き敷地を得て數棟の石造建物を見るに至つた。

第十五章　米國學生々活

コスモポリタン　神學校に於ける私共の生活は同志社に於ける生活と大分異なる所があるから、大略これを述べることにする。學生數は全體で約四十人位、私の同級生は十四五人位であつた。同志社生活は日本人同志のことであるから、如何にも打解けた氣持であつたが、神學校に於ては言語の關係上暫くは同級生とも親密になれなかつた。前に述べた如く、私は渡米前に於ても屢外國人のために通譯の勞を取つた位であり、大概のことは英語で用が辨ぜられたのであるから、私は其點に於て自信を有して居たのである。然しいよ〳〵渡米して見ると、自分の英語が如何に貧弱なるものであるかといふことが痛切に感ぜられた。桑港に着くや否や私は賣店に行き、或物を二個求めて其價を問ふたが、ツークオータースと答へたのであつた。私にはどうしても其意味が判らない。二度繰返して尋ねると、矢張り同じ返事だ。判らないといふのも殘念だから、兎に角一弗の紙幣を出すと、五十仙の釣錢を呉れた。其後或人にツークオータースの意味を質問すると、それは五十仙といふことだ。クオーターは四分の一といふことであるから、一弗の四分の一、即ち二十五仙といふ意味である。米國に

は二十五仙の銀貨があり、私が一個二十五仙の物を二個購ふたので、先方がツー・クオータースと答へた譯である。これが渡米後第一回の失敗（そうとは言へないかも知れぬが）であつて、其後何回失敗したかも知れない。例せば私は旅館の食堂で次の如き經驗をしたことがある。私は給仕人にビーフステーキと馬鈴薯を注文したが中々先方に通じない。私は二三度ポテトーを繰返したが、給仕人は『ハハーポテートですか』と言ふて微笑した。これは全く私がアクセントを間違へて居たゝめだ。私は早速部屋に歸つて辭書を調べて見たが、馬鈴薯はポテトーにあらずしてポテートであることが判つた。これは一例に過ぎないけれど、實際私の英語はなつてなかつた。然しこれは私の責任のみではなく、其當時の英語教授に其罪を歸しなければならぬ。同士志には數人の米國教師が教鞭を執つて居たにも拘はらず、英語を英語として教へて呉れるものは一人もなかつた。生徒も亦英書を理會し得るために英語を學んだのであるから、發音やアクセント等には殆んど全く不注意であつた。然しこれ以上に私が悲觀したことは教場に於ける教師の講義を充分に理解し得なかつたことである。日本に在留して居る米國教師や、時に日本を訪問した外國人は、日本人に向つて演說する場合出來るだけ緩やかに話すのであるが、米國に於ける人々は日本人に對して何の遠慮もない。教室内に於ける教師は勿論のこと、寄宿舍に於ける學生達も別段私だけのことを顧みては呉れない。早口で滑稽交りの談話などやつて居る時には、私は全く自分の英語が拙劣であることを痛感した。然しさすがは宗教學校であるだけに教師も學生も私に對して頗る親切であつたから、英語が拙劣であるにも拘はらず、私は實に愉快なる生活をなすことが出來た。殊に私の組は異なれる人種の集合であつたから、これをコスモポリタンと稱しても決して過言ではないやうに思はれた。同級生十三人の中二人は黑人であつた。其中一人は佛國人との混血兒であつたから、殆んど日本人位に見へたが、今一人は純粹の黑人であつた。其外にアルメニヤ人が一人と東洋人たる私が居たから、合計四人は米國人ではなかつた。然し人類愛を以て原則として居る學校のことであるから、人種的僻見といふが如きことは毫も有り得なかつた。私は常に同級生が黑人に對して如何なる態度を取るかにつき可なり周到なる注意を拂うて居たけれども、唯の一度でも不愉快に思はれるやうなことは起らなかつた。これは全く宗教の力であると言はなければならぬ。以上は單に私の同級生のみに就て言うたのであるが、學生全體に就ても同樣のことが言はれるのであつた。私の在學中日本人は唯私一人のみであつた。然し私よりも先きに此學校で學んだ日本人があつた。其れは宗教家として有名なる内村鑑三である。彼が卒業するまで此神學校に居たか否かは知らないけれども、彼は在學中非常なる勉强家として知られて居たことは彼を知れる人々の證言によりても明である。内村が日本人として良い印象を知人に與へて呉れたゝめ、ハートホードに於

ける日本人に對する人々の信用は極めて厚かつた。私も其恩惠を受くることが少なくなかつた。斯の如く神學校に於て學んだ日本人は內村が一番で、私が二番であつたが、其後日本人にして此學校に學んだ者は可なりの數に上つたやうである。

自治的生活　學生數は僅に四十名餘であつたから、殆んど一家族の如き親しさをもつことが出來た。殊に私が米國の學生々活を見て最も多く感服したのは彼等が自治の精神に富んで居るといふことであつた。同志社は多く米國の學校生活を模倣して居るに拘はらず、食堂は一切學校が經營することになつて居た。然しハートホード神學校に於ては學生が委員を選擧して食堂の世話をさせたのである。卽ち二人の委員が食堂に關する一切の責任を引受けるのである。各學生から每月食費を徵收することは勿論のこと、料理人として黑人一名、給仕人として二名の女を雇入れ、これに每月給料を拂ふこと每日食事の献立表を作ること等、これが委員の職務である。二名の委員は其報酬として食費を免ぜられることになつて居る。此外に洗濯委員なるものが一人選擧されるのである。學生には一々可なり大きなバスケットが與へられて居る。學生は汚れたシャツ、カラー、ハンケチ、靴足袋といふが如きものを此バスケットに入れ、每週規定の日までに地下室の或一定の場所に持行くのである。尙ほ各學生には洗濯物の種類を記入するため印刷した紙片が渡されて居るのだから、學生は其紙片に洗濯物の種類を記入すると同時に自分の名を記し、これをバスケットに入れる。委員は一々これを洗濯屋に渡し、洗濯屋が再びこれを持來る時、委員は一々各學生のバスケットにこれを配置するのである。これは每週一回行ふのであるけれども、洗濯代は每月一回各學生からこれを徵收することになつて居る。而して委員は其徵收した金額の中から相當の報酬を得るのである。これは單に一二の例に過ぎないのであるが、學生は殆んど如何なることでも自治的に實行することになつて居る。教師は單に教室內で授業するのみで、其他のことは學生が一切これを引受けて居る。これは私が最も美ましく思ふた點である。更に自治的精神の表現とも言ふべき實例につき少しく述べて見たい。或時行はれた試驗の場合に於て私は實に愉快なることを經驗した。或老教師は私共同級生に試驗問題を提出した後自分は今から講師室で休息して居るから、若し答案が出來たらば誰かこれを一纏にして講師室に持參してもらひたいと言ひ終つて直に教場を退出した。これは私に取りて珍らしき經驗であつたから、私の同級生が如何なる態度を取るかといふことを非常なる興味を以て見て居た。學生は熱心にペンを走らせて居るだけで誰一人聲を發するものはない。一時間も經た後『大分腹が減つたなー』と一人が聲を發した。『僕が食堂で何か探してきようか』と一人が應へた。『贊成々々』といふ聲が聽へた。私共の教場は食堂の隣りであつたから、一人は起ち上つて食堂に行つた。間もなくクラツカー（ビスケットの如き